SEIJU
2024年
第54巻

成寿

冬季

■令和六年二月九日

■開山忌

■善光寺留学僧
育英会辞令交付式

開山忌導師：黒田法正老師

令和六年二月九日午後二時より開山忌並びに第三十七回横浜善光寺留学僧育英会辞令交付式が釈迦殿にて厳修されました。

開山忌は、岡山県観音寺住職・黒田法正老師の導師にて厳修。法正老師は御開山様の孫弟子にあたり、博志方丈の従兄でもあります。日頃より、檀務等で善光寺をお支え下さっていらっしゃいます。法正老師は法語の中で「潜行密用は、愚の如く魯の如し。只能く相続するを、主中の主と名づく」と宝鏡三昧の一節を述べられ、その意を次のようにお話し下さいました。

「御開山様の白純老師は人づくりの大事を誓願として歩まれた方でした。有言実行の姿勢で私達を育てて下さいました」と、在りし日の御開山様を偲び、その恩に報いる為に、脈々と継がれた教えを、博志方丈が愚直に行じていること、開山忌、そして育英会を継続する意義を熱く語られました。

左：金 柳冏師　右：永井雄大師

安藤嘉則理事

引き続き、第三十七回育英会辞令交付式を開催。まず駒沢女子大学学長・安藤嘉則理事より選考経過が報告されました。今年度育英生に採用された方は、韓国出身の金柳冏師と永井雄大師の二名。

金 柳冏師は韓国曹渓宗の僧侶で、駒澤大学大学院修士課程を修了後、更に駒澤大学にて『梵網経』の研究を続ける予定。

永井雄大師は慶應義塾大学理工学部卒業後、大本山永平寺にて修行。現在は駒澤大学大学院に在学中で、修士課程修了後アメリカで修行を重ねる予定です。一年半ほど前より、縁あって善光寺で檀務等を共にお勤めしていました。

最後に、博志理事長が、「育英会は多くの檀信徒やご寺院のご支援を頂き約一五〇名の育英生を数えます。私も日々精進して参りますが、どうぞ、共におおらかな心で日々励んで下さい」と挨拶されました。

■令和六年五月九日

大本山總持寺参拝

太祖常済大師瑩山禅師七〇〇回大遠忌

去る令和六年五月九日、青葉よろこぶ翠雨の中、檀信徒の皆さまと共に大本山總持寺に参拝させて頂きました。本年は御開山瑩山紹瑾禅師七百回大遠忌法要が厳修されています。この大遠忌をご縁として、昨年から二年に亘って曹洞宗寺院が参拝の為に全国から集まるのです。

到着後は、案内の和尚さまに先導していただき、坐禅や食事、睡眠など主な修行をする「大僧堂」や、長さ一六四メートル、東西の殿堂群をつなぎ合わせる通称「百間廊下」など、總持寺の広大な伽藍ならではの御堂や見所を拝観することができました。

大僧堂

大黒尊天

百間廊下

千畳敷の「大祖堂」は、開山堂と法堂を兼ねており、大遠忌のすべての法要が行われます。法要中の注意点や焼香の説明を受けしばらくすると、お勤めの和尚さまたちが入堂し、厳かに法要が始まりました。

まずは、瑩山禅師、歴住の禅師さまへのご挨拶「拝登諷経」と、「檀信徒供養」を執り行いました。読経が続く中、大きな御堂の中心を進み、焼香に向かう参列の皆さまの表情には、少しの緊張と、本山でご供養できている喜悦の心が表れているように見受けられました。

引き続き、厳修されたのは、当山二世中興大圓武志大和尚への報恩のご供養「尊宿諷経」と、「入祖堂法要」です。

入祖堂とは「入牌祖堂式」を略したもので、總持寺にて日日ご供養していただく為に、瑩山禅師のお膝元に新しくお位牌を納める法要です。

位牌開眼される石附禅師

この法要の導師は大本山總持寺貫首・石附周行禅師がお勤め下さいました。石附禅師と先代住職は旧知の仲であり、法要後は特別にご挨拶をいただくことができました。總持寺安居時代や、タイで修行した時のことなど、当時の思い出をお話し下さいました。ご挨拶の最後、「晩年は互いに忙しく、中々お会いできませんでした。今回、お位牌を總持寺でお預かりしたので、これからは毎日お参りをさせていただきます」とのお言葉に、博志方丈の感極まる様子が印象的でした。

法要後は、皆さまと共に精進料理を頂戴し、お食事のお唱えごとや作法などを学びながら、修行道場の味を堪能しました。

五十年に一度行われる大遠忌法要は、私たちが存命中、再びいただける機運ではありません。改めて、皆さまと共に素晴らしいご縁を頂戴できましたこと感謝申し上げます。

石附禅師よりご挨拶を賜りました

上の写真のお位牌
右：大圓武志大和尚
左：御開山楳庵白純大和尚

大遠忌

カラー■開山忌　善光寺留学僧育英会辞令交付式……1
■大本山總持寺　瑩山禅師七〇〇回大遠忌　参拝……5
法話●住職法話　「お彼岸の行い」「御馳走」「大黒天」「チュンダの供養」……黒田　博志　16
連載●『普勧坐禅儀』に学ぶ　その十八……安藤　嘉則　32
法話●「慈母の願い」～梅花流詠讃歌の調べ～……渡邊　清徳　38
●「繋がりのなかに生きる」……水庭　浩章　48
カラー■善光院殿慈照大倫禅尼　黒田倫子　大夜・葬儀……61
●通夜説教……69
●追悼文　弔辞　弔電……71
●ニュースアラカルト……92
アーカイブ■『ただひたすら夢に生きる』（『成寿』第三十三巻より）……黒田　武志　108
寄稿●育英生からの報告　「菩薩の戒に学ぶ」……和田　賢宗　128
お知らせ●留学僧募集……134
●善光寺霊園ニュース……136
毎月の催事　180　育英会寄付　187　總持寺参拝のご感想・読者のたより　190　編集後記　198
……題字・イラスト　伊藤三喜庵

巻頭言

善光寺住職　黒田博志

今年元日に起きた能登半島地震で被害に遭われた方々に心よりお見舞いを申し上げます。ご家族や大切な方々を亡くされた皆さまに謹んでお悔やみを申し上げ、一日も早い復旧・復興を衷心よりお祈り申し上げます。

本年は大本山總持寺御開山瑩山禅師七百回大遠忌の年でありました。五月には檀信徒の皆さまと一緒に總持寺へ参拝することが出来ました。またその際に師父のお位牌を總持寺に納めることが出来ました（入祖堂）。お位牌の開眼を石附周行猊下にお勤め頂けたこと師父も喜んでいることと存じます。

石附猊下と師父は大学時代からのご縁で、開眼法要後には、檀信徒の皆さまに向けて「黒田武志老師とは、總持寺やタイのワットパクナムで共に修行をした仲です。これから毎朝、この大祖堂でお会いできると思うと有り難いですね」と親しみを込めてお話し下さり感激致しました。

平成二十九年には大本山永平寺にお位牌をお納めし、今回大本山總持寺にお納めすることが出来、両本山に師父のお位牌を納めることが叶いました。

師父が開創以来掲げた『宗祖を通じて釈尊に還る』。道元禅師様、瑩山禅師様の教えに触れ、お釈迦様のみ教えに親しみ、すべての方々が心穏やかに過ごせますようにと、私自身も微力ながら尽くしている日々です。

今年の「曹洞宗管長告諭」において、南澤道人管長は、道元禅師の『回向返照の退歩を学すべし』とのお言葉に触れ、『歩みを止め、息を調え、一歩も三歩も退いて、自らが行いを仏道に照らし謙虚に顧みよ』と説かれておられます。

さらには瑩山禅師の『必ず和合和睦の思いを生ずべし』とのお言葉に触れ、『和合

調和を乱すのは、何時の世も人間の我利、我欲、すなわち貪りであります。その貪りこそが苦悩の源であり、対立闘争の根源なのです』と説かれておられます。

自分さえよければ……という自己中心的な考え方。その考えに基づいて行う善悪の判断。顕著なコスパ重視の価値観からでしょうか、人々の視野が狭くなり、社会の寛容さが失われている感もあります。気候変動、国際紛争、貧困・差別・格差など、現在の社会が抱える様々な問題を一朝一夕に解消するような解決策はないのかも知れません。しかし、このような時代だからこそ、なおさら「宗祖を通じて釈尊に還り」その教えを学び、身をもって実践していかなくてはならないと改めて思いを深くしております。一人ひとりの力は微力でも大勢集まれば大きな力となります。来る年も檀信徒の皆さまと共に仏道を学び歩んで参ります。

最後になりますが、今年五月十七日に母、黒田倫子が亡くなりました。

母は善光寺の歴史そのものでした。師父を支え三十五年。師父遷化後、息子である

私を助けて下さり二十年。実に五十五年の長きにわたり善光寺と共に歩まれました。
秉炬（ひんこ）仏事師を本寺光真寺黒田泰弘老師、大夜仏事師を福厳寺新美昌道老師にお勤めいただき無事葬儀を執り行うことが出来ました。有難うございました。
私達子供には多くを語らない母でしたが、生前の母の人柄や後ろ姿を思い浮かべ、どのような形でお送りするのが良いか考えながら葬儀を営みました。教区の御寺院さまを中心に、法類の御寺院さま、半世紀にわたる善光寺の歴史でご縁を頂戴した御寺院さま、檀信徒の皆さま、近隣や知己の皆さまなど多くの方々がご焼香にお越し下さりました。また、来山が叶わない方々もお心を寄せていただき、お言葉を掛けて下さいました。衷心より篤く篤く御礼申し上げます。両親が身をもって示して来た教えをしっかりと継いで、皆さまに安心していただけるお寺を護持して参ります。
今後とも宜しくお願い申し上げます。

合掌

■住職法話

「お彼岸の行い」

善光寺住職　黒田博志

昨日より秋彼岸となります。

秋彼岸とは、秋分の日とその前後三日の計七日間をいいます。

秋分の日は春分の日と同様に昼と夜の時間が同じになります。どちらにも偏らない、故に、私たち仏教徒にとっては彼岸会といって大切な供養の日と定めております。

彼岸とは、「彼の岸」と書きます。こちら側、此岸に対して、あちら側、彼岸ということです。

一般的には、此岸は迷いの世界、彼岸は悟りの世界と言われています。

日々、修行を重ねていくことにより、悟りの境涯、彼岸に渡ることが出来る。そして、彼岸に渡ったら素晴らしい安楽の世界に安住することができる。

では、その彼岸とはどこにあるのか。亡くなってから逝くところなのか。非常に難しい問題です。

その彼岸のことを、曹洞宗大本山永平寺を開かれた道元禅師様は次のようにお示しになられています。「ひたすらに正しい行を修めている姿が、お悟りの姿そのものである。つまり、その足下はいつでもさとりの真っ只中、彼岸になる」と。

修行した結果、彼岸という別世界に行くので

はない。修行している自分自身の足元が彼岸になってくる。彼岸は行くところではなく、彼岸の方からこちらにやってくる。いま、この瞬間が、素晴らしき世界になる、ということです。

それには実践が必要です。実践なくして彼岸はありません。

そこで、今日は彼岸を体得するための「六波羅蜜」という実践徳目のお話をいたします。これは大乗仏教において菩薩に課せられた六つの修行です。

これからのお話は、起承転結をつけた法話というよりは、六つの徳目の説明が中心になりますが、その中の一つでも、皆さま方の生活にお役に立てればという思いでお話しさせていただきます。

一つ目に布施です。

布施には三つの種類があります。

まず、財施といい、衣食などの物資を与えること。

次に、法施といい、教えを説き与えること。

そして、無畏施といい、怖れを取り除くこと。

布施というと我々僧侶に対する財施というものが思い浮かぶと思いますが、今お伝えしたように財施のみならず、教えを説き与えること、怖れを取り除くことも大事な布施行です。

布施行とは人に何かを差し上げるときに、差し上げたという思いを起こさずに差し上げることです。何々を「してあげた」という思いも残さずにすること。人に何かをあげると「何かをしてあげた」と思ってしまうことがあると思います。

しかし、自分がしてあげた、自分が物をあげた、あの人から物を受け取ったと、そのような思いを一切起こさずに行じることです。そのような思いを起こせば、様々な打算や忖度が生ま

れます。それは、苦しみの原因となるものです。

「施す側」「受ける側」「施される物」の三つに、全く執著がないことが大事です。その物が高価であるとか、高価ではないとか、好きなものとか、嫌いなものといった、人間の都合で作られた価値観を離れたものでなくてはなりません。

「和顔愛語」という教えがあります。字の如く「和やかなお顔、愛のあるお言葉を施す」、これも立派な布施行です。

笑顔と優しい言葉です。物がなくても行じることができますので、どなたでもどんな時でもどんな場所でも行うことのできる行です。

私は笑顔と聞くと、アメリカ大リーグで活躍されている大谷翔平選手を思い出します。いつもとてもにこやかに楽しそうに野球をされている姿に、観ているこちらも同じように気持ちが高揚して参ります。

昨年、野球日本代表元監督の栗山英樹さんの講演会を聞く機会がありました。その講演会で大谷選手がとにかく野球一筋に取り組んでいることが分かる、一つのエピソードを紹介してくださいました。

まだ日本ハム時代のころ、クリスマスイブの深夜、球団職員から栗山監督に、クリスマスプレゼントですという動画が送られて来たそうです。それを開いてみると大谷選手がバッティング練習をしている動画でした。監督はそれを観て、後日、大谷選手に「クリスマスイブの深夜にバッティング練習をして、野球以外に楽しいことはないのか」と質問すると、大谷選手から「野球以外に楽しいことってあるのですか?」と逆に質問されたとのことでした。

大谷選手はきっと自分の笑顔で他の人を幸せにしようという気持ちはないと思います。ただただ純粋に野球を楽しみ、野球に対して真っすぐなお心だからこそあのような他の人を幸せに

できる笑顔となるのだと思います。
布施とは、何か特別なことをしなければならないということではありません。日々の生活の中で、困っている人がいれば手を差し伸べる。悲しんでいる人がいれば優しい言葉を掛ける。不安を感じている人がいれば笑顔で安心を与える。いま、自分にできる思いやりを施していくこと、それも立派な「布施」です

二つ目は持戒です。
戒を持つということです。戒はsīla（シーラ）といい、習慣という意味です。良い習慣を持つということです。
私たちが日頃保っている戒に、「三聚浄戒」という戒があります。
これは
第一摂律儀戒…すべての悪を断じることを誓います
第二摂善法戒…すべての善を実行することを誓います
第三摂衆生戒…すべての衆生を救済することを誓います
悪いことはせずに良いことをして人の為になることをしますというお誓いです。
唐代のお話があります。
白居易（はくきょい）という名の知事が、道林という名の和尚に「仏の教えの肝心要なところとはどのようなことでしょう?」と問いました。道林和尚の答えは「悪いことはしない。善いことをする」というものでした。
白居易は「そんなことなら、三歳の子どもでも言えますよ」と言うと、道林和尚は「たとえ三歳の子どもが言えたとしても、八十歳の老翁でも行うことは難しい」と答えました。その答えを聞いた白居易は感激して、礼拝してその場を立ち去ったというお話です。

「悪いことはせず、善いことをする」と、口で言うことは易しいことですが、実行することは難しいということです。

では、悪いこととは何か、善いこととは何か。人間は誰しも本能的に自己中心的な一面を持っています。私自身もついつい自己中心的な行いをしてしまうこともございます。そのような時、他者を無意識に傷つけたり、不快の念を与えてしまうことも多々あると思います。

自分の行動により、他者を不快にさせることはないか、自分の発する言葉によって平和を乱すようなことはないか、そのことは、よくよく考えていかなくてはなりません。

悪いことはせず、良いことをして人の為になることをすることを常に心がけ、習慣とすることがとても大事なことです。このような良き習慣を保ち、心がいつも平穏でいること、それが持戒です。

三つ目は忍辱です。

堪忍すること。耐え忍ぶことです。この行を思うと、師匠と母が頭に浮かびます。

昭和四十四年十二月に師匠と母はこの善光寺に参りました。何もないところからのスタートでした。師匠と母が二人で力を合わせて耐え忍んだからこそ、多くの檀信徒の皆さまとのご縁ができ、皆さま方に支えられ助けられ導かれて、今の善光寺があると思います。

先代住職はこのお寺を建立する際に、趣意書に次のように申しております。

「今般拙僧旧来の仏教に頼ることなく一宗一派の偏見にこだわらずに大聖釈尊の説かれた生きた正しい仏教を高揚し、世界平和と人類福祉の向上に貢献する念願の許に新寺の建立を発願いたしました」

この趣意書にて多くの方々のご援助とご協力を賜り五十五年前に開創されました。

母は晩年、開創時のことを思い出してこんなことを申しておりました。

ご縁の方々から、「先代と一緒になって大変だったでしょう?」とか「いろいろとご苦労が多くてよく耐えられましたね」といわれても、「今日まで一度たりとも、この善光寺に来て大変だとか苦労だとか思ったことはなかったのよ」と申しておりました。「先代と共に檀信徒の皆さまに支えられて、本当に有り難く、充実した人生だったわ」とも申しておりました。

私たち子どもから見ていても、母は自分の好きなこともせず、苦労しているなと子ども心に感じておりましたが、亡くなるまで、苦労したとは一言も言いませんでした。それは、おそらく自分というものを前に出さずに、いつでも善光寺のため、檀信徒皆さまのためにと尽くしてこられたことが、母の人生を充実させてくださったのだろうと感じています。

ですので、忍辱とは、ただ我慢するということではなく、世のため人のために生きることが、自分自身の人生を豊かなものにしてくれるということでしょう。

四つ目は精進です。

精魂を込めてひたすらに進むことです。

お釈迦さまのお弟子さんに周利槃特（しゅりはんどく、チューラパンタカ）というお方がいらっしゃいました。この方はとてももの覚えの悪い方で自分の名前さえ忘れてしまうくらいです。自分の名前の書いた板を背中に背負って、名前を聞かれたら背中を指さして名前を伝えていたといいます。それだけもの覚えが悪いので周りからバカにされてしまいます。

周利槃特にはお兄さまがいらっしゃいました。そのお兄さまは対照的にとても聡明なお方でした。周りの方から比べられてしまいます。

そして皆からバカにされていると「自分はダメだ、ダメだ」と思い込み、みんなには迷惑をかけるし、お釈迦様の顔に泥を塗ってしまう。自分がお坊さんでいるとみんなに迷惑をかけてしまうと思い詰めて、いよいよ僧団を去ろう、お坊さんをやめようと思って泣いていたところに、お釈迦様が現れました。

「周利槃特どうしたんだ」とお釈迦様が尋ねます。すると「自分は物覚えが悪く愚かなのでこれ以上僧団にいるとみんなに迷惑をかけてしまうからお坊さんをやめようと思います」と答えると、お釈迦様は「そうか。でもお前は自分が愚かであると気付けているではないか。この世の中に自分は出来ている。自分は分かっていると思っている人はどれだけいると思う。悟ってないのに悟ったと勘違いして、自分自身を分かっていないものが大勢いる。周利槃特よ、お前は自分が愚かであることに気付いているではないか。それは素晴らしいことなのだ。だったら修行は続けられる」と励まされます。

そして、周利槃特にほうきを渡しておっしゃいました。「『塵を払い、垢を除かん』この言葉だけは覚えなさい。そして、そのほうきで掃除をしなさい」すると、その日から周利槃特は来る日も来る日も「塵を払い、垢を除かん、塵を払い、垢を除かん」と唱えながら、掃除を致します。

ある日、その様子を観ていたお釈迦様から、「あと一つ汚れているところがある。それに早く気づきなさい」と言われます。それでも、黙々と、「塵を払い、垢を除かん」と掃除を続けます。すると、ある時「汚れていたのは自分の心であった」と気付き、そこで悟りを開いたということです。

掃除一つのことを続けることにより悟りを開いた周利槃特。誰しもできることはあります。

そのできることは人それぞれ違いますが、それを続けていくことは簡単なことではありません。継続は力なり。それが修行であり、その姿がお悟り、つまり、彼岸ということです。

五つ目は禅定です。

心静かに瞑想し、真理を観察すること。それによって身心ともに動揺することがなくなり安定した状態のこと。

私たち曹洞宗の僧侶は日々坐禅修行を行います。坐禅とは足を組んで姿勢を正して心穏やかに坐ることです。この坐禅には大切なことが三つあるといわれます

それは調身、調息、調心です。

身体と呼吸と心を調えることです。身体を調えるということは、姿勢を正すということです。

足を組んで腰骨を立てます。すると自然と姿勢が調います。右にも左にも偏らない、前にくぐまることもなく、後ろに仰ぐこともない中心を確認します。そして顎を軽く引きます。眼は閉じずに目線を一メートル先の床下に落とします。

手は法界定印といい、おへその下に右手を置き、その上に左手を置きます。両の親指を軽くつけ、楕円形の形を保ちます。形が調いましたら今度は呼吸です。

欠気一息と申しまして深呼吸を数回繰り返します。まずは息を強く吐き出します。身体の中にある空気を全部吐き出します。すると今度は鼻から空気が一杯入ってきます。身体全体に行きわたることを感じます。この呼吸を数回繰り返します。すると自然と呼吸が調います。

その後は身体が行う呼吸をそのまま受け入れ感じていただきます。すると呼吸、心も自然と調います。これが坐禅です。

六つ目は智慧です。

「智慧とは、一切の現象や現象の背後にある道理を見極める心作用」と仏教辞典にあります。一切の現象や現象の背後にある道理とはお釈迦様がお示しになられた諸行無常、諸法無我ということをしっかりと見極めるということです。

すべての物事現象は無常であるのに、私たちはすっと変わることなくあり続けると思い込み、すべての物事現象は実体がないのに、実体がある、自分のものとしてあり続けると思い込んでいます。そのことをしっかりと見極めるということが智慧ということです。

わかりやすく言えば、ありのままを、ありのままに受け入れて、その中で、どのように行じていくことが大切なのか、どのように生きていくことが幸せなのか、その生き方を説いているのが、今日ご説明いたしました六波羅蜜です。

布施、持戒、忍辱、精進、禅定の実践徳目を一つでも徹底的に行じていれば、自然と智慧が現れてくるということです。求めるのではなく、唯々行じていれば現成してきます。

今日は、ただ六波羅蜜の説明になってしまいましたが、秋彼岸、このお釈迦様のみ教えのもと、皆さまの生活がさらに豊かなものになる、そのお手伝いをさせていただければとの思いでお話しさせていただきました。お互いさま、この彼岸を、心穏やかに過ごして参りましょう。皆さまがたのお幸せを心よりお祈り申し上げ、今日のお話とさせていただきます。誠にありがとうございます。

（善光寺　秋彼岸会　令和六年九月より）

「御馳走（ごちそう）」

「御馳走」という言葉があります。この言葉の由来は韋駄天（いだてん）様がお釈迦様の食事のため、あちこち駆け巡って食物を集めたという話からと言われております。

韋駄天とは、もとはバラモン教の神で、シヴァ神の子。悪魔を打ち破る軍神。これがのち仏教に取り入れられ、仏法の守護神となりました。

増長天の八大将軍の一つとされ、四天王三十二将軍の筆頭に置かれます。特に伽藍を守る神とされ、寺院の厨房などに祀られることがあります。

駿足で知られ、修行僧が悪魔に悩まされるときは、走り来たってこれを救うとされています。俗説に、仏舎利を盗んだ捷疾鬼（しょうしつき）を追いかけて取り返したというので、足の速い神とされ、足の速い人のたとえとしても親しまれている神様です。

多くの修行道場では、厨房に祀られており、食事の準備が調いますと、修行僧に食事を届ける前に、御神前にて食事を司る和尚さまが韋駄天様に代わり、修行僧が食事を摂る僧堂に向かって香を焚きお拝を致します。この作法は、真心込めて作った料理を韋駄天様の駿足にあやかり、いち早く修行僧に供養したいという思いを表現しています。

修行僧は日頃、緩歩と言って常にゆっくり歩くことを心がけますが、この時ばかりは足早に料理を運び、温かいうちに修行僧に届けるのです。

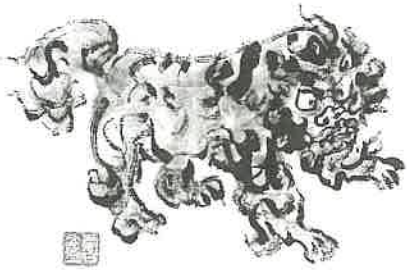
このように準備して下さる皆さまのお心がその料理を御馳走にしてくださっています。

ついつい私たちは、目の前にある料理がおいしいかどうかを判断してしまいがちです。しか

し、すべての料理は、食材そのもののいのち、また準備して下さる方々や、食材を作って下さる方々、眼に見えない多くの方々の御心を頂いたものとなります。

そのような想いを巡らせながら、お食事を頂くようにいたしましょう。すべてのお料理が御馳走です。

（『生きる力』オンライン
令和六年八月より）



「大黒天」

大黒天は仏法の守護神です。そのお姿は、頭巾をかぶり、垂れ下がった耳たぶに満面の笑みを浮かべたお顔。そして右手に打ち出の小槌を持ち、左肩に袋を背負い、米俵の上に立つ福の神です。

七福神の一神でもあります。大黒様と呼ばれ親しまれています。打ち出の小槌は湧き出る富、背負っている袋は財宝、足で押さえた米俵は豊作を意味しているといわれ、五穀豊穣や商売繁盛などお金にまつわるご利益があるとされ、多くの方々に信仰されています。

大黒様の背負っている袋には七つの宝が入っているといわれます。「金」「銀」「瑠璃」「水晶」「シャコ」「赤朱」「瑪瑙」の七種類の宝石。それは、「繁栄」「裕福」「勇気」「愛嬌」「人望」「長寿」「円満」という、喜びにあふれた七つの心ともいわれています。

大黒様はすべての人々が幸せであるようにと誓願を立てられ仏教に帰依された神様です。あの満面の笑みを拝してお参りをしているとそれだけで私たちの心を癒され心穏やかになる気が致します。

しかしそんな大黒様も元はとても怖い神様だったそうです。元来、マハーカーラという名のインドの暗黒の神様であり、人々から恐れられていました。

マハーカーラはヒンズー教の三大神の一つである「シヴァ神」が変身した姿であり、多くの腕をもち、暗黒のパワーで世界のすべてを破壊する恐ろしい神さまでした。破壊神、軍神、戦闘神とも言われていました。

大黒様は仏法に従うことにより戦うこと争うことをやめ、すべての衆生の幸福を願う仏法の守護神になりました。今の世界にとても必要な

神様ですね。自分だけの幸せを願うのではなく、すべての方々の幸福を願うことにより、大黒様のような満面の笑みとなり、周りに居る方々を幸せにすることができるのではないでしょうか。そうなれば、私たちの心は、「繁栄」「裕福」「勇気」「愛嬌」「人望」「長寿」「円満」の七つの心になることでしょう。

（『生きる力』オンライン　令和六年五月より）

「チュンダの供養」

二月十五日はお釈迦様がお亡くなりになられた日です。この日にお釈迦様のご遺徳を尊んで勤められる法要を「涅槃会」と申します。涅槃会に因んだお話を紹介致します。

チュンダという鍛冶工の子があった。彼は世尊の説法を聞き、発心し、世尊とお供の人達に心づくしの料理と併せて珍しい茸料理を供養した。

しかし、世尊は茸料理のみご自分一人で召し上がり、残りは穴を掘り捨てるよう命じられた。

さて、チュンダの家を出発された世尊は、やがて一樹下で「背が痛む、座を敷いてほしい」と願われ、お休みになった。そこで次の如き問答があった。

世尊「朝食のことで、チュンダに悔恨の心がないであろうか。もしその心があるとすれば何が原因と思うか?」

阿難「チュンダはせっかく朝食を供養しましたが、その功徳は無いと思います。なぜなら、それが原因で、世尊がこの世で最後の食事となり、涅槃に至らんとしておられるからです」

世尊「そう言ってはならない。今、チュンダは供養によって大利を得、寿命を得、死後は天に生まれるであろう。その理由は、仏が成道の時に初めて食事を供養した者と、仏の滅度に臨んでよく食を施した者は、正に等しく、その功徳の異なることはない。汝は今、チュンダのもとに行き、そのように伝えよ」

阿難はその旨を受け、チュンダにそのお言葉を伝えた。仏眼円かな世尊のお心遣いは、常にかくの如くであった。

（「絵解き涅槃図」より抜粋）

この物語は、自らに対する執着を離れ、他者を思いやる行いを為すことの大切さを説かれた話です。それが仏の行い、利他行です。

世尊はチュンダが心を込めて施した茸料理が毒であることは分かっていて、他の者には食べさせませんでした。もちろん、チュンダも毒とは知らずに世尊のために精一杯の供養をしました。

世尊の行いは利他行です。同じくチュンダの行いも利他行です。そして、世尊の行いが、チュンダだけでなく、施物である茸料理をも等しくお救いになられたのです。

世尊は人のあり方を決めるのは、生まれでもなく、家柄でもなく、血統でもなく、その人が自分の意思で何をしたかという「行い」であるとお示しです。ご自分の命があとわずかという時でも、自己中心的なことではなく、最後まで一貫してすべての命が平等に尊く、そして行いが大切であることを説き示されたものです。

お釈迦様の涅槃会に接し、お互いさま、お釈迦様の行いを修めて参りましょう。

（『生きる力』オンライン　令和六年二月より）

笠
衣(ごきとい)
衣(白)
鈴
錫杖但し導師が持つ
御幣
わらじ

〈連載〉

『普勧坐禅儀』に学ぶ　その十八

駒沢女子大学 学長　安藤嘉則

〈本文　書き下ろし文〉

修証自ら染汚せず。

〈現代語訳〉

修証〔すなわち修行と悟りが一体であるとき〕、自ずから染汚する〔修と証を分別して切り離す〕ことはない。

道元禅師は、坐禅をするのに智者か愚者か、利発な人か鈍い人か、そんなことは関係なく、「専一に工夫」、つまりひたすらの坐禅をすることが大切であり、それが弁道であると述べていました。そしてこれに続けて、この「修証自ら染汚せず」の一文を述べられます。ここには道元禅師の教えの重要なメッセージが込められています。

ここでは「修証」と「染汚」という重要なキーワードが登場しますが、これは六祖慧能に南岳懐譲が参じたときの禅問答に基づいています。六祖慧能とは中国禅宗の源流に位置する重要な人物であり、その門流が分かれて臨済宗や曹洞宗などを含む五家七宗が成立しています。そし

て道元禅師はこの六祖と弟子の南嶽との問答を『正法眼蔵』や『永平広録』など、自らの著作で幾たびも引用し、修行と悟り（修証）の問題について見解を示されています。道元禅師の教えの特徴を説明するときに、しばしば扱われる問答ですので、この問答を以下に紹介いたしましょう。そのあらすじは次の通りです。

南嶽懐譲が嵩山から六祖慧能の下に参じると、早速、六祖は「お前はどこから来たのか」と問います。南嶽は「嵩山の慧安禅師の下から来ました」と答えます。すると六祖は「何者がこのように来たのか（是れ什麼物の恁麼来ぞ）。」と問うたのです。これは禅家特有の質問で、「いったいお前自身は何者か」という本質的なところを問う質問です。いわば「本来の面目（本当の自己）とは何か」が問われたのであり、単に「私は山田です」と自分の名前を答えて済む話ではありません。そんな本質的な問いを突きつけられ南嶽は返す言葉もありません。

そこで六祖の下で修行し、八年もの歳月を経ることになります。そしてとうとう自らの答えを師に示します。それが「真実（一物）について言葉でこれだと説いても、その途端に真実から外れてしまう（一物を説似するに即ち中らず）。」という答えだったのです。すると六祖は「さて修行とか悟りとかを分けて考えるのか（還た修証を仮るや否や。）」と問うと、南嶽は「修行とか悟りとかは無いのではないが、汚染する（修行と悟りを分けて捉える）ならば真理を得ることはない」と答えたのです。六祖はこれに対して、「不染汚」こそが諸仏が大切にしてきたところであり、私もお前も西天の諸祖もそうであったのだ」と南嶽の見解を認めたのです。

ここで出てくる「染汚」という言葉ですが、中国の『景徳伝燈録』などに伝わる、六祖と南嶽の問答では「汚染（おぜん）」として出てきますが、道

元禅師は『正法眼蔵』『永平広録』などに引用する場合、「染汚」という言葉を用いられており、この『普勧坐禅儀』でも「染汚」が用いられます。いずれにしても「汚れに染まること」であり、本来純粋であるものに不純物などによって汚れてしまうことを意味します。そしてこの「汚染」という言葉がこの問答では禅における修行と悟りとの関係性に当てはめて用いられていたのです。

私たちはさまざまな悩みをかかえながら毎日を生活しています。そうした現実にあって私たちが仏教に求めるのは心の安寧、いわゆる安心（あんじん）でしょう。そしてその安心を求め、坐禅などの修行を志し、長年にわたって参禅道場に通われている方もおられます。禅宗に限らず仏教は仏陀の菩提樹下で成道にその源を発し、仏陀を覚者（目覚めた者）と呼ぶように、真理に目覚めること、すなわち悟りが仏教にとって最重要課題であります。したがって仏道とは、悟りをめざして修行することと漠然と理解されています。そもそも「悟り」とか「悟る」という言葉自体が、悟る以前の迷える状態を想定し、ある瞬間に真理に目覚めることを意味しています。

また「転迷開悟」という言葉も使われるように、仏教とは迷いを転じて悟りを開くことだと簡単に説明されることもあります。ですから当然私達は、悟りとは修行を前提とするものとして、修行と悟りを別々に位置づけてしまうのです。そして現実に迷いのど真ん中に自分を位置づけ、煩悩もなく悩みもない「悟りの境地」を漠然と頭に思い描いているのです。

しかしこの六祖と南嶽の問答において南嶽が言い放った「修証は即ち、無にあらず、汚染は即ち得ず」という言葉は、そうした前提をひっくり返すものです。修行（証）とか悟り（証）

というのは言葉として、概念として成立しているのは否定しないけれど、（修証は即ち無きにあらず）、修行の後に悟りという別世界が修行と切り離されて展開するように捉えるのは間違いであり、修行と悟りとは一体なのだということが主張されていたのです。

私たちも何かに一生懸命打ち込み稽古に励んで、さまざまな「気づき」があります。そのとき「なるほど」と合点するのですが、その「なるほど」はあくまで稽古と一体となっての「なるほど」です。「なるほど」の体験は大切なところですが、もうそれで稽古をやめてしまうことではないのです。稽古あっての「なるほど」なのです。

一般的には修行とは未完成の状態で悟りを求めること、一方さとりとは修行が完成し、完全なる宗教的人格を有していることと理解されています。したがって前者は未熟で価値がなく、後者が到達目標であり価値あるものとして認識されています。しかしながらこうした悟りとか修行とかを二つに見ることをこの問答で南嶽は染汚といっていたのです。

証（さとり）なるものを目指して参禅している修行者はある意味でいつも悟りへの中途段階に位置しているといえます。いつか修行を極め努力した結果、すばらしい悟りの世界を獲得できるかもしれませんし、また志が足りず挫折するかもしれません。正直なところ、挫折する可能性の方がはるかに高くて、いずれ中途半端なところでに終わってしまうのでは、そんな風に思っているのではないでしょうか。所詮、悟りなどとは理想として想定するものであって、実際には坐禅をして何か性格が少しは落ち着いてくるとか、肚が据わってくるとか、そのくらいでよいのではないか、と思ってはないでしょうか。

しかしながら、そんな姿勢では一生かかっても大切な気づき、悟りとは無縁となり、坐禅は単なる苦行となってしまいます。修証は一つであり、修行を離れてさとりはなく、悟りを離れて修行はない、というのが道元禅師の修証一如の仏法です。それだからこそ何か別のところに悟りなる目標を立ててそれを追いかけていくのではなく、今ここにいる現実の自分自身に向き合い、この現実の自己自身において徹底させていくことが大切なのです。

■法話

「慈母の願い」
～梅花流詠讃歌の調べ～
大本山總持寺開山太祖瑩山禅師七百回大遠忌のご縁にちなむ

栃木県日光市　高徳寺住職
渡邊清徳

今年四月より善光寺御詠歌教室が再開されました。しばらくぶりに善光寺様に寄せていただき、初めて観音堂にもお参りすることができました。

控室に通され、しばらくすると、倫子（みちこ）さまがお見えになり「お久しぶりです。お元気でしたか。御詠歌教室の再開を楽しみにしておりました。何卒よろしくお願いいたします」といつものようにおだやかな笑顔で丁寧にご挨拶してくださいました。

私が善光寺様に寄せていただくことになったきっかけは、もちろん博志方丈と私が永平寺で一緒に修行したご縁もありますが、私の師匠が善光寺様のご本寺である栃木県大田原市の光真

寺のお手伝いをしていたことが起源です。当時のご住職であり、善光寺の御開山でもある黒田白純老師をはじめ武志老師の御兄弟からは、本当の家族兄弟のように接していただいていました。

以前、倫子さまから、初めて善光寺に来た時の話を伺いました。横浜駅まで武志方丈と私の師匠が迎えに来て、善光寺に着いた後、私の師匠から法衣の畳み方を教わったとのことでした。法衣の畳み方には、二本の長いものさしを使う方法があるのですが、それを見たときには、まるで手品を見ているようだったと笑いながらおっしゃっていました。

第二回目、五月の御詠歌教室が終わり、帰り支度をしていた時、博志方丈がお見えになりました。倫子さまが入院されていることを聞かされ、しかも延命治療はされずにターミナルケア

（終末期医療）を希望されていると聞き大変ショックを受けました。

私は、自分の経験から、お母さまに手紙を書くことをお勧めしました。

それは本人を目の前にすると、これまでの色々な思いや感情が溢れてきてしまい、感謝の思いを伝えることができなくなる可能性があるからです。手紙なら書き直しもできますし、これまでの感謝の思いを沢山綴ることができます。また、受け取った側も何度も読み返すことができるからです。

方丈は、「母に感謝の手紙を書いてみます」とおっしゃられ私を見送り下さいました。

そして次の日、倫子さまがお亡くなりになられたとの訃報が入りました。方丈様は電話口で、「清徳さんに言われたように手紙を書こうと思っていましたが、そのいとまがなく、母との最期の面会の際に二人きりになれたので、私のこれまでの感謝の思いをすべて伝えました」とおっしゃいました。

そして「私が母に感謝の言葉を伝えた後、母は精一杯の力をふり絞って身体を起こし、私のことをぎゅっと抱きしめて、ありがとう、ありがとう、善光寺をよろしくお願いしますと言ってくれました……清徳さんにアドバイスいただいたおかげで良いお別れができました。本当にありがとうございました」と言われました。私も方丈様も電話口でしばらく嗚咽していました……。

お二人が最後に、それぞれの思いを伝えることができてよかったと思います。

倫子さまのこれまでの沢山のご苦労をねぎらい、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

本年は、大本山總持寺御開山瑩山禅師の七百回大遠忌ご正当の年でございますので、昨年に引き続き梅花流詠讃歌にある瑩山禅師の曲にふれたいと思います。

瑩山禅師は、信仰心の篤い祖母明智優婆夷と母である懐観大姉の影響を受け、八歳で永平寺に上られます。そして十三歳の時、当時のご住職である懐奘禅師について得度し「瑩山紹瑾」の名前を賜ります。永平寺で約十年の修行の後、諸国に修行行脚の旅に出られたのです……。

善光寺様は、京都の清水寺様と親交がありますが、これには瑩山禅師の母と祖母のエピソードがございます。

祖母である明智優婆夷は、一時行方が分からなくなっていたようです。娘である懐観大姉は、母を探し訪ね歩いていましたが「観音様を篤く信仰している母のことだから、京都の清水寺にお参りに行くに違いない、清水さんに通えばきっと母に会えるはず……」とお参りを重ねていました。

ある日、お母さまは、清水寺に向かう道中で壊れた観音像を拾います。そしてその観音様に「もし母と再会させてくれたなら、そのお身体を修復して一生奉持しおまつり申し上げます」と願をかけたそうです。そして、その数日後、清水寺にお参りに来ていた祖母との再会が叶ったそうです。

瑩山禅師の母が一生護持していた十一面観音像は、今でも羽咋の永光寺様の宝物館に保管されています。

善光寺様と清水寺様との縁は、瑩山禅師の祖母と母との再会のお話に対して、先代ご住職と倫子さまが顕彰の碑を建立されたことは、皆さまもご存じのことと存じます。

母である懐観大姉の遺言は、瑩山禅師の誓願に影響を与えます。それは「女人救済」です。時は鎌倉時代、世情不安な時代にあって、苦しみや悲しみを背負う女性の心の負担が、少しでも仏法によって安んじますようにとの願いを懐観大姉は抱いておりました。

瑩山禅師はその志を受け継ぎ、お経の功徳による加護を念じられ、女性にやさしく慈しみを向けられました。そんな様子を詠った曲が『太祖常済大師瑩山禅師影向御和讃』です。

(一)
瞋恚を鎮めし喜びに
御心明るく満ち満ちて
常の行持を励みゆく
道理尊く示されぬ

「瞋恚」とは怒りの心のことです。瑩山禅師は、永平寺での修行の後、宝慶寺で維那という役職について抜群の力量を発揮されますが、それを妬んだある人から陰口を言われます。それを聞いた瑩山様は瞋りの感情に振り回されそうになります。

しかし、幼少の頃、母である懐観大姉が、癇癪持ちの瑩山禅師の心がおだやかになりますようにと観音様にご祈願されていた様子を思い出し、思いを改め感情をコントロールできるようになったとのことです。

以前私は、ダライ・ラマ法王のお話を拝聴する機会を得ました。曹洞宗の本庁である宗務庁のビルで行われた法話会に特別に入ることが許されたのです。

法王のお話を一時間ほど聞いた後、法王は、会場にいる人たちに問答形式で直接質問をする時間を設けてくださいました。

ある一人の女性が、悩みの解決法を法王に問

うていました。「私の友人は、私がしたのではないのに、私がしたと思って私を怒っています。私はその友人に対してどのような気持ちで向き合ったらよいのでしょうか？」ということでした。友人から誤解を受けて怒りを買っている、その憤る気持ちを仏教的にはどうしたらよいのかという質問です。

ダライ・ラマ法王はその問いに対し「あなたの友人は、あなたがしていないのにあなたがしたと思って怒っている。あなたはその友人に対して、私はしてない誤解だ！　と怒りの心を抱きたくなるであろうがそうではなく、その友人が煩悩の炎に包まれていることを気の毒に、可哀そうに……との慈悲の心で包んであげなさい」と仰っていました。

人は時に、それぞれの思いや行き違いなどで、感情と感情がぶつかり合ってしまう時があります

す。「売り言葉に買い言葉」のようなものでしょう。しかし、仏教の智慧は、その相手の背景や思いを汲み取りよく見極め、慈悲の心で向き合うということです。

瑩山禅師の母、懐観大姉のひたむきなお姿は、瞋りの煩悩に振り回されそうになっていた瑩山禅師に気づきを与え、仏としての智慧の眼を開かせたのかもしれません。

(二)
伝光録のみ教えは
大法の光明を世に揚げぬ
慈母の遺言護られて
救済の誓願たてたもう

瑩山禅師のお師匠様である義介禅師が、金沢の大乗寺に入られると、瑩山禅師を呼び寄せ、お釈迦様をはじめ五十三人の歴代のお祖師様方の大悟の光明を説示するよう促されました。これが『伝光録』です。

「慈母の遺言護られて
救済の誓願たてたもう」

瑩山禅師は、母の菩提を弔うために、加賀に宝応寺を建立され、また祖母明智優婆夷の追善の為に永光寺内に円通院を建立されました。

瑩山禅師は、そのご生涯で沢山のお寺を建立されましたが、特に海野三郎夫妻から土地を寄進された永光寺（石川県羽咋市）、定賢律師より譲り受けた諸嶽寺観音堂を諸嶽山總持寺（石川県輪島市）と名前を改めて開創されています。

『太祖常済大師瑩山禅師入寂御和讃』

(三)
深き情けの有難さ
老いも若きも一様に
慕い仰ぎて寺を建て
正しき教えさかえたり

瑩山禅師の下には、沢山の弟子や信者が集まりました。それは瑩山禅師が、「寺院は檀信徒と和合して睦みあう修行と信仰の場であればならない」と確信していたからでありましょう。

「深き情けのありがたさ」は瑩山禅師の人の情に寄り添うあたたかい思いやりのことであり、観音様のような慈悲心でありましょう。

先代武志方丈は、瑩山禅師がとなえられた「寺院は檀信徒と和合して睦あう場」を誓願に善光寺を築き上げられました。また奥さまの倫子夫人は、観音様のように、お寺にお見えになる方々にやさしく寄り添うようにしてくださいました。そして、「善光寺育英会」を発足し、優秀な人材の育成に尽力されたことも、お二人が瑩山禅師を慕われ目標としていたことがうかがえます。

『太祖常済大師瑩山禅師入寂御和讃』

(四)　能登のみ山の秋なかば

数多の弟子にみまもられ
最後の教えねもごろに
説かれたまいし尊さよ

この「入寂御和讃」の三番には、瑩山禅師のご遷化の様子が述べられています。

瑩山禅師は、總持寺を弟子の峨山様に譲られて永光寺に戻られます。そして、一三二五年八月十五日六十二歳（五十八歳説もあり）にてご生涯を閉じられました。

「能登のみ山の秋なかば」は、永光寺がある能登の国（石川県）、太陰暦八月十五日（太陽暦九月二十九日）を示します。

「数多の弟子にみまもられ」とありますように、瑩山禅師には、永光寺を継いだ明峰様や總持寺の二世となった峨山様を筆頭に沢山の弟子がおられました。特に峨山様の弟子は「二十五

哲」と呼ばれ、全国に曹洞宗の教えを伝え広められました。

「最後の教えねもごろに説かれたまいし尊さよ」「ねもごろに」は「ねんごろに」真心こめて丁寧にという意味です。

瑩山禅師の遺偈（辞世の句）

「自ら耕し閑田地
幾度売り来り買い去りて新なり
限りなき霊苗種熟脱す
法堂上に鍬を挿む人を見る」

閑田地とは自然のままにして未耕の土地です。その土地を耕すことは、自分の心を調えて修行に精進してきたという意味です。「幾度売り来り買い去りて新なり」を合わせて解釈すると、この閑田地で仏道修行に励み、これまで多くの人材を輩出してきた。そして、この仏法の真髄を説く法堂（本堂）から、「いつまでも修行に精進する弟子たちを見守っている……」と仏道を真に歩む精進の人が世に多く現れることを願っておられます。

最後に『太祖常済大師瑩山禅師讃仰御詠歌』をご紹介いたします。

この曲は「法灯」という曲名がついております。法の灯とは、お釈迦様より代々相続されてきた仏法の光であり煩悩の闇を照らして心に光をもたらすという意味です。

『太祖常済大師瑩山禅師讃仰御詠歌』

《法灯》

常永久に人を済して今もなお
禅師の慈悲は世を照らすなり

瑩山禅師は、仏法を会得されて苦しみや悲し

み、不安を抱く人や迷う人々の心に永久の法の灯を与えられました。禅師の慈悲は、この世に生きるすべての人々の心をどこまでもいつまでも照らしてくださいます。という意味です。

先代武志方丈と倫子さまが、多くの方々に心を寄せて協力を得ながら善光寺を「檀信徒が和合して睦みあう場」としてきました。

このお二人の遺志は、法灯となって博志方丈に受け継がれ、これからも善光寺の檀信徒の皆様の心に寄り添い、悩み苦しみを解決するお手伝いをしてくれることでしょう。

「常に大慈大悲に住して、
坐禅無量の功徳、一切衆生に回向せよ。
驕慢、我慢、法慢を生ずることなかれ」
瑩山禅師『坐禅用心記』

意訳：人々の悩みが救われますようにとの慈悲心をもって坐禅に精進しなさい。その坐禅の功徳をすべての人々の幸せになるように向けなさい。そして決しておごり高ぶらず謙虚にすることを忘れてはいけない。

博志方丈は、『坐禅用心記』に書かれている瑩山禅師の大慈大悲のみ教えを粛々と実践されています。そして、常に謙虚で誰にでも親切です。慈母である倫子さまに似たのかもしれません。

今年は善光寺様にとって大きな節目の年となりましたが、これからも善光寺様は、変わらず皆さまの心を照らし、拠り所となることに違いありません。亡き武志方丈も倫子さまも遠くからやさしく見守って下さってくれていることでしょう。

合掌

■法話

「繋がりのなかに生きる」

山梨県甲府市　長泉寺住職　水庭浩章

今年の元日、能登半島で大きな地震がありました。新年を迎えての祝賀ムードを一変させる出来事でした。

今年は年頭から、そのような災害が起こり、気持ちが落ち込んでいる方も多いのではないでしょうか。

世界に目を向けても、現実に今、戦争が行われている。平和を保っていたバランスが崩れている。私たちの身の周りでも、そのバランスが崩れる予兆を感じ、不安を抱いている方もいらっしゃると思います。

私自身も、災害が起こったり、不安を感じたりすると、恥ずかしながら心が大きく動揺いたします。何だかフワフワとした感じで、地に足が着いていないような感覚になります。

そのような時、私は二つの出来事のことを思い出します。

一つは、平成十六年十月二十三日に発生した新潟県中越地震、もう一つは、平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災です。

一つ目の新潟県中越地震の頃は、お恥ずかしい話ですが、遅まきながら和尚としての自覚をもって生きていく覚悟を決めた時期でした。その矢先の震災、居ても立ってもいられず、すぐに被災地へ向かい何かのお役に立ちたいと思いました。

しかし、いろいろな事情があって、なかなかお寺を空けることができませんでした。何とか二日間だけ新潟へ行く日を確保できました。

災害対策本部の連絡先も確認し、当時、上越新幹線が不通となっていましたので、甲府を夕方、電車で出発し、長野周りで八時間かけて午前零時ごろ、やっとの思いで新潟に到着しました。

安宿に泊まり、翌日から二日間、被災されている方のお役に立ちたいと思っておりましたが、予想以上の悪天候、各災害対策本部に連絡してみると、どこも十名前後のボランティアの方が仕事待ちの状態なので、「来ていただいても、おそらく今日は何もないと思います」とやんわり断られました。

翌日も天候は回復せず、無理やり押しかけても迷惑になると思い、仕方なく帰路につきました。

新潟県の長岡駅から越後湯沢駅の間の新幹線が不通のため、代替バスが出ていました。その代替バスに乗り、関越道を東京方面に向かいますと、徐々に震源地に近づいてまいります。

倒壊した家屋、ひび割れた道路、大きく崩れた斜面、また、避難所らしき建物に大勢の人がいらっしゃるのを車窓越しに見て、胸が締め付けられる思いがしました。少しでも人さまのお役に立ちたいと願い、現地に行ってみたものの、結局何もできずに帰ってきた自分自身が、とても無力で、情けない思いでした。

その七年後、戦後最悪といわれる東日本大震災が発生しました。山梨県にいても、今までに体験したことのない地震の揺れに、只々恐怖を感じました。

私の住む地域は停電にはならなかったので、テレビを見ていたのですが、画面から映し出される被災地の様子に愕然としました。

この時も、居ても立ってもいられない思いに駆られましたが、諸事情により、被災地に行くことができたのは発災から一ヶ月後のことでした。その時は、曹洞宗山梨県青年会として、避難所に伺い、温かいものを提供して、被災された方のお話を伺うことに重きを置いての活動でした。

それからひと月後、今度は先輩の和尚さまと二人で、先輩のお知り合いのお寺に伺いました。そのお寺の地域では津波で大きな被害を受けており、発災から二か月が経ってもまだまだ手付かずの状況でした。

散乱しているものを、一つひとつ片づけていくという作業でした。三日間の作業を終えて帰るとき、知り合いが住職をしているお寺が近くにありましたので、そこに伺いました。

そのお寺は、海岸から離れていたこともあり、大きな被害は受けていませんでした。ただ、近

くに避難所があり、日中はほとんどそこに行き、避難されている方のお話を聞いて、心のケアに努めているということでした。

私が伺ったことをとても喜んでくださり、いろいろとお話をさせていただきました。

その頃、私の住む山梨県では、計画停電などの影響はあったものの、震災直後の混乱は収まり、見える景色は日常に戻りつつありました。そこにいると、震災のことを考えなくなる時間も徐々に増えてきました。

しかし、いま実際に被災地に来ると、全く状況は変わっていないように見える。そこで、なにか一種の罪悪感のようなものを感じていました。

そんな思いを、その住職にお話ししました。すると、その住職は、

「何であなたがそのような意識を持つんだ。そんなことはだれも望んではいない。私だって他と比べれば、被害は少ない。複雑な気持ちにもなる。だけど、いま自分のできることをしようと思っている。あなたはあなたでできることをすればいい。それが、遠く離れていても、巡り巡って被災された方のためになるのだから」

そのように言ってくださいました。

いま、自分のできることは何なのか。自分のするべきことは何なのか。そのことをよくよく考えて実践してゆく。それが、世のため人のためになる。

例えば、物流業界。今では簡単にインターネットで買い物ができるようになりました。直接、お店に足を運ばなくても、家で寝転びながら注文することができる。欲しいものが玄関先まで届く。お金を払えば、自分が出掛けなくても買い物ができる時代になりました。

しかし、その商品が届くまでには多くの人々

が関わっています。注文を受ける人、商品を用意する人、それを運ぶ人。確かに、その人たちは仕事として行っています。その仕事をすることによってお金を頂き、自らの生活を支えている。その面だけを見れば、自分のための行いです。

しかし、他方面からみれば、私たちが注文した商品を確実に届けてくださる。お金を払っているのだから当たり前だと言ってしまえばそれまでですが、ちゃんと商品を所定の場所まで届けてくれる、よくよく考えれば、こんなにありがたいことはないですよね。ですから、物流業界で働く方々も、そのような意識は持っていなくても、きちんと仕事をすることが、そのまま世のため人のためになっている、ということです。

そこを、ちゃんと説いているのが宗教です。

宗教とは、生きていく上での不安を払拭し、心が安らかに、穏やかに、満たされて生きていくために、精神衛生上必要なものです。

世界には、様々な宗教・宗派があります。それを都合よく解釈して、平和を乱そうとしている輩もおりますが、本来は、どの宗教・宗派でも例外なく、人々の平和を願うものであります。それを、いろいろな角度で、いろいろな方法で説いている。違うことを言っているのではありません。円柱を、上からみれば丸く見えるし、横から見れば四角に見える。それだけのことです。宗教とはそういうものです。

それでは、仏教では何を説いているのでしょう。

仏教の根本は、お釈迦様の出現です。お釈迦様は、インドの北部、ネパールのタライ地方にありました、カピラバストゥという小さな国の

王子として、お生まれになられたと伝えられています。

その出生は、ルンビニーという花園で、母親の腋の下から生まれたとか、生まれてすぐに東西南北に七歩ずつ歩いて、右手を天に、左手を地に指差して、「天上天下唯我独尊」と仰ったとか、非現実的なことが伝わってきておりますが、一応そういうことになっています。

小さいとはいえ、一国の王子ですから、おそらく物質的には恵まれてお育ちになられたと思われます。

しかし、成長される過程で様々な苦悩が生じてきました。それは、人間が抱く様々な苦しみ、例えば、人が歳を取り、病気になって、やがて死んでいくということ。また、大切なものを失う悲しさ、自分の思い通りにならない苛立ちなど、そういった苦しみがどうにもならないこと。更には、欲望渦巻く人間の醜さ、王子という立場が一層そのことを感じさせたのでしょう。

そういうものに嫌気がさして、自ら心の安らぎを求めて、出家を決心なさいました。諸説はありますが、二十九歳の時であったと言われています。

その後六年乃至七年間といわれておりますが、人里から離れて厳しい修行に入られます。その修行内容は、「一日に、少しの胡麻と麦を食べるのみで、顔はやつれ、身体は痩せこけ、散策往来するにも、杖をついて、やっと立ち上がった」と伝えられているように、絶食に近い、命懸けの苦行を実践されたということです。

お釈迦様は、その苦行林で、悟りの完成に近いところまでいきました。しかし、どんなに自分を苦しめても、どうしても完成できませんでした。

そこで、お釈迦様は、苦行林を離れます。そ

して、悟りを求めて辿り着いたのが、尼連禅河という河のほとりにある村でした。

お釈迦様は、その村の長者の娘、スジャータから、牛乳で炊いたお粥の供養を受けて体力を回復し、自らが心の安らぎを得る為の場所を探します。

そして、大きな木の下を選びました。なぜ大きな木の下かというと、木陰があるからです。インドはとても暑い国です。坐禅は我慢比べではありませんから、坐りやすい、涼しい場所を選ぶことが大切です。

お釈迦様は、悟るまで、絶対にここを動かないと決意され、樹の下で坐禅に入られました。

その時です。その村の人々が、柔らかい草を持ってきて、お釈迦様の坐を拵えたそうです。

お釈迦様は、ここで大きく変わります。今までは苦行林などで、独りで修行をしていました。つまり、自らの修行です。

しかし、尼連禅河の辺に移られてからは、スジャータという女性から食べ物の供養を受け、大勢の村人たちから柔らかい草で坐る場所を作ってもらうという供養を受けました。

これが、今日の仏教精神の大事なところです。お釈迦様お一人では、いくら苦行を積んでもお悟りを完成できなかった。人々のたすけがあってはじめて完成することができたということです。

お釈迦様がお悟りを得て云われたと伝えられている言葉が、

『我と大地有情と同時に成道す』

です。

「我」とは、お釈迦様お一人を示すものではなく、命の源を示しています。すべてがここから生まれてきます。当然、お釈迦様も命の源から生まれてきたわけです。私たちも同様に、そ

こから生じています。ありとあらゆるものの命の根源です。

その、ありとあらゆるもののことを「大地有情」といいます。私たちを含む、この世の一切合切すべてということです。ですから、「我」と「大地有情」とはイコール関係です。「我」の一部が「大地有情」のそれぞれということです。

「同時に」というのは、いつでもの意味で、「成道」とは、道を成す、つまり、お悟りのことです。

「この世のありとあらゆる存在のすべては、いつでもそこに、尊い存在として道を成している」いつでもそこに、過不足なく備わっているではないか……、ということです。

すべてが尊い、決して比べることなどできない一つの世界だということです。

私たちは、それぞれ別々の存在としてここにいます。それぞれに名前があり、顔も違い、年齢も違い、背の高さも違います。男性もいれば、女性もいます。

みんな違うのだけれども、過不足なく尊い姿で生きているのです。

私たちに上も下もありません。すべてが平等なのです。

そこを、無理矢理比べたがるのは人間の計らいです。本来比べることなどできないものを比べて、善いとか悪いとか、好きとか嫌いとか、背が高いとか低いとか言っているのが人間です。

最近、ようやく多様性を重視する世の中になってきましたが、既に二千六百年以上前から、仏教では多様性を尊重していました。

ただ、多様性とは、個性を出せば良いということでありません。自分勝手な振る舞いは当然

認められません。

多様性とは、お互いを受け入れ合って、何も否定しない。それぞれの価値観であったり、人間性であったり、文化であったり、そういうものをお互いに尊重し合っていく。

ですから、当然相手が嫌がることはしない。相手が望んでいないことをしないということは大前提です。

この前、あるドラマで、「他人はどうでも良いけど、自分の子になるとどうでもよくない」という親の心の中の葛藤があり、主人公の男性が「みんな自分の娘だと思えばいいんじゃないかな」といっていました。みんな自分の娘だと思い、自分の娘にしたくないことはしない、そうすれば間違いはないと。

全くその通りだと思いました。人は本能的に自己中心的な一面を持っています。ですから、自分さえよければ、或いは自分の家族さえよければと思ってしまうこともあると思います。

しかし、それはよくないですよね。私たちはお互い助け合いながら生きています。先ほどの物流業界の話もそうですが、多くの人々が私たちの生活を支えてくださっている。このいのちを支えてくださっています。

また、人だけではありません。私たちがこの身体を保つために欠かすことのできない食事も、すべていのちです。お肉、お魚に限らず、お米もお野菜もいのちです。そのいのちを、この身体に納めさせていただいて、いまこうして生きています。

当たり前のように飲んでいる水も、当たり前のように吸っている空気も、みんな天地のお恵みです。それがなければ生きていられません。

みんな繋がっているのです。この世のありと

あらゆるものの影響を受けて生きているのです。

ですから、自分勝手に、わがまま放題に生きることは、自分の受けた恩を仇で返すことになってしまいます。そんなことは出来ないですよね。

そのことは分かっているのだけれども、なかなか出来ないのが人間です。どうしても、本能的に自己中心的な自分が出てきてしまう。

私たち人間の苦悩というものは、すべて自分を立てることによって生じてしまいます。自分を立てるということは、自分中心に世の中を見るということになります。自分の思い描いた自分、自分の思い描いた生活、自分の思い描いた仕事、自分の思い描いた世界、思い描くことが悪いわけではありません。

また、自然に思い描いた通りになるのであれば何の問題もないでしょう。しかし、強引に思い描いたようにしようと、計らい心を起こしてしまうと、そこに苦悩が生じてしまいます。何故なら、この世の中、自分の思い通りにはならないからです。

そうなると、他者を受け入れたり、認めたりということは出来ないですね。人間関係も悪くなる一方でしょう。

私たちは、大きなひとつのいのちの一部を生きています。例えるなら、過去からの積み木を積みながら生きているようなものです。しかも、崩さないように慎重に。

過去の積み方が気に入らなくても、それを否定することはできません。もうそのように積まれてきているのですから、それが歴史というものです。

歴史を否定することは、自分自身を否定することにもなります。何故なら、何度も言います

が、私たち自身が、過去も未来も含む、ひとついのちの一部だからです。

過去の歴史は変えることができない。でも、その過去があって今があるわけです。自分自身も、過去があっての自分なのです。

ですから、過去は過去としてすべてを受け入れる。当然、過去の過ちはしっかりと反省する。自分の生まれる以前の事であっても、他人ごとではありません。反省するべきところは我が事としてしっかりと反省する。ひとついのちなのですから……。

大事なのは、その積み木を、私たちがどのように積んでいくべきなのか、私がではありません。私たちがです。お互い、それぞれの価値観であったり、人間性であったり、文化であったり、そういうものを尊重し合っていく。

ですから、積み木の形はみんな違います。積みやすい四角いものもあれば、積みにくい丸いものもある。中には刺々しいものもあるでしょう。どのような積み木であっても、私たちの大切なピースです。そのピースをそれぞれが積む中で、どのように積むことが最善なのか。どのように積むことが、私たちの後に積む人にとって最良なのか……。

時には、崩れてしまうこともあるでしょう。自分の欲望のために、わざと崩してしまう者も出てくるかもしれない。

しかし、そこで争うのではなく、それも現実と受け止めて、その中で自分の積み木を最善の形で積んでいく、その姿を見た他者が、同じように積みやすいように積んでいく、そうなれば、美しく積み重なり、崩れにくい積み木のタワーになるでしょう。そのように積むことができれば、未来が明るくなりますね。

お互いを受け入れ合って、何も否定しない。それぞれの価値観であったり、人間性であった

り、文化であったり、そういうものをお互いに尊重し合っていく。

ですから、本来自分と他人を比べることなど出来ません。それなのに、自分と他人を分けてしまうからおかしくなってしまうのです。

冒頭でお話ししました災害時、被災地に行った時の私の心の葛藤、無力感、罪悪感、そういうものは、自分というものが前提にあるから生じてきてしまいました。

沢山のボランティア活動をしている人と比べて、自分は何もできていない。被災地で暮らしている人と比べて、自分の置かれている生活は恵まれすぎている。

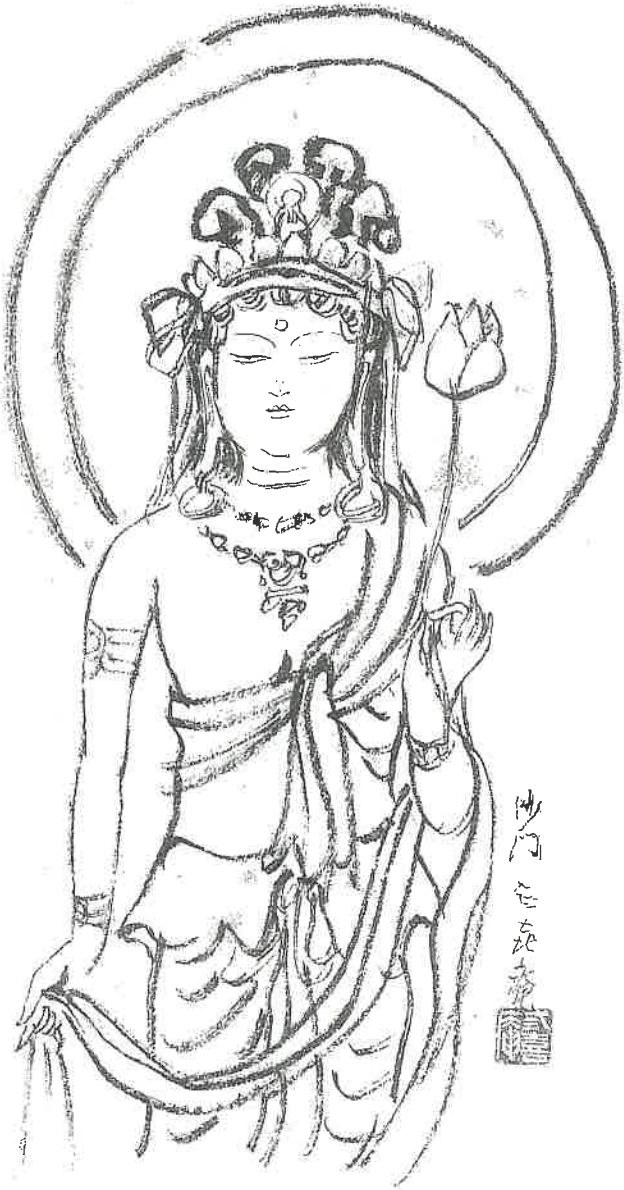
全部比較しているのです。自分と他人を分けている。自分とボランティアの人と、自分と被災者の人とを分けている。ですから、そういう思いが出てきてしまうのです。

我が事として考えれば、罪悪感を覚えている場合ではないです。それこそ、居ても立ってもいられません。であれば、いまするべきことは何なのか、自分のできることは何なのか。

求められ、被災地に行くことが許されるのであれば行くべきだし、たとえ行けなくても、自分にできることはあります。募金に協力することでも、祈ることでも、何でもできます。

自分が正しい行いをしていれば、それが必ず世のため人のためになります。必ず、巡り巡って被災地に届きます。ひとついのちで繋がっているのですから……。それほどに、私たちひとりひとりの影響力はあるのです。

そのことが、お釈迦様がお示しくださった、大切な御教えです。お彼岸を迎えるにあたり、その御教えをみずからに照らし、自分自身の行いを再点検いたしましょう。



■成寿山善光寺二世中興
大圓武志大和尚内室

善光院殿慈照大倫禅尼

黒田倫子
令和六年五月十七日　逝去
八十歳

去る令和六年五月十七日、善光寺先代住職夫人、現住職博志方丈のご母堂である黒田倫子さまがご逝去されました。八十歳でした。

【大夜（通夜）】

大勢の方より供花が届きました

焼香の方にご挨拶をする親族

受付をする総代

倫子さまは昭和四十四年の善光寺開創以来、先代住職を支え、善光寺と共に歩まれた方でした。寺族として檀信徒の皆さまとのお付き合いに心を配り、住職を立て、日夜、細やかな気配りを欠かさない方でいらっしゃいました。

平成十六年十二月に先代住職が遷化された後は博志方丈を支えて二十年。実に半世紀以上の歳月を善光寺、そして善光寺の檀信徒の為に尽くされて来られました。寺の公務で出かける以外は、一日も休むことなくお寺のことを黙々と行う生活を当たり前のように送られました。倫子さまに会うのを楽しみにお寺にお越しくださる方も大勢いらっしゃいました。

大夜（通夜）は五月二十八日、翌二十九日に葬儀が滞りなく営まれ、多くの方々がお別れにお越し下さり、またご焼香を賜りました。ここに紙面にて葬儀の様子をご報告申し上げます。

大夜導師
新美唱道老師

★五月二十八日　大夜（通夜）

導師は福厳寺新美昌道老師にお勤めいただきました。二百基を超えるお花に囲まれた釈迦殿本堂に倫子さまの好きだったあじさいの花を供えた祭壇。正面の大きな遺影にはいつもと変わらない笑顔の倫子さま。

神奈川県第二宗務所第五教区の御寺院さまをはじめ、ご縁の多くの御寺院さまにお勤めいただきました。遠方よりご足労頂いた御寺院さまも多く、倫子さまのご遺徳が偲ばれます。

午後六時より開式された一般的には「通夜」と言われる大夜法要。（大夜とは葬祭の前夜を指し、再び還らぬ夜と言った意味が込められています）。多くの僧侶による読経の響きが釈迦殿を満たします。天候不順でお足元が悪い中、大勢の方にお参りいただきました。

ご導師をお勤め頂いた福厳寺新美老師は読経後の説法の中で、善光寺草創期よりのお付き合

【葬　儀】

導師　黒田泰弘老師

詠讃師
渡邊清徳老師

いを偲び、先代武志方丈さまのご性格にも触れ、「控えめで優しい倫子さまのお人柄、その素晴らしさを改めて感じています。大変お疲れ様でしたと申し上げますとともに、とにかくがっかりし、気落ちしています」と、その心情を述べていらっしゃいました。

★五月二十九日　葬儀

導師は本寺大田原市光真寺黒田泰弘老師にお勤めいただきました。弔辞、弔電の奉読と式が進みます。更に秉炬仏事と葬儀が進みます。導師をお勤めいただいた黒田泰弘老師は、叔母にあたる倫子さまに対し、「善光寺は常に花が絶えず、よく浄められ、その護持に対する陰徳。そして、武志老師を助け、檀信徒に尽くされ、菩薩の行願に生きられた倫子様の日常のお姿」を讃え、引導法語を述べられました。

博志方丈による謝辞。告別の儀、お別れのお

花入れと進み、ご縁の皆さまとご家族は、そのやすらかなお顔、そしてさまざまの教えを胸に刻みました。

両日ともご詠歌を高徳寺渡邊清徳老師がお唱えして下さり、最期は倫子さまの好きだった『まごころに生きる』でお別れ致しました。

ほほえみ　ひとつ　涙ひとつ
出逢いも　別れも
抱きしめて　生きてる今を
愛して行こう

○会場設営や案内など株式会社板橋さまに大変お世話になりました。
衷心より篤く御礼申し上げます。

◎大勢の方がご焼香にお越し下さいました。

法要解説

水庭浩章老師

お礼状

「結ばせていただいた御縁に感謝申し上げます」

本日はご多用中にも拘わらず御会葬いただき誠にありがとうございました。

先代武志大和尚内室　黒田　倫子　は　令和六年五月十七日　八十歳にて生涯をとじました

若狭の常在院に生を享け先代住職と共に善光寺を築き上げた母は　人生の殆どを寺に捧げてまいりました　どなたに対しても穏やかな口調で話し檀家さんからのご相談に親身になって耳を傾ける姿は今でも皆の手本となっております

一見すると柔らかな雰囲気をまとっていた母でしたが真っ直ぐ芯の通った人でした　その芯の強さがなければ住職の妻は務まらなかったでしょう

先代も随分と母を頼りにしており「ミチコ　ミチコ」と一日に何度も名前を呼んでいたものでした　その一方で母の先代に対する敬愛の念も深く互いを労い支え合う姿に私達も二人の絆が固く結ばれているのを感じました　先代亡き後二十年間も善光寺と私共を支えてくれました

六人の子供達から見ても八十歳とは思えないくらい若々しく自慢の母でした　今はただ尽きぬ感謝の想いを込めて静かに手を合わせ彼方での平穏を願います

最後になりましたが　人生の途上で出会い支えてくださった皆様へ深く感謝申し上げます　略儀ながら書状をもってご挨拶とさせていただきます

成寿山　善光寺

住職　黒田博志

総代・世話人一同

■通夜説教

大夜御導師　福厳寺

新美　昌道老師

善光院殿慈照大倫禅尼さまには大変おつかれさまでしたと申し上げたいと思います。と同時にまた本当に残念だということも思っております。

善光寺草創期より武志和尚さまがこの寺を始められた頃よりご苦労されて今日の善光寺を築かれた大功労者であります。まだまだ長生きされて、これから先もっと善光寺を発展させていただきたいと思っていた矢先でありますので、本当に残念なことであります。

私が本日のご縁を頂きましたのは、私が大学一年に入ったときから先代武志方丈さまに世話になりました。ですからお世話になりましてからもう六十五年になろうとしております。武志方丈さまがこの地に来られて、お寺を始められた頃から、私もここに通わせていただいていたわけです。

武志方丈さまと倫子さまの結婚式にも出席させていただいております。それ以来、倫子さまには大変お世話になり、感謝の言葉以外に何もないというくらいお世話になっています。本当に有り難いご縁を頂戴しています。

この善光寺も今では大変立派なお寺になりましたけれど、最初は小さい不動殿だけで武志方丈さまと共に大変努力をして今の興隆があるわけです。お檀家さんに接するにも、我々に接するにもいつも控えめで、しかも優しく付き合って下さって本当に有り難いことであります。なかなか真似のできることではないのですけど、福井のお寺のご出身ということでお寺のことも理解されていたから、余計に人に接することに

も気を遣われていたのだと思います。

とにかく、武志方丈さまは結構ワンマンな人でしたから、面倒くさいところもありまして、時々切れてしまって怒り出すこともありまして、大変な方丈さまだったのですけど、それを倫子さまはガマンをして、仕えて、それで方丈さまは「ミチコ、ミチコ、ミチコ」と毎日そればっかりでしたけれど、そういう状態で寺を大きくして今日になったことは、お檀家の皆さまもご承知の通りであります。

もっとまともな話ができればよいのですけれど、善光寺の奥さまが亡くなられたということで、私も気落ちしておりまして、優しくて素晴らしい人だったのですが、とにかくがっかりしているところです

ガマンをし、努力をし、立派に善光寺をつくってこられた最高の人であったと再認識させて頂き、感謝を申し上げてお話を終わらせて頂きます。

■追悼文（弔辞）

善光院殿慈照大倫禅尼　黒田倫子さまの大夜（通夜）・葬儀に際し、
多くの追悼のお言葉（弔辞）、弔電、お手紙を頂戴致しました。
お寄せ頂いた温かなお言葉に感謝申し上げ、
ここに謹んでその一部を載録させていただきます。

曹洞宗神奈川県第二宗務所
第五教区長
岩波　弘道老師

本日ここに善光寺寺族、黒田倫子さまのご葬儀が挙行されるにあたり、第五教区を代表いたしまして謹んで御霊前に弔辞を捧げます。

あなたは福井県のご出身。昭和四十四年、まさに當山善光寺さまがこの地に産声をあげた年、先代ご住職黒田武志老師とご縁を結ばれました。以来五十五年の長きに亘り、ご當山の発展に貢献されました。

また、六人ものお子さまに恵まれ、立派に育てられました。

私は、海外留学僧に採用していただいた時に、訪米された先代方丈様と奥様にニューヨークでお目にかかったことを覚えています。熱弁を振るう先代さまと、それをニコニコと見守る奥さま。あたかも善光寺さまにいるかのような光景に、私はどんなにか心安らいだことでしょう。

聞くところによると、ご自身は常にお寺にあって、その護持、発展に尽くされることを旨と

していたとのこと。まさに善光寺の顔と言っても過言ではないと言えましょう。

本年二月の開山忌並びに育英生辞令交付式の際には、いつもと変わらぬやわらかい笑顔で皆さまをお出迎えになられていました。そのお姿を拝見し、変わらずお元気でいらっしゃるものと思っていただけに、突然の訃報に接し言葉もございません。

私どもは、あなたの篤い道念を手本とし、善光寺様とひいては宗門のために微力を尽くす所存です。どうぞお見守りください。

衷心より黒田倫子様のご冥福をお祈り申し上げ、お別れの言葉といたします。

東郷　敏様

嗚呼！　なんと哀しくまた哀しいこと。いまそこもとに飛んで行きたい。しかし、老生の身には叶わぬこと。これが辛い。倫子ご母堂は、善光寺の母であり、大圓思想を継ぐ唯一衆生の道標でした。全くどうしたのです。けさ住職より「母が亡くなりました」と。

なんというあまりの事態に取り乱し絶句でした。昨今は不安のかけらもなかったのに突然の悲報。稍あって默念。白紙に向かい筆先のままたためています。失礼はおゆるしください。

私より先に逝かれては順序が違いました。ご母堂は遙か後輩。かつて同志社大学を卒業後、即、私の会社に入社。一人代表として社に勤しんだ加藤倫子さん。のち縁あって大田原光真寺五男坊、黒田武志の嫁となる。挙式は東京品川迎賓館。その進行司会の大役を私東郷が担う。式場には、大本山永平寺、大本山總持寺の両猊下直のご臨席。実にこの事象大層なことだったという。私がこのことを知ったのは、あとのこと。そんなこんなで黒田家と加藤家の由緒ある寺系に驚嘆しながら時の祝宴に大輪の花と咲き誇った倫子妃。生涯最高の冥加だったのかもしれません。

しかし至福の瞬間は束の間。ご結婚以来、現実は武志方丈の「寺を新しく造る」という懸案。徐々に具体化、資金の調達、嫁は母となり、次々出産。子育てや台所用人、メシ炊き、行事やお布施集め等々、実に多岐。陰で支え続けながら。無から有。ゼロからの出発。遂に新寺建立、開創へと大事を成就。

今日の善光寺興隆へと導かれた、まさに第一人者。寺は嫁次第といわれる所以を見せつけた所行でした。

最高の貢献者である事実を承認するのは、唯

一武志大圓和尚であり、さらには、「ミチコー、みち子ー、倫子ー」と、連呼で応える成寿の山のヤマビコです。

善光寺は、武志和尚と倫子オクサマがいのち削って創建なされた遺蹟だと私は思っています。

かつて草創のころを回顧し、倫子ご母堂の献身に思いを馳せました。

先代との甘い新婚生活はなかった。旅行も叶わず、住居はいま奥の院があるところ。そこのあばら屋八畳ひと間と物置。風雨に晒され、扇風機も暖房もない。

方丈は言う。「食事は腹一杯食べてはいかん。住居は雨露を凌げればいい、立派で心地いい家に住んでは、仏道に反する」などと仏道を武器に、極貧を強いられ、夢も希望もなかったでしょう。

この頃、参道沿いの石材屋さんが見かねて度々生活用品や食糧を下さって助けてくださいました。大恩です。ホントに辛かったでしょう。救われたのはただ一つ「新寺を建立開創する」という目標があったから。これは方丈と共有しておりましたから、不平不満があっても堪えて忍べたと思います。

そんなころ、郷里福井より、お父上が食糧を担いで訪ねて来たんです。「ミチコどうだい。元気かい」のひと言に涙腺が崩壊。涙が吹き出て、ぐちゃぐちゃだったといいます。

お父上は強く強く抱き締め、倫子ご母堂はその懐のぬくもりをいただかれました。しかし、「いけない、いけない、甘えてはいけない。私は負けてはいけない」と、目が覚め、お父上のぬくもりに救われました。

ご母堂の八十路は実に波瀾万丈。私の追想は

とめどもなく流れ、尽きません。知らず識らず諸々に巻き込まれ、苦労、難儀させられた嫁倫子さま。

武志住職は何かにつけ〝人間万事塞翁が馬。忍の一字は衆妙の門〟だと武志ラッパは鳴り止まず、嫁は大変だったと思います。すべては表裏一体、脚本なき人生をご自分に課し、ことごとく無二無三、美しき流れへと導かれた知恵とお力は、まさしく「虎に翼」。素晴らしい生きざまを魅せてくださいました。

ありがとうございました。ご母堂さま。

善光寺の後は、ご両親に訓育された立派な博志住職、真由美奥さま。そして、兄弟姉妹たちは孝心篤く、母居ますが如く、ご両親のマネをしてしっかり護持なされることであります。どうぞご安心ください。

ご母堂さまはみ仏の子。きっと抱かれて、護られて、救われて逝かれることと思います。どうぞゆっくりお昇りください。極楽浄土で大圓さまと下界をのぞき見しながら、お茶を一服どうぞ！。

尽きぬ思いで合掌低頭です。

善光寺婦人会副会長

瀧澤　道子様

先代住職夫人であられました倫子さまのご葬儀に際し一言お別れの言葉を述べさせて頂きます。

倫子さまとは長い年月を共に過ごし数々の旅行や食事を通じて深い友情を育んできました。倫子さまは私にとって掛け替えのないお方でした。どのような困難な状況でも愚痴ひとつ言わず、笑顔を絶やさずに毅然とした態度で臨まれるお姿には私だけでなく多くの人々に勇気と励ましを与えて下さいました。

そしてどの方にも分け隔てなく接するお姿に私は多くのことを学びました。

横浜善光寺様も倫子さまの支えがあり今日があると思います。前住職さまに鶴見總持寺での大切なお役をとのお話があった時、倫子さまはこの横浜善光寺の檀家さま達のことを一番に考えられ、このお話を受けるべきでないと助言されたことを伺い、いつも横浜善光寺の檀家さま達を思う気持ちに胸打たれたことを覚えています。いつもあの笑顔で皆様に接しておられるお姿が脳裏に焼きついています。

教えられることばかりでした。お寺に伺いホッとする自分があるのは倫子さまが迎えてくれるあの笑顔だったのでしょう。この別れが残念でしかたありません。

コロナ禍になる前は時々旅行に行っておりま

した。「寒い所は苦手よ。でも佐渡に行きたいわ」と言っておられましたが、実現できませんでしたね。

コロナも三類に入り観光地も旅行客で賑わい始め、昨年十月頃どこかお食事か旅行に行きましょうとお誘いしたのですが、あの笑顔で「そうねー」と言われても明確な返事はありませんでした。

前住職さまが亡くなられた時「寿命ですから」とおっしゃられた言葉が鮮明に残っております。

倫子さまもご自分の寿命を感じておられたのではと思えてなりません。お会いする度に「お体大丈夫ですか?」とお声をかけても笑顔で「大丈夫よ」。本当に我慢強くご自分に与えられた寿命を精一杯に生きてこられましたね。でももう少し長くご緒に楽しみたかったです。残念で仕方ありません。

倫子さまのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

どうか安らかにお眠り下さいと言いたいのですが、きっと「倫子、倫子」とまた前住職さまの呼ぶ声に忙しくされる様子が目に浮かびます。

たまには残された私たちも見守って下さいね。

倫子さまの残して下さった数々の教えとお心遣いはこれからも私たちの心に生き続けることでしょう。

最後に、今お寺のアジサイが鮮やかに咲き始めています。倫子さまが手がけた花々はこれからも永久(とわ)に美しく咲いてくれることでしょう。

本当に今までありがとうございました。

■お悔やみのおたより

この度は本当に多くの弔意をお寄せ下さり、心より感謝申し上げます。

可睡斎　斎主

采川道昭老師

御母堂様の御逝去の報に接し心よりのお悔やみ申し上げます。

四十年以上前に大変お世話になりました。今でもあの頃のことを思い出しております。

ご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

合掌

正瑞寺　田中智誠老師

小訥六月杭州径山での大蔵経国際学会に出席し、開会式黄檗版底本その他の行事があり、杭州東明寺福清黄檗山へも行ってきました。

帰国後、御母堂様の通知を知り大変失礼いたしました。また海外研究者との対応等があり遅くなりました。

時節柄ご自愛下さい。

松庵寺　渡邊紫山老師

謹啓　倫子様の突然の訃報、驚きました。生前実父母に頂いた御厚情に心より感謝申し上げ、安らかな旅立ちを祈りあげました。

取り急ぎ一筆まで

永見寺　葛西好雄老師

ご母堂様の訃報に接し謹んで哀悼の意を捧げます。母君の存在は寺院にとっても住職にとってもかけがえのないものです。

心中お察し致します。

ご冥福をお祈り申し上げます。

玉泉寺　沖田玉映老師

謹啓　芒種の候

この度は突然の御母堂様の御逝去、心よりお悔やみ申し上げます。

ご生前には黒田武志老師ご夫妻には大変にお世話になりました。

いつも善光寺様に伺うとあたたかくそして励まして頂いたことが忘れられません。今となっては、その時のことが沸々と瞼に浮かんでまいります。

直接にお焼香かなわず誠に申し訳ございません。

お淋しくなられたと拝察申し上げます。

黒田博志老師様もご多用の上、時節もこれから不順な天候になります故、お疲れが出ませんようにご法体をご自愛下さいませ。

末筆ながら皆様へよろしくお伝えお願い申し上げます。

略儀　お悔やみの御挨拶まで

遠藤博因老師

ご母堂様のご逝去の報に接し心よりお悔やみ申し上げます。

もう三十年近く前になりますが、育英僧の時に優しく笑顔で接していただいた記憶が蘇っております。本来であれば上山し焼香させていただかなくてはいけないところ、書中にて失礼させていただきます。謹んでご冥福をお祈り致します。

佐藤誠司様

黒田倫子様のご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます

お寺にてお声をかけて下さいましたことが有り難く想い出されます。ご葬儀への参加がかなわず誠に申し訳ございません。急用にて実家の宮城県におり、昨晩帰宅いたしました。

ご住職様、ご家族、お寺の皆様におかれましては、お力をお落としのことと存じますがくれぐれもご自愛下さいませ。

宇野泰章様

この度はご母堂様のご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。

諸般の事情によりお伺いでき

ない無礼をお許しください。

合掌

磯村啓子様

前御住職黒田武志和尚様の御令室様がご逝去されたお知らせ拝受致しました。

生前、和尚様によくお仕えされていたことを思い出します。寂しい限りでございます。

心よりご冥福をお祈り致します。

久松彰彦様

此度は誠に御愁傷様でした。直接ご焼香に伺いたく思っておりましたが、なかなか調整が出来ず、時間も空いてしまいましたが郵送にて御無礼させて頂きます。

薄衣諒春（美帆）様

謹啓　むし暑い毎日が続いております。その後皆様お変わりなくお過ごしでいらっしゃいますか。

このたびはお母様ご逝去のお話をうかがい、大変驚き申し訳なく、今ごろで大変恐縮でございますが、心ばかり送らせていただきました。

昨年のお中元の御礼のお電話でお話しさせていただいたのが最後だったかと思うと、本当にありがたく、残念に思います。父春邦が亡くなって以来、主人が亡くなった時も励ましていただきました。優しくおだやかなお話のお声、今も思い出されます。心からご冥福をお祈りいたします。

横浜へうかがって御礼を申し上げるべきところ、このような形で申し訳ございません。お許しくださいませ。

もう少しこちらの動きがしっかりしましたら、ぜひ善光寺様へお父様、お母様のお墓参りにうかがいたいと思っております。その時はどうぞよろしくお願いいたします。

息子諒春も五月に結婚し、二年後に晋山結制を行う予定でおります。いつもよちよち歩きの保春寺でお役に立てず申し訳なく思っております。今後ともご指導いただけますようよろしくお願いいたします。

ご逝去の日が東隆眞老師と同じ五月十七日だったとお聞きしました。お電話では、東様がお母様をお導きくださったのでしょうと、私お話ししてしまいましたが、一番はやはりお父様が優しくお母様をお迎えにこられたのでしょう。私の父も、今はご一緒に昔のように皆様と仲良く談笑しているかもしれません。

ありがたいご縁、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

暑さ厳しき折、くれぐれもご自愛くださいませ。

本当にお世話になりありがとうございました。（息子諒春に代わりまして）

謹白

瀧澤弘隆様

謹啓　平素は大変お世話になり感謝申し上げます。

先般心ばかりの品をお送りしましたところ丁重なお礼状を頂戴し誠に有難うございました。

お読みしたところ、いつもの添え書きが記されていなかった事や宛名書きの筆跡が普段と異なっているのに気付き、僭越ながら本日お電話申し上げました。

事務職の方から御母堂倫子様の御他界を知り青天の霹靂にて誠に驚愕した次第です。特に家内秀子は、平素電話にてお元気なお声をお聞きしておりましたため、尚更衝撃が大きかったようであります。

お聞きすれば五月に永眠されたとの事で知らぬ事とは申せ大変失礼致しました。

ここに倫子様の御他界を衷心からお悔やみ申し上げますと共にご冥福を深くお祈り申し上げる次第です。

亡き御尊父様と御一緒に当家までお出で頂いた事や大田原高

校同級生でＮＹ州立大学教授に就いていた故　伊藤博君が夫婦で帰国した時の会食など色々と脳裏に浮かび上がり、御厚情に深謝申し上げておりました。

合掌

古瀬道子様

この度は先代の御奥様ご逝去の報に接し驚いております。略儀ではございますが書面をもちまして謹んでお悔やみ申し上げます。

極暑の折皆様身体ご自愛なされますように。

以前、息子と共に大変お世話になりありがとうございました。感謝申し上げます。

田中宏様

本来であればご葬儀に伺うべきところ、事情によりかなわず、誠に申し訳ありません。略儀ではありますが、書中をもちまして、心よりお悔やみ申し上げます。ご家族の皆様、くれぐれもご自愛ください。

ご母堂様（お母さま）のご逝去の報に接し、心よりお悔やみ申し上げます。（お気を落とし過ぎない様にして下さい）

佐藤裕子様
佐藤美沙子様

この度のおしらせを見てご母堂様の温かな笑みを思い出していました。私の亡母の法事の時、鎌倉彫の鏡をお渡しした時、ご挨拶にいらしていただいたその時もとても優しいたたずまいでした。ひょっとしてその頃からご体調がすぐれなかったのかもしれません。何事もないようにふるまわれていらっしゃいましたが、どこかおつらさを感じました。

佐藤寛逝去の時も義母美沙子はご母堂様の温かなお声かけに救われていました。

皆さまの悲しみが癒える日が

来ますように。

仲ちよ子様

善光寺様には昭和五十四年からお世話になっております。以来黒田倫子様にお目にかかるとやさしいお言葉をかけて下さいました。

ありがとうございました。

永島俊子様

ご母堂様のご逝去を悼み心からお悔やみ申し上げます。

本来であればご葬儀に参列すべきところですが、体調不良にてかなわず誠に申し訳ございません。

ご家族の皆様におかれましてはご心痛かと存じますがお力を落とされませんようご自愛下さいませ。

心より故人のご冥福をお祈り申し上げます。

澤村綾子様

このたびはご愁傷様です。葬儀にはうかがえませんが、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

大野孝雄様

ご母堂様のご逝去、こころからお悔やみ申し上げます。

思うに、倫子様からはどんなことにも耐える忍辱の心を学びました。

ひとり生きる当方の日々、さらに持戒の教えを深めてまいります。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

石井文子様

前略　先日黒田倫子様ご逝去のお知らせを受け誠にご愁傷様でございます。

いつもご法事の際玄関でお檀家様をお迎えになる時の笑顔を

憶い出します。今頃は天国で黒田武志大和尚に地上の善光寺一同様の活躍をご報告していらっしゃる事とほほえましく思われます。

勝手ながらご焼香に伺えず申し訳ございません。遠くよりご冥福をお祈り申し上げます。

草々

三輪玉江様
三輪保典様

拝啓　この度のお知らせに驚き、謹んでお悔やみを申し上げます。

平素、陰で色々お世話頂いていた事と深く感謝申し上げます。

何も感謝の言葉も申し上げられませんがこれからは元住職とお会いになられ、仲良く成仏なされ高い所からゆっくり善光寺をお守りになって下さいませ。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

かしこ

賀屋陽子様

ご母堂様ご逝去のお知らせを頂き、謹んで哀悼の意を表します。

お寺に伺うといつもやさしい笑顔でむかえて頂いたり、お電話を頂いたりしておりました。何といってもやさしい応対が印象的でした。本当に有難うございました。

布施ノリ子様

前略

ご母堂様のご冥福心よりお祈り申し上げます。

今井浩明様

この度は、黒田倫子様のご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。

諸般の事情によりお伺いできない無礼をお許しください。

佐藤久乃様

黒田倫子様のご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。諸般の事情によりお伺いできない無礼をお許しください。

昨年お会いしたときは、お元気そうで懐かしいお話をたくさんさせていただきました。本当に残念でなりません。

心よりお悔やみ申し上げます。

鈴木京子様

前略　黒田住職ご母堂倫子様には大変お世話になりました。

善光寺へうかがった際にはいつも暖かな笑顔で迎えていただき心安まる思いでした。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

井上憲一様

大奥様のご永眠のお知らせに接し心からお悔やみ申し上げます。

先代の方丈様、大奥様には大変お世話になり本当に感謝致しております。

ご葬儀には参列出来ず申し訳ございません。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

滝口晴男様

拝復　ご母堂様ご他界とのこと、心よりお悔やみ申し上げます。ご生前は当家仏事の折、いろいろとお世話になりました。

なお私ことご葬儀当日はあいにく所用のため、失礼させて頂きます。

敬具

小田倉芳子様

この度は御内室様逝去されました事謹んでお悔やみ申し上げます。

ご愁傷様です。

お見送りに行かれませんので申し訳ありませんが失礼致します。

中村治雄様
中村茂子様

此の度は御母堂様ご逝去の報に接し、心からお悔やみ申し上げる次第です。
御寺の創成期より現在に至るまで、寺運の御発展に大変貢献されました。
ここに深く敬意を表すると共に、どうぞゆっくりお休みいただくよう願っております。

本宮義徳様

この度はご愁傷様です。
心からお悔やみ申し上げます。
この度やむを得ない事情により伺うことができません。心よりお詫び申し上げます。

阿部歌子様

ご葬儀に参列できず申し訳ございません。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

橋本万壽美様

前略　何時も御世話になっております。昨日ご連絡を頂きただただ驚いている所でございます。
御生前中はひとかたならぬお世話になりました事をあらためて感謝申し上げます。
謹んでお悔やみと、心からご冥福をお祈り致します。

中村幸子様

前略　この度は御母堂様の突然の訃報に接し謹んでお悔やみ申し上げます。
慈愛にみちたやさしいお方でしたね。心よりご冥福をお祈り致します。
出席しお別れさせて頂きたく思っておりました所、急の腰痛にてかなわないとなりました。
皆様どうぞお大事に。

合掌

石島格様

このたびは御母堂様のご逝去を悼み謹んでお悔やみ申し上げます。

本来であればご葬儀に参列すべきところでしたが、老齢のためかなわず、誠に申し訳ございません。

御母堂様にはいつも優しく接していただき、いくつかの人生の節目において大変お世話になりました。

略儀ながら書中にて、心からご冥福をお祈り申し上げます。

（代　石島明実）

柳澤肇子様

ご母堂様のご逝去の報に接し、謹んでお悔やみ申し上げます。穏やかでお優しく、いつも心癒やされておりました。お通夜、ご葬儀に伺えずお手紙のみになりましたこと、誠に申し訳ありません。

ご母堂様のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌

古屋チヨエ様

前略　この度はたいへんご愁傷様です。お母様に大変良くして頂きました。大変におどろいております。お見舞いにも行けずすみません。葬儀にもお伺い出来ず申し訳ありません。どうかお気を落とさずお元気お祈りしています。

堀内孝一様

この度は御母堂倫子様のご逝去に際し心よりお悔やみ申し上げます。

博志様並びにご家族の皆様の悲しみはいかばかりかと拝察いたします。

倫子様のご冥福をお祈り申し上げます。

両親の世代からおつきあい頂いた方がお亡くなりになるのは本当に寂しいです。本来ならば

ご葬儀に参列いたすべき所でしたが叶わず大変申し訳なく思っております。

村上洋子様

御母堂様のご逝去の訃報に接し悔しい想いです。お悔やみ申し上げます。

お母様の優しいお顔、お言葉を思い出して涙しております。謹んでお母上様のご冥福をお祈り申し上げます。

前平様の奥方様にもよろしくお伝え下さいませ。

くれぐれもご自愛下さいませ。

小野塚アキ子様

御母堂様の逝去のお知らせ心を痛めております。ご冥福をお祈り致します。

新舘杲様

この度御母堂様ご逝去の訃報に接し謹んで哀悼の意を表します。

静謐で慈愛に満ちたお姿は私の心に深く刻まれております。

ご冥福をお祈り申し上げます。

竺原誠司様

御母堂様ご逝去の訃報を受け、謹んでお悔やみ申し上げます。

ご遺族の皆様はお力落としのことと存じますが、どうかご自愛下さいますようお祈りいたします。

本来ならばご弔問に伺うべきところですが、諸事情によりご葬儀に参列することがかなわず、申し訳ございません。

略儀ながら書中にてお悔やみ申し上げますとともに、故人のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

酒井様

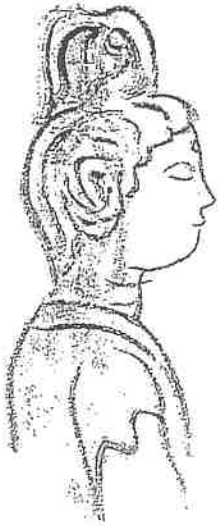
お母様にはお世話になりました。ご冥福をお祈りいたします。

小林恒男様

この度、前御住職黒田武志大和尚内室黒田倫子様が五月十七日ご逝去あそばされたとのこと心よりお悔やみ申し上げます。

私はすでに満九十三歳となりましたが、今までに父小林重男、母小林千歳、並びに家内小林彩子の葬儀にてお世話になりましたこと、あつく御礼申し上げます。

※頂いたお手紙の一部を掲載致しました。



■弔電

多方面から弔意を寄せていただきました。衷心より感謝申し上げます。

大本山總持寺　貫首
石附周行様

ご母堂の逝去の報に接し謹んで哀悼の意を表します

可睡斎　斎主
采川道昭様

御母堂様の御逝去の報に接し謹んでお悔やみ申し上げますと共に心よりご冥福をお祈り申し上げます

第六回善光寺留学僧
沖田玉映老師

御母堂様のご逝去を悼み謹んでお悔やみ申し上げます

昌福寺
新井一光老師

御母堂様のご逝去を悼み　謹んでお悔やみ申し上げますとともに　心からご冥福をお祈りいたします

鏡徳寺
大野徹史老師

ご逝去を悼み　謹んでお悔やみ申し上げますとともに　心からご冥福をお祈りいたします

曹洞宗三重県
第一宗務所第五教区
寺院ご一同様

ご逝去の報に接し謹んで哀悼の意を表します

曹洞宗神奈川県
第二宗務所
寺族会様

ご生前のご功績をしのび心からご冥福をお祈りいたします

眞月会
会長　中野良教老師
会員ご一同様

突然のご不幸を伺い申し上げる言葉もございません
ご遺族山内の皆様方のご心痛

如何ばかりかと存じますがお気持ちを強く持たれますようお祈り申し上げます
お力になれることがございましたら何なりとお申し付けください

前内閣総理大臣
衆議院議員
菅　義偉様

ご訃報に接し心から哀悼の意を表します
安らかにご永眠されますようお祈りいたします

東京都
山下昌宏様

ご母堂様のご逝去の報に接し謹んでお悔やみを申し上げます　安らかなるご冥福を心からお祈りいたします

港北区
宮内智一様

ご母堂様のご逝去の報に接し謹んでお悔やみ申し上げますとともに　心よりご冥福をお祈りいたします
喪主様はじめ　ご家族の皆様お力落としのことと存じますが　どうぞご自愛くださいませ

東京都
藤原將雄様

ご母堂様のご逝去を悼み謹んでお悔やみ申し上げますとともに　心からご冥福をお祈りいたします

有限会社井筒屋
代表取締役
榎森正浩様

御母堂様のご逝去を悼み謹んでお悔やみ申し上げますと共に心よりご冥福をお祈りいたします

三遊亭遊かり様

ご母堂様のご逝去の報に接し謹んでお悔やみ申し上げますとともに　心からご冥福をお祈りいたします

一斉法要のご報告
【令和六年】

○新年祈祷会　一月九日

今年最初の一斉法要、新年祈祷会が回数を四座に分散して行われました。各回五十名前後の方がお参りにお越し下さいました。

今年はご祈祷に加え、元日に起きた能登半島地震で亡くなられた方々のご供養を行い、また被災された方々へのお見舞いと一日も早い平穏な日常への復興をお祈り致しました。博志方丈は挨拶の中で「自分一人の力は微力ですが、みんなで心を合わせて祈りを捧げることで大きな力になると信じて、お祈り致しました。今年一年の皆さま方のご多幸とご健勝を祈念申し上げます」と述べました。

一斉法要では毎回檀信徒を代表して総代がご挨拶致しますが、今年は持ち回りで挨拶をすることになり、新年祈祷会では佐藤和彦総代よりひと言頂戴致しました。

佐藤総代は、観音堂を建築して下さった佐藤薫工務店の社長で、老朽化の進む伽藍の修繕もお願いしております。善光寺とのご縁は、今年十三回忌を迎えるご両親のお葬儀からです。

ご挨拶の中で、「両親が亡くなって毎朝仏壇にお参りするようになりました。その頃、菩提寺の住職として、博志方丈が毎朝、檀信徒の皆さまのご供養をされているということを聞いて、有難いなぁと感じておりました。縁あって建築のことなどを相談されるようになり、自分もお寺に対して出来るだけの事を尽くそうと仕事を引き受けました。そうこうしているうちに総代の話が上がり、恐縮しながらもお引き受けした次第です」とお話し下さいました。

一斉法要の準備や大掃除など人手が必要な時

には、社員さんも一緒にお手伝いして下さいます。

佐藤和彦総代

○節分追儺法会　二月三日

四年ぶりの節分追儺法会通常開催に二百名程の方々がお参り下さいました。

今年の節分はもりだくさん！

ニュース・アラカルト

①奉納落語　三遊亭遊かり

今をトキメク女流落語家です。枕から会場は大盛り上がり。本題の「時そば」では、本当に蕎麦を食べているかのような表現力にとても引き込まれました。笑う門に福がやって来ます。

三遊亭遊かりによる奉納落語

②大般若祈祷

大きな声の転読で魔を払い、お参りの方々に般若の風をご回向し、皆さまの今年一年の除難招福をご祈祷申し上げました。

ニュース・アラカルト

③奉納演奏　和太鼓大元組

迫力ある演奏が全身に伝わり元気が湧きます。ご挨拶で組長さんは「コロナ禍で一番苦しい時も、善光寺さんがオンライン配信などで応援して下さり励みになりました。お陰さまで昨年より海外公演も再開しました」と笑顔のご報告。

大元組による和太鼓演奏

④ご挨拶　遠藤敦総代

遠藤総代は、書道教室や写経教室でもお世話になっている新芸書道会の会長でもあります。「書道に興味がある方は、是非お越しください」とのご案内。

昨今、書道は人気があり善光寺の書道教室も二部制にしても入りきらない程の盛況です。住職はじめ僧侶も数名習っております。

毎年お正月に開催される書道展には住職も出品していますので、宜しければ足を運んで下さいませ。

遠藤敦総代

ニュース・アラカルト

⑤豆まき

最後は、お待ちかねの豆まきです。四年ぶりに行う大勢での豆まき。不安もありましたが、皆さまのマスク越しでもわかるほどに溢れる笑顔に触れ、福が訪れた感が致しました。

○春彼岸法会　三月十八日

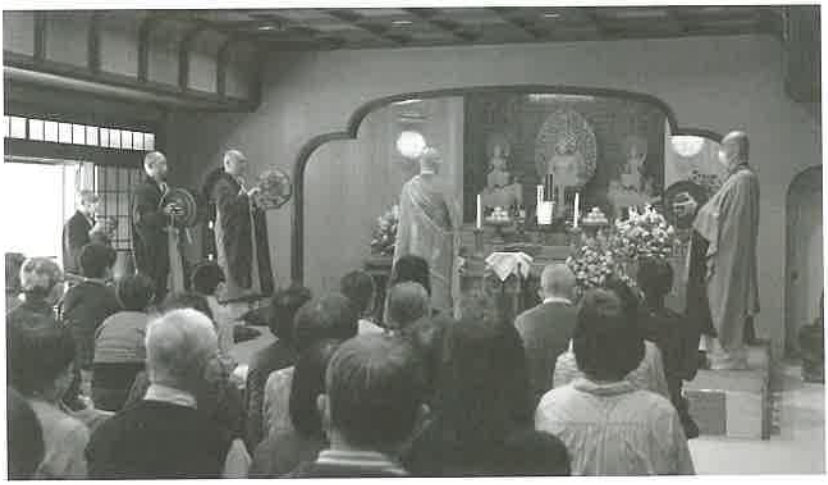
ご法話は山梨県長泉寺水庭浩章老師より頂戴致しました。

四月八日は、お釈迦様の誕生を祝う日「降誕会」。それに因みお釈迦様がお生まれになられた時に発せられた言葉、「天上天下唯我独尊」をテーマにお話し下さいました。

二見に渡る心から離れ、「いま、私ができること」に力を注いでいく大切さを語られました。

（48ページ）

ニュース・アラカルト



○盂蘭盆施食会　六月二十九日

盂蘭盆施食法会が行われ、午前午後合わせて四百名近くの方がお参り下さいました。

法話は副住職の前平武男師。「大悲の心」と題して、智慧と慈悲についてお話をされました。（法話は「善光寺YouTubeチャンネル」で配信しています）

総代挨拶は、伊藤雅章総代。伊藤総代は、坐禅会によく参加して下さる方で、一緒に坐禅をしていく中で、住職がその真面目なお人柄に惹かれて総代をお願い致しました。

伊藤雅章総代

昨年には僧侶のみで行うつもりだった接心修行（長時間の坐禅）にも参加して下さる程、坐禅に親しんでいらっしゃいます。真面目一辺倒ではなく、ユーモアを交えてご挨拶をして下さいました。

ニュース・アラカルト

○秋彼岸会　九月二十日

秋彼岸法会が営まれました。午前午後合わせて二百名程のお参りでした。

法話は住職より「六波羅蜜」のお話がありました。

（住職法話16ページ）

ニュース・アラカルト

福地山修禅寺熊田老師晋山式

令和六年六月九日　伊豆の古刹、修禅寺第四十四世 熊田慧照老師の晋山式が挙行されました。熊田老師は善光寺にて三十余年もの間、檀務等のお力添えを頂戴していた方です。

先代住職の頃より、法要だけでなく、作務も積極的にお勤め下さり、先代住職遷化後も博志方丈をお支えいただきました。

気さくなお人柄で檀信徒の皆さまにも親しまれておりましたが、一昨年の七月に横浜の地を離れて、修禅寺のご住職に就任されました。この度住職披露の大法要準備が整い、晋山式が盛大に執り行われました。

善光寺から、方丈と副住職が随喜し、晋山開堂では問答も行いました。熊田老師の益々のご健勝を祈念致します。

ニュース・アラカルト

皆さまも伊豆に行かれる際には、是非、足を運んでみてはいかがですか。温泉と素敵な宿がたくさんありますよ。

ボーイスカウト坐禅会

令和六年二月十二日　朝七時前からボーイスカウトの皆さんが坐禅会に来山されました。

コロナ禍後、久々の開催となったボーイスカウト坐禅会。小学生低学年のお子さまから、付き添いの保護者の方々、ボースカウト関係者の方々など、老若男女、皆で一緒に坐ることが出来ました。

坐禅後は二月十五日の涅槃会にちなみ、本堂に掛けられている涅槃図を見ながら住職がお話をさせていただきました。

ボーイスカウトOB、ガールスカウトOGの方々からも「懐かしかったです」とおっしゃっていただき、継続の大事さを感じました。

また、「当時もらった『日常の五心』を玄関に長年飾っていました。お陰様で、子どもたちも立派に成長しました」と嬉しいお声も頂きました。

日常の五心

一、「はい」という素直な心

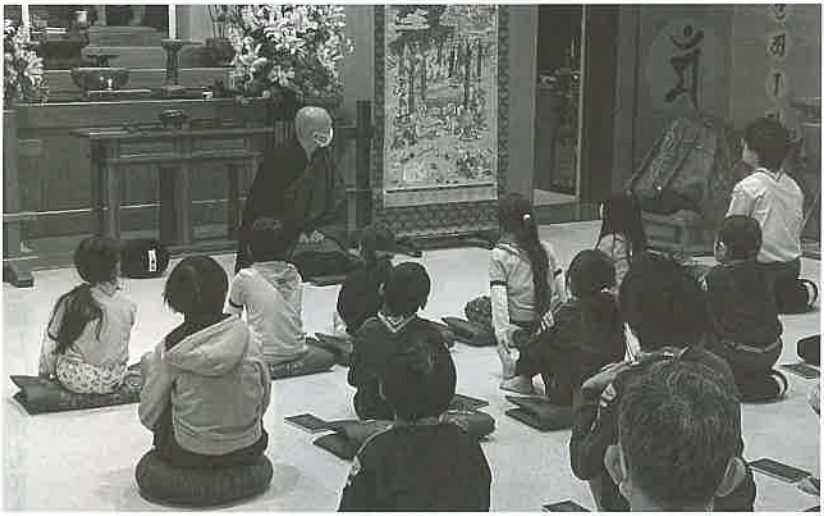
一、「すみません」という反省の心

一、「私がやります」という奉仕の心

一、「どうぞ」という譲歩の心

一、「ありがとう」という感謝の心

ニュース・アラカルト



中・高生による写経体験

令和五年十二月、横浜市立南高等学校・南高等学校附属中学校書道部の皆さんが写経体験に来てくれました。

昨年に引き続き二回目の写経会となります。生徒の方々も二回目ということで少し慣れた雰囲気でした。写経前には、イス坐禅を行い、写経後には浅摩泰真師によるお話と山内の拝観。イス坐禅や写経中の集中力みなぎる様子に対して拝観中はリラックスして、泰真師にいろいろ質問を投げかけるなど和やかな雰囲気でした。顧問の先生はじめ、書道部の皆さんの仲の良さを垣間見ることが出来ました。

ニュース・アラカルト

浅摩泰真師　特派布教師任命

善光寺で平成二十三年より、事務や檀務等のお手伝いを頂いている厚木市興教寺浅摩泰真師が、この度曹洞宗特派布教師に任命されました。

特派布教師とは曹洞宗管長猊下の御言葉を広く伝えるために全国各地を布教巡回し法話をされるお役の方です。益々のご活躍を祈念しております。

ニュース・アラカルト

水庭浩章老師　大本山永平寺役寮として上山

今秋、山梨県長泉寺水庭浩章老師が福井県大本山永平寺の役寮として上山されました。

水庭老師は、博志方丈の法友で、二十年近く、檀務や一斉法要などでご尽力頂いており、『成寿』にも毎回法話を寄稿して頂いております。益々のご活躍をご祈念申し上げます。

おうちで写経・写仏のすすめ
～仏さまとのふれあいを感じよう～

今年も一斉法要の御案内に「写経・写仏」セットを同封してお送り致しました。

コロナ禍の令和二年より始めて、はや十八回を数えます。写経は現在、『修証義』をお送りしておりますが、第二章「懺悔滅罪」まで終わりました。

写仏も伊藤三喜庵先生の仏画を皆さま思い思いに色を塗って下さっています。

お届けいただいた写経・写仏は、後日「奉納祈祷」を執り行います。

ニュース・アラカルト

切り絵で写仏
野倉高明様

伝法会　来山

十一月十八日、伝法会の皆さまが来山されました。

伝法会とは、西田正法老師（現在大本山永平寺副監院）が永平寺伝道部講師、ならびに布教部部長を務めておられた時の修行僧を中心に発足した会です。毎年、全国各地のお寺を会場に、西田老師や会員が講師を務め、研修会を開き、共に研鑽を深めております。

今回は当山が会場となり、本尊様へのご挨拶の法要と、今年五月に逝去された住職の母、倫子様のご供養を西田老師がご導師としてお勤め下さりました。

その後の研修会では博志住職が講師を務め、善光寺の成り立ちや留学僧育英会、各種行事などの活動を紹介しました。

ニュース・アラカルト

西田老師は四十年程前に善光寺で法事等檀務をお手伝い頂いていた時期もあり、釈迦殿本堂建設時のお話や先代住職との思い出などを懐かしくお話し下さいました。

AED講習会を開催

十一月七日、釈迦殿にてAEDの講習会を行いました。

お寺では釈迦殿玄関に、また横浜やすらぎの郷霊園では管理事務所内にAEDを設置しています。設置してはや十数年が経ちましたが、これまで一度も使用したことはありませんでした。設置した際には講習を行ったのですが、今回、霊園の職員を新しく採用したこともあり使い方を学び直しました。

AEDは心臓の動きを測定・解析し、心停止状態（心室細動）の心臓に電気ショックを与えて正常なリズムに戻す医療機器です。公共施設など人が多く集まる場所に設置されています。

お寺や霊園も人が集まる所。「いざ」という時に慌てずに使用できるように練習致しました。「いざ」はない方が良いですけれど……、いつ何があるかわかりませんものね。

■成寿アーカイブ　第三十三巻（二〇〇二年）より

先代方丈黒田武志老師が発願し発刊された『成寿』も五十四巻を数えます。檀信徒の皆さまに親しみを込め、分かり易く仏教を説き続けた先代方丈さまのお心を今一度追慕し、瑩山禅師顕彰碑建立に寄せてお話しされた内容を再録させて頂きます。

瑩山禅師に導かれて

『ただひたすら夢に生きる』

黒田武志

深いえにしをふたたび

平成十三年十一月十五日は、私と、家内倫子（みちこ）にとって、生涯忘れることのできない尊い日となりました。

紅葉たけなわ、錦に彩られた音羽の山。心洗われるように遠く澄み渡る碧空（へきくう）……。行く秋を惜しむかのようなそんなひととき、私たち夫婦は感無量の面持ち、大旱（たいかん）に雲霓（げい）を望む（ひでり続きに雨を乞う）が如く天下の名刹・京都東山清水寺の境内に待ち受けておりました。

開創は奈良時代、世界遺産にも登録されております清水寺、山号は音羽山、千二百余年前にさかのぼります。その昔延鎮上人が夢のお告げに導かれ、白雲たなびく音羽山、いつしか麓の滝にたどりつきました。そこで出会った行叡居士より授けられた霊木。それに千手観音像を彫り、滝の上の草庵に祀ったのが清水寺の始まりといわれます。まもなく、高子妻室の安産を乞い、鹿狩りのため上山した坂上田村麻呂というお方、延鎮上人に出会うことになります。殺生の不正を説かれる上人の教えに深く感動した田村麻呂は、観音さまに帰依し、仏殿を建立、ご本尊十一面観音像を崇めて以来、清水寺は鎮護国家の道場となりました。

奥深く歴史あるこの清水寺、北法相宗のご本山でございますが、実は我が曹洞宗ともたいへん深い関わりをもっており、不思議な縁起を観ずることができます。

禅という、ひとつの宗教思想を確立した曹洞宗の高祖。みなさまもよく御存知の通り、道元禅師です。禅師の、「尊いけれども高度で難解な教え」を衆生にもわかりやすく説き広めたのが、太祖瑩山禅師です。（瑩山禅師がどれほどの偉業を成し遂げたお方だったのか……くわしくは後ほど特筆いたします）この瑩山禅師と清水寺の観音さまは、実は大層深いご縁で結ばれておりました。

瑩山禅師は、今から六七七年前、鎌倉時代の末、越前（現在の福井県）に御降誕されました。禅師の御祖母さまに当たられるお方を明智優婆夷さまと申しますが、禅師は母君の懐観大姉とともに、幼少の頃から仏の心を学び、深く愛されて育まれたそうです。

明智さまは、高祖道元禅師さまが大陸仏法の伝燈を担って無事中国留学から帰国した最初の在家女人の修行者であったろうといわれていま

す。この明智さまがおられなかったら、瑩山禅師は、道元禅師とのご縁をもつことができなかったのではないか……と思われるほど、瑩山禅師の生涯に大いなる影響を与え、人生の道しるべとなり、光となったお方でした。

まだ、瑩山禅師がご誕生になる何十年か前のこと、この明智さまがなぜか肉親の前から忽然と姿を消し、行方知れずになられたことがありました。その間、七、八年。ひと昔という時間になります。のちに、瑩山禅師の母君懐観さまは、その消息を探し、尋ね歩かれたといいます。

その時分、懐観さまが日参なさったのが、清水の観音さまでした。観音さまに願をかけられた懐観さまは、明日満願という六日目、路上に小さな観音さまの頭部を見つけ、ハッとしてそれを拾い上げ、大切に両手で包み込み、「もしも御母上さまのご様子がわかるものならば、この観音さまの頭部にお体を与え、永く、深く崇めたい……」と一心不乱に祈ります。そうすると、この願いは忽ち叶えられ、探しても見つからなかった明智さまと遂に巡り会うことができたといいます。

懐観さまの、明智さまを想う熱き祈りは、音羽の観音さまに通じ、聞き届けて下さったのですね。

また、なかなかご懐妊の兆しのなかった懐観さまは数え三十七歳の年、輝く光を飲むような夢をごらんになられ、まもなくご懐妊、のちの瑩山禅師を身ごもられていることにお気づきになりました。三十七歳といえば、ちょうど今の、雅子妃殿下が新宮さまをお産みになったときとたいへん似たお年頃です。現代のように近代医学が発達した時代でさえも、慎重になる年齢ですから、今から七百年近くも前のことでは、それはもう、命がけの出産を覚悟せねばならぬ大事であったと思います。

しかし、何としても、呱呱の声（赤ん坊の産ぶ声）を聞きたい。そして、命に代えても生まれ出でたこの子を世に送り出さなければならない！「大善知識となるような、世の光となるような立派な子を無事産ませていただきたい！」と……。

そう願う懐観さま、越前・多禰（たね）の観音さまに毎日詣でて『観音経』を読誦し、三千三百三十三拝という礼拝をつとめ、死をも決意しての壮絶な祈り、命がけの誓願でした。

この三千三百三十三拝という礼拝は、三十三体に化身した衆生を済度（心をもつすべての存在を苦しみ・迷いから救い、悟りを得させること）する観世音菩薩の大慈悲にちなんだものです。

こうして毎日祈願して七ヶ月経ち、またその日もいつものように多禰の観音堂への道すがら、懐観さまはにわかに赤子が産まれそうな気配におそわれる。そして、歩きながら間もなく安らかに赤子をお産みになられたといいます。境内を歩きながらのご出産であったので、幼名を「行生」と名付けられ、のちの瑩山禅師さまのご誕生となったのであります。瑩山禅師は懐観さまの子であり、そして同時に観世音菩薩の申し子でもありました。

それからは尊い御祖母・明智さま、御母・懐観さまの深い観音信仰に育まれ立派にご成長になり、出家、学問・修道・住持・檀信徒の接得……すべてにわたって観世音菩薩（ここでいう観世音菩薩というのは、祖母・明智さまと清水寺にちなむ、あの十一面観音さまです）に祈誓し蘊奥を授かってゆかれたのです。

やがて禅師は、能登（石川県）に洞谷山永光寺を開かれますが、その開基は弟子・祖忍尼。このお方は瑩山禅師にとって祖母・明智さまの再来かと思わせるほどの信仰心深くして慈愛に

満ち、あたたかな存在でありました。永光寺山内には、かの十一面観音さまを奉納、それを安置する円通院をお建てになりましたのも、明智さまの誓願。また、母君懐観さまの素志を生かして、「すべての女性の悲しみ（この時代、たとえば妊娠・出産においても幼子を育てていく環境はきびしく、つとにむごい運命を背負う人が多かったのです）から何とか救ってさしあげたい」という祈願を成就するためであり、「女流済度の菩薩」になろうという誓願を発願なされたのです。まさに、この円通院観音堂こそは、祖母明智さま・母懐観さまの悲願を実現するための女性の道場であり、それはとりもなおさず、瑩山禅師における仏法宣布誓願成就のための道場でもありました。

禅師はこの永光寺を一生偃息安楽の地になさろうと思われましたが、瑞夢（たいへん縁起のよい夢）に導かれ、やがて、諸嶽山總持寺となる諸嶽寺の門に入り、辺りを仰ぎ見渡しましたところ、かの清水寺を彷彿させる、霊験あらたかな聖地であり、魂が清められるがごとくまことに壮観で、ここそは、仏法の縁が熟した空間であると直感、山門建立を発願されたといいます。

果たして、仏祖正伝の法は、禅師とその門流によって飛躍的・爆発的に伸展することとなりました。観音信仰の篤い禅師は、「放光菩薩」（放光菩薩は、観音・地蔵、二菩薩の徳をそなえ、これを一体とした菩薩さまです。観音は円通の徳、地蔵は慈悲の徳……というように、慈悲救済を本願として、すべてのものに利益を与える菩薩さまなのです）を置かれて、遍く寺檀の教化、庶民……ことに哀れな悲しみに包まれた女性に慈悲の光と、安堵の仏法を説いてゆきました。

このように思いを馳せてまいりますと、瑩山

禅師さまをとりまく方々のご誓願をして、後世にまで脈々と受け継がれてきたその感化力に感嘆せずにはおられません。この尊いお二方なくしては瑩山禅師を語ることはできない……と申し上げても過言ではありません。

清水寺さまとのご縁を報恩顕彰する碑

倫子と私は、かねてよりこの尊い軌跡をたずね学んでまいりましたが、ことに倫子は、瑩山禅師ご生誕の地でありますところの越前に生を享け成長したという巡り合わせ、このご縁を篤く思い瑩山禅師さまを深く学べば学ぶほどに御祖母・明智さま、御母・懐観さま、さらには、わが曹洞宗高祖さまと瑩山禅師さま三代に亘る清水の観音さまの深い仏縁、この奇跡を広く世の人々に知っていただき、そして永くその恩徳に感謝し讃えてゆきたいと、何かしないわけに参りませず、これが碑建立の発願に至ったのでございます。

そして……。

一昨年（平成十二年）清水寺ご本尊十一面千手観音三十三年目の歴史的ご開帳と時を同じくして、曹洞宗高祖道元禅師さま降誕八百年、さらには昨年、道元禅師七百五十回忌大遠忌を翌年（今年）に迎えるという、まこと不思議な仏縁重なる千載一遇に、大本山清水寺さまのご理解と總持寺さまのご庇護のもと、この祈願は聞き届けられ、『曹洞宗太祖瑩山禅師と清水の観音さまとの深いえにしを報恩顕彰する碑』として建立することができたのです。

この記念すべき誓願は清水の舞台を展望する一等地、参詣者で溢れ、混雑のなか、無事除幕の式典を執行させていただくことができました。

除幕式には、大本山總持寺貫首板橋興宗大禅師猊下、北法相宗大本山音羽山清水寺貫主森清範大僧正猊下にご臨席いただきまして、心あた

顕彰碑除幕式　左より板橋猊下、黒田倫子、森清範貫主

たかいお言葉も頂戴するという、身に余る光栄をいただくこととなりました。

まずは、板橋曹洞宗貫首猊下お導きの尊い読経。「願わくばこの功徳をもってあまねく一切におよぼし、我らと衆生を皆ともに仏道を成ぜんことを……」朗々と響き渡るなか、除幕の式を順々とすすめさせていただくことができました。

発願主・倫子は、観音さま、瑩山禅師さまへの言上。『啓白文』を奉読。

『啓白文』

謹んで三世十方の諸仏　諸菩薩に奉言し、諸法の諸天の瞑祐を敬仰し奉る。

観音経に示したまいて、観世音清聖は苦悩厄死に於いて、能く為めに依怙と作れり、一切の功徳を具して、慈眼をもって衆生を視たもう、福寿の海　無量なり、と。

虔も惟るに、昨年は（平成十三年に読んだものなので、ここでいう昨年とは平成十二年のこと）清水寺御本尊十一面観世音菩薩　三十三年目の御開帳の年にあたり、また昨年（平成十二年）は曹洞宗高祖道元禅師さま降誕八百年、来年（平成十四年）は道元禅師さま七百五十回忌大遠忌の年にあたる。

この佳き千載一遇の仏縁の重なる本年（平成十三年）ここに音羽山清水寺さまの御理解と諸嶽山總持寺さまの庇護のもと、曹洞宗太祖常済大師瑩山禅師さま、ならびに御祖母、母君三代にわたる清水の観音さまとの奇しきゆかりをしるす報恩顕彰碑を建立し、除幕の式典を執行す。

ここに、ひたすら大恩教主釈迦牟尼仏、歴代の祖師の証明を仰ぎ奉る。

伏して冀くは、みなともに仰いでみ仏の教えを信じ、慇懃に供養するゆえんなり。

ねがわくは、うけ給え。

平成十三年十一月十五日

発願主　黒田倫子

謹んで白す

音羽山清水寺貫主森清範大僧正猊下には、「本日は錦秋になんなんといたします、この清水寺におかれまして、瑩山禅師さまの記念の供養碑が建立されまして除幕されましたこと、まことにおめでとうございます。

また、施主黒田さま、そして今日は、大本山總持寺板橋興宗猊下のもと、本当に大勢の方々にこうした供養をご随喜たまわりましたこと、まことにありがたいことと存じております。

うかがいますと、瑩山禅師さま、たいへん当山の観音さまとのご縁が深うございますようで……さらに、この記念碑が、当山と曹洞宗とのご縁を篤く深めていただけますものと思ってお

ります」

と、まことにありがたい、温かいお言葉を頂戴し、そしてまた、大本山總持寺貫首板橋興宗猊下からは、

「秋晴れの良き日に、この天下の名刹清水寺さまで瑩山禅師顕彰の碑を開眼されたというのは、まこと喜ばしいことであります。天下の清水寺と我が宗門は、深いご因縁が結ばれておりますが、今後ますます深められていくということは、法のためにも喜ばしい限りでございます。

ここに至るまで、いろいろとご理解をいただいた清水寺貫主猊下のご厚情ならびにお世話の方々……そしてまた、これを発願し奉納された横浜善光寺さまならびにそのご寺族の方々には、深く感謝の念でいっぱいであります。

また、本日は全国から馳せ参じられた我が宗門のお寺さま方、さらに、ご参詣の方々にも深く感謝申し上げます。

今後とも、よろしく清水寺さまと我が宗門との繁栄を祈念し、ここに祝福を申し上げたいと思っております」

と、ありがたいお言葉、尊い教えを頂戴いたしました。

発願主・倫子も、感極まった様子で

「本日は清水寺さまの破格のご好意で、清水寺の森清範貫主さま、總持寺の板橋禅師さまにお出ましいただきまして、このようなりっぱな除幕式を執り行うことができましたこと……本当に身に余る…身に余りすぎる光栄を感じております。今日ほど、生まれてきてよかったという悦びと幸せを感じたことはございません。本当にみなさま、ありがとうございました」

と、感謝と感激の謝意を述べさせていただきました。

そして私もまことに感激、はげしく心は高揚し、おさえることができませんでした。

「高いところから大変僭越ではございますが、ただ今家内のお礼の挨拶に、一言、二言、付け加えさせていただきたく、お時間頂戴したいと申し上げ、重ねて皆様……ことに清水寺の森清範猊下、大本山總持寺板橋猊下、また大西真興執事長さま、森孝忍法務・庶務部長さまに唯々ありがたく心より厚くお礼を申し上げます。

顕彰の碑にも書かれておりますように、このたび建立についてお骨折りいただきましたお方は、駒沢女子大学学長東隆眞先生でございます。本日はどうしても、公務にてこちらの方にはお出ましいただけませんでしたが、皆様にくれぐれもよろしくお伝えいただきたいとの伝言を頂戴いたしております。まずもってお伝えし謹んでご報告申し上げます。その名代として、学長のご長男さまにおいでいただき、ありがとうございます。

さて……ただいま、倫子も申し上げましたが、

この日本一の清水寺にこのような大事をさせていただいたことは、出過ぎたことではなかったろうかと、また、境内の一等地をお借りして建立させていただいたことにつき……ちょっと大きすぎましたか……と恐縮しながらお尋ねいたしましたが、管長さまにも快く許していただき、瑩山禅師さまの御遺徳に免じて諸々お許しをいただいたものであろうと思う次第でございます。

瑩山禅師さまのお母君は、ご存じのように、この清水寺観音さまをたいへん深くご信仰になりました。東隆眞先生からいつの日だったか「瑩山禅師さまも随分お参りなさったことでしょうね！」とおっしゃるので、私も「ええ、もちろん、曹洞宗高祖道元禅師さまも親しくここの観音さまにお参りになったんじゃないでしょうか」と、七百年も八百年もの昔に思いを馳せながら申し上げました。その同じ地にこうして立っておりますと、今にもそこに禅師さまが居ますがごとくに感じられ感無量でございます。

瑩山禅師さまは、お祖母さま、お母君さまの遺志を受け継ぎ、女性の救済に努めたお方でもあります。現代ではあたりまえのことですが、昔は考え方が少し違っていたのです。いささか古き悪しき女性蔑視の状況を目の当たりにして大層お悲しみになっていた、そのご意志を継がれた瑩山禅師は、「女性を尊重せよ」という教えをも、私たちに残してくださいました。

私も今日から改めて、女房をはじめ、日本中の、また、世界中の女性を大事にしていきたいと堅く心に誓わせていただきました。そしてこのようなことを両猊下にもお願い申し上げております（笑）。二十一世紀は女性の時代だと言われておりますから……瑩山禅師の教えどおりになってゆくかと思われます。

もう一つ、瑩山禅師さまは、檀信徒の方々は本当に尊い宝であり、み仏のごとく接せよ、と

教えてくださっております。
そういう意味からも清水寺さまは、まさにそうした方々を大切にしておられ、朝は六時に門をお開きになる、そして閉門は夕方六時。朝早く目覚めた方も、仕事が終わった方でもお参りに立ち寄れる。日本全国から年間七、八百万人もの参詣の方であふれかえるご隆昌は、日本中見渡してもなかなかあるものではありません。
そんなすばらしい清水寺様と、この度のご縁を結ばせていただきましたこと……さきほど板橋禅師さまにもお喜びでいらっしゃいましたが、宗旨・宗派を超えて結ばれた尊いご縁にさらに感謝申し上げ、私も今後ない力を振り絞って仏法に照らし日本のため、そして世界のために尽くしていきたいと思っております。
清水寺さまの観音信仰がさらに世界にまで広がりますように……また曹洞宗もその徳にあやかり、お釈迦さまに感謝申し上げ、歴代祖師の方々にも厚く御礼申し上げたい。そして、このお導きに感謝し応えて全力を尽くすことをかたく心に誓いまして、皆様への御礼の言葉に代えさせていただきたいと思います。本当に本日はありがとうございました。」
お礼を言い終え、万感胸に迫るものがあり、震える思いを致しました。
除幕式ののち、成就院で行われました祝宴では、ご来賓各位代表さまのお言葉もあり、ことに京都府下四百カ寺代表宗務所長村上俊鳳老師さまより、
「今日この音羽のそよ風吹く青空の下、とどこおりなく除幕の式を終えられまして、発願主黒田倫子夫人、横浜善光寺黒田武志ご住職にも心よりお祝い申し上げたいと思います。観音さまと善光寺の仏縁も深まり、私たちもそのご縁と、観音さまの大きなお徳、大きな法悦を頂戴いたしましたこと御礼申し上げます。名刹清水

寺さまと、曹洞宗ご本山總持寺さまとのご縁がこうして深く結ばれ、そして今日のような盛大な除幕式が清水寺で行われましたことは、地元といたしましても光栄に存ずるわけでございます。これまで遠いところにあるように感じておりました大本山總持寺さま、そして瑩山禅師さまと京都の清水寺さまとにこのような深いご縁があることを改めて認識いたしました。今後、京都府管内四百カ寺檀信徒の皆様はじめ、たくさんの方々にも、これを契機といたしまして、ご参詣いただきたいと思いますし、清水寺さま曹洞宗さまとの絆がより強くなるためにも、この顕彰碑建立にはまことに深い意義があり、これを機に皆様に広く知っていただくことが大切だと思いますし、感謝し申し上げる次第でございます。

本日は、発願なさいました横浜善光寺のご内室ならびに善光寺ご住職さま、ありがとうございました。今後とも、京都府管内関西管内につきましてもよろしくご導愛いただきたいと存じます。

板橋興宗、森清範両猊下に感謝いたしますとともに、観音様のご慈悲によってご縁をいただいて、世界の宗教が手を携えて一つになる糸口ではなかろうかと感激しております。」

と、温かく胸にしみいるお言葉をいただきました。

夢に生きた瑩山禅師のお導き

さて、私たちを導いてくださった瑩山禅師さま……ご生誕前後の不思議な観音さまとのご縁はおわかりいただいたかと思いますので、その後、どの様にご成長なされたか瑩山禅師さまのお姿をお話しいたしましょう。

幼名を「行生」。元気でたいへん聡明なお子

様でしたが、やはりふつうではありません。遊びよりも、土を練って仏像を作ったり幼少より経典を開いたり、また非常に感受性が強く、短気だったと言われますが、ある時期より仏の心が強く芽生え始めます。かぞえ六歳のとき、母君に連れられ観音さまにお参りし、その慈悲あふれる観音さまのお姿を見て、

「この菩薩さまはどこにいらっしゃるのですか、どうしてこのようにみなに尊敬されているのですか」

と、尋ねられたそうです。

母君は、「まだ豆と麦との区別もつかないような幼子がこのような！」

と、大変驚かれましたが、気をとりなおして、

「行生や、観音さまは、慈悲深い心をもって、多くの難儀を救う菩薩さまです。むずかしい道理や因縁を説くことは私にはできないが、ただ、この大慈悲の心をたよりに、唯々あなたの成長

を願い、我が家の幸せを望んでいます。だからこの観音さまを深く信仰し、毎日礼拝しては、ひたすらにお経を読誦することが大切なのですよ」

と、お答えになりました。この言葉は行生の心に響き、観音さまに帰依して出家求道の大志を駆り立てていったと残されております。

以来、日常生活では読み書きに通じ、ひとたび見聞するやすべて記憶し、経文も独学でその意味を理解されるなど、三宝（仏・法・僧）を敬い、お経読誦する修養の毎日が続きました。この卓越したお姿を見て人々は、「観音さまの生まれ変わり」だと言うほどになっておいでした。曹洞宗の高祖である道元禅師もまた、四歳のときから中国古代の難解な詩やお経を読み理解したという天才児であったことから、そのあたりもたいへん似ていらっしゃいます。

さて、八歳にして出家の志をご両親に申し出られた行生さまは許されて、永平寺（道元禅師開創）の第三代住職を継がれた義介禅師のもとで修行を始めます。十三歳のときには、義介禅師の師である懐奘禅師に就いて菩薩戒を受け、正式な僧侶となりました。まもなくご高齢のため懐奘禅師は入滅され、遺命を受けた義介禅師のもとで再び真剣な禅修行が行われることとなりましたが、ともあれ仏弟子となって、道元禅師の優れた高弟お二人から深い仏縁を結ぶことができたというすばらしい環境に恵まれました。

そののち、求道心はさらに深まり、五年ほど経ちいわゆる青春時代ともいえる若き日々、宝慶寺の寂円師の元へ、さらに京都に上って万寿寺、東福寺で臨済禅を学んだのち、比叡山にのぼり天台教学を、そして紀州由良の西方寺（後の興国寺）へ……禅師自らこれらを述べる記述が充分でないので、はっきりとしたことは申せませんが、ともかく、あまた他山にものぼり、

他宗の善知識にも師事、さまざまなご体験と学びを深くして視野を広げ、大いなるご修行をなされたと想像できます。

このように、西へ東へ、野へ川へ……師を尋ね道を学ぼうとする禅僧を「雲水」と申しますが、僧侶を志す者にとって、自ら体験し、修行して越えねばならない欠くべからざるプロセス、私も若き日々、とてつもなくきびしかった全国行脚……そんな雲水時代を経験させていただきましたので、この頃の青年僧瑩山禅師の心境を、恐れ多いこととは思いますが、わずかでも感じとることができるような気がいたします。

各地を巡りながらやがて二十一歳の秋。永平寺に戻られた禅師は、翌年、大乗寺を開創した義介禅師に師事され、加賀の地に移られました。

義介禅師のもとで厳しい修行を積みながら、二十七歳のとき、「深く真の仏法に達した」と、師から認められるに至ります。

「平常心是道（びょうじょうしんぜどう）」。これは、中国唐代の僧　趙州（じょうしゅうじゅうしん）従諗禅師が、その師・南泉普願（なんせんふがん）禅師との問答によく用いられる言葉です。「道とは何です」との問いに、「平常心」と応え、その奥深い意味を趙州禅師は一瞬にしてとらえ、悟りを開いたという法話です。

これがいったいどういう意味のことなのか……義介禅師もまた弟子たちに問われたとき、瑩山禅師ただ一人、「わかりました！」と応える。

「黒い玉が暗闇の中を飛んでゆくようなものです」

義介禅師が静かに微笑んでさらに意味を問うと、瑩山は、

「お茶を飲むときはお茶を、ご飯をいただくときはご飯をおいしくいただくこと……あたりまえの日常のことを素直にあたりまえに実行することです」

とお答えになったという。これこそ「平常心

是道」の極意。このこたえを聞いた七十七歳の義介禅師は大層によろこび、瑩山に向かい、

「汝はもう私を超えている。我が永平祖師の宗風を継承するがよい」

と正式に許可されたというのです。

平常心……私たちは、毎日の多忙な生活の中で、「日常茶飯事」の一つ一つにとらわれたり、こだわりに振り回され、なにか自ら窮屈な常識や標準や規範をつくって縛られたり、身動きできなくなっているのではないでしょうか。仏教や禅は、そんな窮屈な思いをせずとも、人間はもっと自由であり、解放されていると教えています。また、ある禅師が「禅とはなにか」と問われたとき「眠くなれば眠る、腹が減れば飯を喰う」と答えたという。ともすれば眠くないのに眠ろうとしたり、空腹でないのに食べようとする、これなどは、平常心是道に従っていないことになる。申し上げますように、勝手に自分の規範に振り回されていることになりはしませんか。私の女房など『ああ眠れない』などと寝言を言うことがあります。実に可愛くて罪がない、どうでしょう。

坐禅……これは、「悟り」を得るための真髄ともいえます。が、坐禅のかたちにとらわれない禅を日常生活においても、実践してゆくことができる……瑩山禅師さまは宗風を大衆化されたといわれておりますのも、このように難しい仏教の教えを広くわかりやすく衆生に教えて下さったことがあげられると思います。

「平常心」の悟りによって禅師は、人々を教化する資格を得、以後、道元禅師の「正伝の仏法」を世に広め、曹洞宗発展の原動力として精力的な活動が展開されていくこととなりました。

曹洞宗高祖道元禅師さまがご在世だった鎌倉時代は、殊に戦乱や政治の乱れにより人々の不安が大きくなっていた時代でした。それだけに

人々は強く心の救いを求め、そんな人々に応えるべく衆生の救済というお立場から、すべての人は仏であり、すべての人は仏になりうるとして大いなる救いの手を差しのべられ、仏の教えを一般の人々にわかるものにしようとお努めになったのが瑩山禅師さまなのであります。さて、その師道元禅師さまはまず自分を磨き、「仏教の真髄とは何か」「永遠不変の本当に正しいものとは何か」をご自分の内に向かって問いてゆき、「本当に正しいことを理解する〝眼〟、つまり〝智慧〟を持て」と、後進の弟子たちを指導していきました。瑩山禅師は、その尊い教え「正法眼蔵」を、僧だけでなく、救いを求めるすべての衆生に伝え、それを普及するという夢を実現されたのです。

そしてその夢……誓願は、次々に成就、道元禅師の蒔いた尊い種に、水をやり育み花開かせるに至りました。どちらの祖が欠けても、今の曹洞宗はあり得なかったでしょう。

私が曹洞宗では、仏教の開祖、お釈迦さまをご本尊として礼拝し、お釈迦さまのご慈悲の心を日本に正しくお伝えになった道元禅師を「父」、瑩山禅師を「母」とし、（これは、父のように厳しく、母のように優しいという意味ではありません。両祖あって宗門ということです）、また道元禅師を「高祖」、瑩山禅師を「太祖」として、両祖大師を崇めて奉る、他宗にはない「宗祖にあたる方が二人」という特色を持つに至ったのです。ですから、両祖大師とならんで、奥深い永平寺、海をひかえた街に近い總持寺という二つの大本山があるのです。

瑩山禅師は入滅なさるまで半世紀を、ただひたすらに道元禅師の仏法を花開かせることに身を投じ夢を持って駆け抜けました。そして、二十世紀最後の年となる地球の節目ともなる一昨年（平成十二年）、瑩山禅師が生涯をかけた師、

在りし日の先代住職と倫子夫人

高祖道元禅師ご生誕八百年を迎え、二十一世紀が始まろうとする今年（平成十四年）に七百五十回遠忌を迎えることになります。

私には「現代社会をよく見渡せよ。道元禅師さまの教えを今一度真剣に学ぶことが必要な時代に入っているんじゃないかい？」という瑩山禅師のお声のようにも感じられてならないのです。

また、ちょうどご生誕と大遠忌法要を迎える年のはざまにあたる昨年（平成十三年）、先にも申しましたように、「仏心とは大慈悲心これなり」と説いた瑩山禅師さまの心の芽を息吹かせた御祖母明智さま、御母懐観さまとのゆかりを記す報恩顕彰碑を、深いえにしで結ばれた清水寺さまに建立させていただくことができました。このうえは仏弟子として、私ども夫婦そして関わる皆様とともにさらに精進致しまして、道元禅師の真の仏法を未来永劫脈々と世界の

隅々まで届けられるよう粉骨砕身、さらには私の信念を継承して伝えていってくれる仏教者の育成こそ、私に課せられた永遠の課題と受け止め、これに徹することが瑩山禅師の心を継ぐ者の使命だと思っております。

生涯私利私欲を捨て、ただひたすらに夢に生きた瑩山禅師。私たちもいつか必ず夢を実現する、という信念さえもっていれば、やがて高祖さま太祖さまの余徳をして必ずみ仏のお導きはあると信じています。私にも、今後どのような困難が待ち受けましょうとも普遍的に法灯を燃やし続け夢に生き、誓願に生きる人生を駆け抜けてまいりたいと思っております。

■育英生からの報告

菩薩の戒に学ぶ

留学僧育英会第三十二期生
東京大学大学院
和田　賢宗

戒とは

「戒」という語は、仏教特有のものではなく、日常の言葉のなかにもいくらかみられます。訓読すれば「いまし（め）」です。熟語で考えてみると、その意味はより鮮明になるかもしれません。例えば「警戒」とは、自分や社会にとって不利益なことが起こらないよう前もって注意を向けることを指します。また、「懲戒」という語は、不適切な行為を犯した者に対して、再発防止のために処分を下す際に用いられます。他にも「自戒」や「訓戒」など「戒」を含む語はさまざまありますが、それらは自己や他者、あるいは社会全体をより善く保つための身体的・言語的・精神的行為であると考えられます。

次に仏教における「戒」についてです。仏教がインドから中国に伝わる過程で仏典は古典インド語から漢語に翻訳されました。漢訳仏典にみられる「戒」という語は、古典インド語であるサンスクリット語では śīla（シーラ）という語に相当し、広い意味では「習慣」を指す語として知られます。当然のことながら、習慣には善いものもあれば悪いものもあります。そのなかで仏教では、善い習慣を身につけ、悪い行いを止めようとする心の働きを「戒」としています。

戒を受持することは、仏道修行を進めるにあたっての基盤として古くから大切にされてきました。本稿では、特に菩薩が受持する戒に焦点を当てながら、戒の徳性について考えてみたいと思います。

菩薩の戒――三聚浄戒――

菩薩とは、生きとし生けるものすべてを苦しみから救済するために仏になろうと決心した者を指します。その菩薩にとっての戒を菩薩戒と呼んでいます。

菩薩戒について詳しく述べられた最も古い仏教文献のひとつに『瑜伽師地論』（Yogācārabhūmi）があります。『瑜伽師地論』は中国では弥勒の教えとして、チベットでは無著作として伝えられています。また、三蔵法師玄奘がインドに渡った一番の目的が当文献のサンスクリット原典の入手にあったことでも有名です。この『瑜伽師地論』に含まれる『菩薩地』「戒品」という章に基づきながら、菩薩戒の内容について確認します。

菩薩戒は摂律儀戒、摂善法戒、摂衆生戒（饒益有情戒）の三種にまとめられます。これらをあわせて三聚浄戒と呼びます。

このうち、最初の摂律儀戒とは仏教徒である七衆それぞれにとっての戒であるとされます。七衆とは、出家者である比丘・比丘尼・沙弥・沙弥尼・正学女の五種と、在家者である優婆塞・優婆夷の二種の人々を指します。この七衆は、それぞれの身分に応じて守るべき戒（具足戒や十戒など）を受持します。彼らが受持する戒が摂律儀戒に当たります。摂律儀戒という言葉に含まれる「律儀」とは、サンスクリット語でsaṃvara（サンヴァラ）といい、「遮断」「抑制」を意味します。不殺生などの摂律儀戒を受持することで、悪い習慣の流れを遮断し抑制することができるようになります。そして、摂律儀戒に身を置く菩薩は、財産や名声といった世俗の事柄には無関心となり、たとえ他人から傷つけられても怒ったり恨んだりすることはなく、常に心穏やかに生活することができます。

二つ目の摂善法戒は、戒を授かった後、大菩

提のために身体と言葉によって善を集積することとされます。つまり、最高の悟りを得るための糧となるような善い身体的行為・言語的行為すべてがここに含まれると考えられます。特に布施波羅蜜をはじめとした六波羅蜜の実践がここで想定されています。

三つ目の摂衆生戒（饒益有情戒）には以下のような行為が挙げられます。例えば、病気にかかっている人がいれば看病をし、恩を受けたら感謝しつつ恩返しをし、親族を亡くした者がいれば憂いを取り除き、生活に困った者がいれば生活のための必需品を与えます。他にも、正しい行いをした者にはその功徳を説き示し、間違った行いをしたものには愛情を込めて叱責します。また、神通力によって地獄などを見せることで、衆生たちに悪趣に導く悪い行いを捨てさせます。このように、衆生たちと一緒に過ごしつつ、彼らにとって利益となる行為をすることが摂衆生戒に当たります。

以上、三聚浄戒の内容についてみてきましたが、『菩薩地』「戒品」の章末において、この三聚浄戒が次のようにまとめられています。

さらに、この三種の戒は、要約すれば、菩薩の三種のなすべきことを行う。摂律儀戒は心の安定に導く。摂善法戒は自己の仏法の成熟に導く。摂衆生戒は衆生の成熟に導く。そして、これだけが菩薩のなすべきことのすべてである。すなわち、現世において幸せに暮らすために心が安定することと、身体と心が疲れずに仏法を成熟することと、衆生を成熟することである。これだけが菩薩の戒である。（*Bodhisattvabhūmi*. Unrai Wogihara. reprint. Tokyo: Sankibo. 1971. p. 188）

ここに述べられるように、三聚浄戒は菩薩のなすべきすべての行為を表しています。摂律儀戒は現世において幸せに暮らすためであり、心が安定した状態へと導きます。摂善法戒は自己の仏の特性を成熟することになります。そして、摂衆生戒は衆生を仏道に招き入れ成熟させることになります。このように、菩薩の戒は心の安定・自利・利他という側面を備えていることがわかります。

おわりに

日本において戒は、僧侶の場合には出家得度の儀式を通して受持するものですが、在家者にとっては葬儀の際に故人に対して授けられるものという印象があるかもしれません。近年では「生前授戒」「生前戒名」という言葉が用いられるほど、今生において戒を授かることは特別なことになりつつあります。

しかし、戒は日々の生活のあり方と密接に関わります。本稿では菩薩の戒についてみてきました。菩薩は三聚浄戒を受持することで、心が安定した状態を保ち、善行を積んで自己を成熟させるとともに、他者を利益します。そして、これが菩薩の行いのすべてであり、生活のすべてを表しています。戒は決して故人や来世の生に向けられるものではなく、我々が今を善く生きるために受持すべきものです。

菩薩の行いを真似することは簡単なことではありませんが、日々の暮らしのなかで菩薩の戒を少しでも思い起こし、生活習慣を整えていくことが立派な仏道修行につながります。

〔目的〕

仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1．Zen Center of Los Angeles（LA 禅センター）
"923 S.Normandy Ave., LA., CA90006U.S.A"
2．Zen Mountain Center of NewYork（NY 禅センター）
"Box197,Mt.Tramper,NY12547U.S.A"
3．Zen-Zentrum Eisenbuch（アイゼンバッハ・禅センター）
"Eisenbuch 7 D-84567Erlbach Deutchland Germany"
4．WatPaknam（ワットパクナム）
"Bhasichareon Bangkok, 10160 Thailand"
5．理事会において必要と認めるその他の研究機関、仏教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

令和８年４月より１年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

〔募集人数〕

令和８年度若干名

〔提出書類〕

1．日本語の論文（次の論題より、いずれか一題選択）
①これからの国際交流と仏教の役割
②世界平和と仏教徒の誓願
③留学僧として私はこれを学びたい
④異文化の中で仏教を学ぶ
A4判 2,000字以上（原稿用紙５枚以上）
2．保証人と連署した願書　3．卒業証明書
4．履歴書　5．推薦書　6．健康診断書

令和７年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

令和８年１月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会
〒234-0053　横浜市港南区日野中央１丁目12番９号
TEL.045-845-1371　FAX.045-846-2000

第39回生

横浜 善光寺 留学僧募集

令和8年度・2026

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。
ご希望の方はご応募ください。
詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。

ZENKŌJI
YOKOHAMA

善光寺霊園ニュース

やすらぎ寺子屋のご案内

二〇一一年から始めた「やすらぎ寺子屋」。霊園二階の礼拝所にて、イス坐禅の体験と『般若心経』の読経。そして「仏教に親しむ」というテーマで短いお話をしています。

今年のお話を紙面にてご紹介致します。ご興味のある方は是非お気軽にご参加下さい。

■やすらぎ寺子屋一一一回

令和五年十一月十九日

人生とは……

今年の大河ドラマは徳川家康を描いた『どうする家康』です。関ケ原の戦いも終わっていよいよ終盤、江戸幕府が開かれる頃となっています。徳川家康の遺訓として有名なものに東照公御遺訓があります。

人の一生は重荷を負て遠き道をゆくが如し
いそぐべからず　不自由を常とおもへば不足なし　こころに望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし　堪忍は無事長久の基　いかりは敵とおもへ　勝事ばかり知て　まくる事をし

らざれば害其身にいたる　おのれを責て人をせむるな　及ばざるは過たるよりまされり

冒頭の「人の一生は重荷を負いて遠き道をゆくが如し」は知っていましたが、その後の文章は知りませんでした。まさに、「鳴かぬなら鳴くまで待とうほととぎす」とその性格を謳われた家康公をよく表していると思います。

そのどれもが、なるほどと、頷けるものばかりです。大切にしたい教えの中でも「堪忍は無事長久の基」の箇所で、私は師匠のことを思い起こしました。

師匠は善光寺開創期より様々な行事を行って来られました。坐禅会も多く開催し、少林寺拳法やボーイスカウトの子供達相手の会を開いて熱心に指導して来られました。幼稚園のお子さんから高校生くらいまで、また更にその保護者の方などが参禅し百名近い方の坐禅会も多かったと聞いております。

師匠はその坐禅会でいつも「人生とは何だ」と尋ね、「人生はガマンだ、ガマンしてるか」と大きな声をかけておりました。

私が坐禅会のお手伝いをさせて頂いたのは師匠が六十二歳を過ぎてからでしたが、やはりその時もシーンと静かな坐禅の場所で大きく響く声で「人生はガマンだ！」と仰っていました。この坐禅体験は、当時のお子さん達の心に強烈に残っているようです。

師匠の遷化から数年経った頃です、ある葬儀の会場で、「実は私、子どもの頃ボーイスカウトをやっていて善光寺で坐禅したことがあるんです」と声をかけられたことがありました。「坐禅中はおっかないお坊さんだなぁと思っていたんですよ」と昔を懐かしむように話を続けて下さいます。そして「よく『人生はガマンだ』と仰っていたのを覚えています。大人になってか

ら、大事なことだったんだなぁってよく思い出します」とお話しくださいました。

それを聞いて改めて、師匠はすごいなぁと思いました。理屈ではなく、相手の心にいかに響くものを与えられるか。届けられるか。それがお坊さんの力量、ひいては人としての魅力でもありましょう。

「辛い時や壁にぶつかった時に思い出して自分を励ましているんです。あの時のお坊さんの言葉に助けられています」とおっしゃられる方もいました。

『我慢』を仏教辞典で調べると、

【煩悩の一つで強い自我意識から起こる慢心のこと、仏教では自己を固定的実体とみてそれに執着すること（我執）から起こる、自分を高く見て他を軽蔑する思い上がりの心を慢と呼び、このような心理状態を分析して三慢、七慢、九慢などを説く。我慢はこの七慢のひとつ。現代の日本語で、自己を制御する、耐えしのぶの意に用いられるのは、我意を張る、強情の意を介した転機で近世後期からの用法らしい】

とありました。

そのような難しい説明ではなく、心に残る言葉というのはもっとストレートな表現なのでしょう。

仏教を少し学びはじめると、理屈っぽく、頭でっかちにな表現をしてしまい、相手に届かないこともよくあります。私も若い頃に「あなたが本物の坊さんになるには二十年はかかる」と言われたことがありました。

理屈や学問ではない生きた仏教を説き、亡くなった後でもその言葉を忘れずに教えとして保ち続けている人がいる。そんな言葉を伝えたいし、言葉ではなくても生き方で示していける人になりたいと改めて思いました。

人生は重荷を負いて遠き道を行くが如し
いそぐべからず……。

遠き道を共に歩いてくれるそんな言葉、支えとなり、杖となる言葉。大切な亡き方の口癖、忘れられない言葉など、皆さまの心の残る言葉は何ですか？

■やすらぎ寺子屋　一一二回
令和五年十二月十七日

一休さんのトラ退治

一休さんのとんち話に「屏風のトラ退治」があります。

お殿さまが町で人気の一休さんに嫉妬して、困らせてやろうとお城に呼びだします。そこで「屏風に描かれているトラが毎晩抜け出して悪さをするので困っている」とさぞ困った様子で一休さんに相談を持ち掛け「お主なら退治できるであろう」と、無理難題を吹っ掛けます。

もちろん屏風に描かれた絵のトラが出てくるなんて、うそに決まっています。しかし有名な絵描きが描いたのでしょう。屏風に描かれたトラは目を見開き、キバをむいて、今にも襲いかかってきそうです。屏風を見た一休さんは、さも感心したように、「本当に、すごいトラですね。怖いけれど、悪さをするのでは仕方ありません。しばりあげてごらんにいれますので、縄を用意してください」と言い放ちます。

お殿さまは驚きましたが、平静を装い「おおっ、やってくれるか」と。「はい。もちろんですとも」一休さんはそう言うと、ねじりはちまきをして腕まくりをしました。そして家来たちが持ってきた縄を受け取ると、お殿さまに頼みました。

「それでは、そのトラを屏風から追い出してください。すぐに、しばってごらんにいれます」。それを聞いたお殿さまは、思わず「何を言うか！屏風に描かれたトラを、追い出せるわけがなかろうが！」と怒鳴りますと、一休さんは、にっこり笑って言いました。

「それでは、屏風からトラは出て来ないのですね。それを聞いて、安心しました。いくら私でも、出てこないトラをしばる事は出来ません

から」……

【無門関　第四十二則　達磨安心】

達磨面壁す。

二祖雪に立って、臂を断って云く、「弟子、心未だ安からず、乞う師安心せしめよ」

磨云く、「心を持ち来たれ、汝が為に安んぜん」

祖云く「心を覓むるに了に不可得なり」

磨云く「汝が為に安心せしめ竟わんぬ」

達磨安心

嵩山の少林寺で坐禅三昧の達磨大師（面壁九年）のもとに神光という修行僧がやってきます。神光は儒学や老荘を学び、その後仏教を深く学び仏法の体得迄あと少しまで修行されていたそうです。

それでも何かが足りないと、心に不安を抱え修行していた神光が、釈尊からの正伝の仏法を伝えにきた達磨が嵩山で坐禅ばかりしていると聞き、達磨のもとを訪ねます。腰まで雪で埋まる程の厳寒の中に立ち、仏法を求めますが、達磨は坐禅をしていて一向に相手にしてくれません。神光は雪降る中、仏法を求める決意を示すために、自らその臂を切断し、達磨に差し出して言いました。

「私は、心が未だ不安であります。どうか私のために安心させてください」と。

すると達磨は、「それではおまえさんの心をここへ持ってきなさい。安心させてあげるから。」と答えました。

神光は、「その心を探しているのですが、とんと見つかりません」

達磨は、「さあ、もうちゃんと安心させてあげたよ」と言いました。

神光は即座に悟り、達磨の弟子となり、慧可と名乗り禅宗の二祖と呼ばれます。

心とは実体がない、縁（条件）によってさまざまに反応をするものです。それを『空』とも表現します。般若心経で説かれる『空』です。

実体のない心に左右されて、過去を悔やみ、未来に不安を抱くのではなく、今できること、目の前の出来事を精一杯行うのみ。そのように日々を過ごしていけたら爽やかな気持ちで生きられるのでしょうね。

「慧可断臂図」雪舟　一四九六年　京都国立博物館　国宝

■やすらぎ寺子屋　一一三回

令和六年一月二十一日

お釈迦様の手のひらの中で……

唐の時代に中国からインドへ渡り仏教の経典を持ち帰った玄奘三蔵法師。この玄奘の長旅を記した『大唐西域記』を基に、作られた西遊記。

道教や仏教の世界観、天界に仙界、神や龍や妖怪や仙人などのフィクッションが入り混ざった中国の明の時代に成立した物語です。孫悟空や猪八戒に沙悟浄の出てくるお話はワクワク・ドキドキで、子供の頃、よくテレビで見ていました。そこには知らないうちに仏教にふれるお話もありました。それは、孫悟空がまだ玄奘三蔵と出会う前のお話です。

中国の花果山で石から生まれた孫悟空は、仙人に筋斗雲や様々な術を習い、如意棒を手に入れ、得意になって天界にまで出かけて大暴れをします。それを見かねたお釈迦様が、悟空に「私の手のひらから出られたら、天界の主にしてやろう。出来なければ修行をやり直しなさい」と持ち掛けます。

それを聞き喜んだ悟空が筋斗雲に乗りひとっ飛びすると、行く手に五本の柱が見えます。悟空は「ここが世界の果てに違いない」と思い、柱に「斉天大聖」と書き、ついでにオシッコも引っかけて帰ってきます。

「これで、よし」と言う悟空に「悟空よ、いい加減にしなさい！」とお釈迦様。「なんだよ。オレさまは世界の果てまで行ってきたんだ。しかもそこにあった柱にサインまでしてきたんだぜ」という悟空に対し、「お前は、私の手のひらから出ていない」と言って、自分の指を見せると、そこには、「斉天大聖」の文字とオシッコの跡が！　嫌だと暴れる悟空に対し、お釈迦様は、自分の指を五連山に変えて悟空を押さえ

つけ、悟空は三蔵法師が来るまでの五百年、動くこともできなかった……。

「お釈迦様の手のひら」からは逃げ出せない。どこまで行っても「お釈迦様の手のひらの中」にいる。子どもの頃に見た西遊記のこのお話を思い出したのは、青山俊董（あおやましゅんどう）老師のお話を聞いた時でした。

（KSH勉強動画「ほんとうのしあわせとは」青山俊董、『どうなってもだいじょうぶ・光を伝えた人々』青山俊董著、春秋社刊　参照）

病院関係の仕事をしている佐々木さんという方のお話です。

その方はあちこちの病院を回って、河原の丸い石に大丈夫と書いて病人の方に差し上げたりしているのだそうです。気さくな人柄で入院されている方からもよく、「話を聞いて下さいますか」と声をかけられるそうです。明日手術を受ける人、或いは検査の結果がどうでるか判らないというような不安にかられている人ほど、話を聞いてもらいたと来るそうです。

佐々木さんは腰を据えてゆっくり話を聞いた後でそっとこの「大丈夫」と書いた石を手に握らせるというのです。すると皆さん大変喜んで「大丈夫よね」とほっとした顔をされるそうです。そこで佐々木さんは次のように言うというのです。

「大丈夫だよ、けれどもあなたの気まぐれなわがままな思いが通って大丈夫なんじゃないよ。病んでも大丈夫、死んでも大丈夫。仏さまが敷いてくれたレールから外れっこないのだから大丈夫なんだよ」って言うのですね。

これはよほど信が確立していないと言えない言葉ですよね。

大丈夫に二つの姿があるんですね。凡夫の大丈夫は、手術が無事終わって大丈夫、検査の結

果が良くって大丈夫という条件付きの大丈夫なんです。条件付きの大丈夫なんて、いつでもすぐに条件なんてものは崩れてしまいます。生身の身体を頂いているわけですから、いつかは老い、病み、死んでいくわけです。いつまでも若くありたい、健康でありたい、いつまでも死にたくない。そんなわけにはいかない。必ず条件が崩れる日がくるのですから、その条件のままでいったら、老い、病み、死んでいく時は不幸のどん底で死んでいかなきゃならんことになる。そうではない、どうなっても大丈夫。仏様の敷いて下さったレールから外れっこないのだから大丈夫。これは無条件ですよね。これが本当の大丈夫というものです。手の中から外れっこないんだから大丈夫。これが本当の大丈夫です。

柳宗悦（やなぎむねよし）さんの言葉に「ドコトテ　ミ手ノマナカナル」という言葉があります。どこを取って見ても何時でもどこでも無条件に仏様の手の真っただ中に抱かれている。

この信心の確立を安心（あんじん）という。『あんじん』と『あんしん』は違います。濁点一つだけで違う。『あんしん』とは凡夫の安心です。凡夫の条件付きの私の思いが叶って安心、結果が良くて安心。安心条件付きの安心です。凡夫の大丈夫と同じです。ちょっと条件が変わると安心ではなくなるわけです。

仏様のもう一つの方の『あんじん』は、どうなっても、結果がどうなっても外れっこない「み手の中での起き臥し」。仏の命をこのように頂戴し、仏の命を老い、仏の命を病み、仏の命を死んでゆく。老い方にも様々な老い方がありますでしょう。病もどんな病を頂くかわからない。どんな死に方が待っているかもわからない。いかなる状態であろうとも「無条件に抱かれた中での起き臥し」なんだというこれが、安心（あ

んじん）なんですね。これが本当の姿であろうと思います。

やすらぎの郷霊園の正門には「大安心地」と彫刻されたモニュメントがあります。「大安心の地」、また「安心の大地」とも読めます。お釈迦様の手のひらの中で、埋骨された御霊も墓参に訪れる方々もともにやすらぎのこころで満たされますように……。

■やすらぎ寺子屋　一一四回

令和六年二月十八日

柔軟に……

先日、第三十七回横浜善光寺留学僧育英会の辞令交付式が行われました。今年の育英生は、韓国籍の金師と日本人僧の永井雄大師のお二人でした。

永井師は鳥取県にある正福寺の生まれで、慶應義塾大学理工学部を卒業された後に永平寺で修行され、現在は駒澤大学の大学院で学ぶ傍ら、月に数回善光寺で一緒に檀務を勤めています。四月からアメリカの禅センターなどで修行される予定です。

金師は尼僧さんで、現在駒澤大学大学院の博士課程。あと一年で論文を書きあげる予定だそうです。

金師とは始めてお会いしましたが、次のような興味深い話をされていました。

「韓国仏教では、四分律（戒律）を基礎とした修行だけを重んじて、それ以外を軽んじる風潮があります。そのため仏教が、一部の修行者のためだけの仏教となってしまう危惧があります。日本でも同じような傾向はあるのかもしれませんが、日本の仏教は生活に密接にかかわっていて、日本の人たちも特別に意識しないで仏教を受け入れているように感じます。事実仏教の大学の公式行事に必ず仏教儀礼が含まれ、参加する各自の宗教とは関係なく、皆でお経を唱える場面に遭遇した時はとても驚きましたし。

メディアなどで仏教に関する内容を放送する際にも一般大衆が違和感なく受け入れているように感じています。寺院の世襲制に関しても、違和感なく、お寺の環境や文化財を守る為に肯定的に受け入れられていることも驚きです。し

かしながら、これらの特徴は、仏教の永続性や大衆化という観点からみると強力な利点ではないでしょうか。韓国仏教の利点と日本仏教の利点を合わせて、両者が共存できるような道を開いていきたいと思います」と、抱負を語っていました。

地域や時代、環境によって柔軟に変化して人々の心の拠り所となる教え、宗教としての日本仏教の柔軟さを思いました。

ヨーロッパには、「宗教なき教育は賢い鬼をつくる」ということわざがあるそうですが、宗教の目的は鬼を生み出さない事ともいえるでしょう。一人ひとりの心の中に棲むとされる鬼を好き勝手にさせないこと。この社会は一人ひとりの集合体です。自己中心に生きる性質がある私たち人間ではありますが、社会を維持するために、地域や時代で様々に宗教は活用され、また利用されてもきました。

国内においては、旧統一教会の問題が報道され、また海外に目を向ければ、ガザ地区の戦争など、宗教の違いによって生じる暴力が穏やかな日常を壊している現状があります。

日本の今の環境下では、取り立てて何か宗教を信じていますという人は少なく、逆に宗教は怖いものという印象を抱く人が多いようです。文化として親しまれている仏教ですが、さらに一歩進んで学んでみると、穏やかに日々を送るための教えがそこには数多くあります。柔軟な心で学び、そして行じていけたら良いなと、思います。

二月十五日はお釈迦様のご命日（涅槃会：ねはんえ）です。お釈迦様の最後の説法に「八大人覚（はちだいにんがく）」というみ教えがあります。八つの大人の目覚め。その為の修行徳目です。ここでいう大人という言葉。通常は（お

となる）と読みますが、仏教では（だいにん）と読みます。『禅学辞典』では、「①大丈夫人のこと、修行の円満した人、大徳の人②佛のこと③大士のこと、菩薩」と、あります。穏やかな心で日々を過ごすことができるような大人になるための教えです。お釈迦様は亡くなられる際にお弟子さま達に、怠らずに励めと遺されました。八つの修行徳目はそれぞれが密接につながっています。心穏やかな大人になるために心に留め実践して参りましょう。

八大人覚

- **少欲**　必要以上の欲望を燃え立たせないこと。必要かそうでないかを見極める正しいまなざしを持ち、自らを焼き滅ぼしかねない欲望の炎をコントロールすること
- **知足**　今ある自分自身と、置かれた環境を深い思いをもって慈しむこと。もちろん変革すべきものは変えていかなくてはなりませんが、まずは自分自身を慈しむことが大切
- **寂静**　騒がしさを離れ一人の静かな時間を持ちそれを楽しむこと
- **精進**　日々努力をかさね、怠ることなく一瞬一瞬を大切に生きること
- **不妄念**　自分の生き方の信念を定め、常に心に置いて忘れないこと
- **禅定**　心を散らさず、よく調えること
- **智慧**　自分の心とこの世界を、かたよらず、こだわらず、とらわれずに観る智慧を持ち、それを育むこと
- **不戯論**　無意味な言葉や議論を慎み、沈黙を守ること

■やすらぎ寺子屋　一一五回

令和六年三月十日

三つの心

身を削り　人に尽くさん　すりこぎの
その味しれる　人ぞ尊し

永平寺のお台所にかかっている大すりこ木棒。先代方丈がよくお唱えしていたこの句には二つの意味があると学びました。

一つ目は、人に尽くす「すりこ木」のように、自分のことよりも人に尽くせる人間になれとの教え。

二つ目は、「その味しれる人」になること。つまり自分を生かしてくれている周りの存在に気がつき、感謝できる心を抱けという教えです。

二つの教えを実践していくことは、難しいかもしれませんが、心に留めて前を向いて歩いて行きたいと思います。そのためには、坐禅に親しむことが大事。

坐禅は、黙々と坐って心身を調える修行というイメージがあります。そのためか、自分が頑張って行うので、自分のためだけに行っているという誤解もあります。しかし瑩山禅師は坐禅用心記で次のように説かれています。

常に大慈大悲に住して、坐禅無量の功徳、
一切衆生に回向せよ

曹洞宗の坐禅では、常に他者に想いを振り向け、寄り添っていこうとする慈悲の心を育みます。修行道場でも入りたての修行僧の中には、坐禅をして何か悟りたいと思い、坐禅をしている時間だけが大事な時間、坐禅こそが修行だと、

勘違いをされる方もいます。けれど皆で修行をしていくうちに坐禅の時間だけでなく、日常すべてに坐禅の心が必要なことを学びます。どんな仕事をしている時でも、目の前の行為に集中する。これは坐禅の時に姿勢や呼吸に集中することと同じです。

そして今、ここに自分が存在することが出来ている環境に気づくこと。周囲に心を向けること。更に周囲に対して感謝の念を育むこと。この感謝の心が湧いてくると人に対しても深い慈しみの心が湧いてきます。このような他を想い、他を支えようと願う心が修行で大切なことです。この慈悲の心を周囲の方々から更に広く一切衆生（いきとしいけるもの）へ巡らしていく。

道元禅師は台所を司る典座というお役の方にむけて『典座教訓』という書物を残されました。この本の内容は典座に対してだけではなく、すべての方の日常の修行に対する教えが示されています。『典座教訓』の結びには、三つの心すなわち「喜心」「老心」「大心」の三つの心構えが示されています。

凡そ諸の知事・頭首、職に当たるに及びて、事を作し務めを作すの時節は、喜心・老心・大心を保持すべき者なり

（『典座教訓』）

（意訳） 修行として自らの任務にあたる者は、必ずこの三つの心を忘れずに心がけて励みなさい。

「喜心・老心・大心」を総じて「三心」と呼びます。これらは出家修行者に対する教示ではありますが、誰でも、何に対しても共通する教えです。

「喜心」　いわゆる喜心とは、喜悦の心なり。

今こうして、み仏の教えとめぐり逢い、大切な修行として臨む「ご縁」を喜ぶ心です。嫌々に取り組んでいては良い結果にはなりません。雑用という仕事はありません。嫌々行うから雑用なのですね。

調理係という役割をありがたく受け止め、食べる人の幸せを念じて積極的に努力してこそ良い料理となり、ひいては相手も自分も悦びを得ることにつながるのです。

「老心」いわゆる老心とは、父母の心なり。

親が見返りを求めずに我が子を育てるように、相手を深くおもいやる慈しみの心。老親が、自らの寒さを後回しにしてでも寒くはないか、困ったことはないか、と子を気遣うように。

自分の都合で作った料理を押し付けるようなことなく、相手の側に立って調理方法や味付けを変えながら、手間や苦労を惜しまずに調理しましょう。

「大心」いわゆる大心とは、其の心を大山にし、其の心を大海にして、偏無く党無き心なり。

大きな山がどっしりと動かぬように堅固で、また広い海が清濁全ての流れを選り好みせずに受け入れるような偏りなく広い心。

良い材料とそうでない材料、あるいは、食べる相手によって、作業の態度を変えるような私的な感情を差しをはさまず、選り好みせずに常に精一杯の努力を惜しまない心で調理します。

■やすらぎ寺子屋　一一六回

令和六年四月二十一日

桜の花はどこにある……

年ごとに　咲くは　吉野の山桜
　木を割りて観よ　花のありかを

毎年春になり桜が咲くと思いだす一休さんの句です。

ある日、一休さんが山道を歩いていると、山賊に襲われてしまいます。賊が、荷物を奪おうとしますが、それこそ無一物で、何も持たずに歩いていた一休さん。「なんだ何も無いのか」と賊は腹を立て「坊主なら何か俺のためになるような話をしてみろ、お前らが説く仏とはなんだ、どこにあるんだ」と迫ります。一休さんは「わが胸、三寸にあり」と挑発するように答えます。これを聞いた賊は懐から小刀を取り出し、開き直って「しからば、その胸を割いて、見せてみろ」と詰め寄ります。

その時、詠んだ句がこの一句。

春が来れば咲き誇る吉野の里の山桜。しかし冬の間は、葉っぱも落とし、まるで枯れ木のようです。あのきれいな桜の花はどこに行ってしまったのか。当然、枝を折ってみても、幹を割ってみても、土の中の根っこを掘ってみてもどこにも花を見つけることはできません。

いくら探しても見つけることのできない桜の花。でも春の日差し、大地の恵み、雨や風、あらゆるものが相互に関わりあって一輪、一輪の花を見事に咲かせているのです。この相互に関わりあう関係性を仏教では「縁」とよび、お釈迦さまのみ教えもこの「縁」を中心に説かれます。

仏法とは「縁」の教えであるとも言えますし、仏とはこの縁のハタラキでもあります。『般若心経』で説かれる「空」の教えもこの「縁」の教えから説くことができます。

ベトナム出身の禅僧のティック・ナット・ハン師が著した『般若心経』（野草社刊）にあるお話を紹介致します。

あるところに王がいて、楽師の奏でる十六弦のシタールの演奏を聴き、心の底から感動しました。その音楽にたいそう感銘を受けた王は、その音がいったいどこから来ているのかを知りたくなりました。楽師がそのシタールを王に献上して退去すると、王はその楽器を細かく切り刻むように従者に命令しました。けれども、どれほどがんばってもあの美しい音色の元になる、あの音楽の本体を見つけることはできませんでした。という喩え話です。

ティク・ナット・ハン師はこの喩え話を使い、般若心経、空の教えを説明されています。

「観自在菩薩は自らの五蘊を深く観ることによって、この王と同じように、独立した実体はないことを発見したのです。たとえどんなにすばらしいものでも、それを深く観ていくと、他から分離した実体と呼べるようなものはないことがわかります。私たちには、五蘊の中に何か一定の変わらないものがあると信じる傾向があります。しかし、五蘊は絶え間なく流れていて、生じては大きくなり、やがて消えてなくなっていきます」

ここで言う五蘊とは私たちを構成している五つの集り（色受想行識）のことです。つまり、私たちが「自分」と思っているもののことです。私たちは「かたくなに、五蘊には不変で独立した実体がある。自分は一人の人間という他から分離した存在だと信じ続けています。

ブッダは、そのような実体(我)は存在しない、と説かれました。あの王が試してみたように、五蘊を分解してその中に実体を探そうとしても、見つけることはできないのです」と空の教えを説かれます。

桜の花がさまざまな条件（縁）によって咲くように、単独で存在する桜の花というものはない、すべて相互に関係をしていて、実体はないと観るのがお釈迦様の教えです。実体がないとは関係性（条件）によって変わるということでもあります。常なものはないという無常の教えにもつながります。

空に浮かぶ雲をみても雲自体に実体はないのです。空気中の水蒸気がその時々の条件によって雲として形つくられているに過ぎず、条件が変われればその形も変わっていくのです。その変わりえる条件、そのハタラキこそが縁であり空であり、仏とよばれるものでしょう。

仏でないものは何もない。そのような世界観を持てば、仏は「我が胸にもあり」、「あなたの胸にもあり、あなたそのものが仏でもある」のです。仏として、それぞれの花を咲かせていけばよいのです。

私たちの坐禅も自分のためにする坐禅ではなく、仏として坐れと指導される所以です。実体のない自分自身を手放していくことで大きな縁とひとつになる、その姿が坐禅の姿なのでしょう。

「一切の事物は我ならざるものである」
（諸法非我）と明らかなる智慧をもって観るときに、ひとは苦しみから遠ざかり離れる。
これこそ人が清らかになる道である。
（『ダンマパダ』二九七より）

■やすらぎ寺子屋　一一七回

令和六年五月十九日

嫌な人はいない、嫌だと思う自分がいるだけ……

慣れない環境で心身ともに不調をきたす五月病。中には職場の上司が嫌で出勤したくないなぁと思うこともあるでしょう。最近では「退職代行」というサービスもあると聞いて驚きました。

嫌な上司も別の角度から見たら案外良い人だったりすることはよく聞く話です。仏教では、「空」という教えがあります。空とは今どきの言葉でいえば「バーチャル・リアリティー」の世界観。全ては実在ではない、実体のないものだという教えです。

『般若心経』で説明します。般若心経には「照見五蘊皆空」とあります。五蘊を照らし見れば皆、空であると読めます。

この五蘊とは、五つの集合要素、「色受想行識」のことを指します。以下、円覚寺管長の横田南嶺老師のお話から引用致します。（円覚寺管長日誌より・『はじめての人におくる般若心経』横田南嶺著　春秋社）

「色」とは、お互いのこの肉体のことです。この体に眼耳鼻舌身の感覚器官が具わって、見たり聞いたりして感じるのが「受」であります。感受作用のことです。自分にとって心地よいか不快かを感じるのです。

次に、感じたものを好きだ、嫌いだと思うのが「想」であります。心地よければ好きになりますし、心地よくないと嫌いだと思うのです。喜びや怒りの想念といわれます。

さらに好きだと思うものに対しては、もっと欲しいと思いますし、また嫌いだと思ったもの

に対しては憎らしいと思ったり、さらには攻撃までしたりするのが、「行」であります。意志と訳したりもします。

そこで、これは自分にとって好ましいもの、不愉快なものと色分けをして認識するのが「識」なのであります。真偽、善悪、美醜と判断し認識するのであります。

例えば、恋愛のケース。

お互いのこの目や耳の具わる身体が色です。その目や耳で女性の姿を見て、その言葉を聞いて美しい、すばらしい、心地よいと感じます。これが受です。美しい姿を見、声を聞いて好きだと思うのが想です。好きになると、また会いたいと思う心の働きが行です。心の働きから行動を起こし、うまくお付き合いすることができると、その女性のことを自分の彼女であると認識するようになるのです。

やがて結婚すれば、自分の妻と認識をするのであります。

自分にとっては素晴らしい妻と認識していても、お姑さんにとっては必ずしもそうではないこともあります。嫁のやっていることを目にしたり、嫁の言葉を耳にしたりして不愉快に思います。不愉快に思うと嫌いになってしまいます。嫌いになれば、文句を言いたくなります。意地悪をするかもしれません。そうしますと、嫁も姑を快く思わないものです。お互いに仲が悪くなって、姑にとっては、どうしようもない嫁だという認識を作ってしまいます。

同じ一人の女性でありますが、旦那が見ているのと、姑が見ているのは別人物のようにも思われるのであります。

それは、それぞれの五蘊によって認識された映像を見ているだけなのです。

この五蘊によって作りだされたものは空つまり、実在ではない、実体はないのだと説かれて

おります。すべてはさまざまな原因と条件とが合わさって仮に現れたものにすぎません。そこに不変な実体は存在しません。条件によって現れて消えるだけで、実体はないということを空だと表現したのでした。空だからこそ、変化することができる。

人間関係だけでなく、病気やご家族の悩みなどで精神的に大変な状況にある方も、空だからこそ、その悩み苦しみが変化して、よい方向に転ずることがあるのだと考えを切り変え、まずはひと息、深呼吸してみては如何でしょうか。そして心の働きであるこの五蘊を学び、意志とも訳される「行」を制御できるようになると少し生きやすくなるかもしれません。身体を使って行う「行」から好き嫌いの想念をはたらかせる想にアプローチをしていくために修行が必要なのだと思います。

すべてのものは存在し、現実であると考えるのか。

それとも、何ひとつ、存在などしない、現実でないと考えるのか。

私たちがかしこければ、般若心経は、私たちがそのあいだにある中道を見出せるように助けてくれるでしょう。

（ティク・ナット・ハンの
『般若心経』野草社より）

■やすらぎ寺子屋　一一八回

令和六年六月十六日

君看よ、双眼の色
語らざれば　憂い無きに似たり

去る五月二十八、二十九日と善光寺先代住職の奥さま、現博志住職のお母さま、そして私にとっては義理の母である、黒田倫子の葬儀が行われました。

先代住職と共に善光寺開創期の大変な時期を共に乗り越え、今のような檀信徒とのつながりを大事にする寺の形を築かれ三十五年。そして先代亡き後息子である博志方丈を支えて二十年。実に五十五年の長きに渡って善光寺、そしてお檀家さま方の為にお尽くしになられた方でした。福井県のお寺の出身でとても信仰心の篤い方でした。

お別れに際し、多くの方々におこころを寄せていただきました。有難う御座います。

葬儀の時に私は博志方丈と並ぶ場所にいました。ある瞬間、お参りに来ていただいたお檀家さんが参列中、正面をじぃーと見つめていらっしゃることに気づきました。その顔を横から見ていて、はっとしました。

代々続いてお付き合いのある地元のお寺とは異なり、善光寺とお檀家さんとのご縁は、ご家族などが亡くなられ、その葬儀からという方が多くいらっしゃいます。その方も奥さまの葬儀をお勤めさせていただいていました。その時あらためてお寺にお参りいただいている方々はご家族、親であり子どもであり、夫婦であり、兄弟姉妹であり、近しい方を亡くされてご縁を頂いた方が多いことを認識致しました。

そして、次の言葉を思い起こしていました。

君看よ、双眼の色
語らざれば、憂い無きに似たり

白隠禅師の言葉と伝わっております。

「憂い…が無いのではありません。悲しみ…が無いのでもありません。語らない、だけなんです」と、詩人の相田みつをさんは、その言葉を用いて詩を残されています。

親しい方とのお別れに際し、残されたもの同士が亡き方を偲んで思い出を共有することは、その後、悲しみから立ち直ることに大きな力となります。人と話をすることによって、気持ちを吐き出すこともできますし、涙を流すことで、前を向く力が湧いてくることもあります。グリーフケアと言われ悲嘆からの立ち直りの研究においても気持ちを言葉にすることの大切さを説かれます。

でもいくら話をしてみても、いくら涙を流しても気持ちがふさぐこともありますよね。人によっては、同じ話ばかり繰り返すと、嫌われるんじゃないかしらと思ったり、何時までも気持ちが前を向けない自分を責めたりもします。

私自身、これまで多くの方のお葬儀に携わってきて、また、その後にいろいろとお話を伺う中で、気持ちの整理の仕方は決まったものはなく、人それぞれでよいのだと思うに到りました。ただ、昔から伝わっているように手を合わせること（合掌）で気づくことがあると思うのです。金子みすゞさんの詩で「さびしいとき」という詩があります。

さびしいとき　金子みすゞ

私がさびしいときに、よその人は知らないの。
私がさびしいときに、お友だちは笑うの。
私がさびしいときに、お母さんはやさしいの。
私がさびしいとき　仏さまはさびしいの。

仏様はいつまでもだまっていらっしゃるけれど、こちらのさびしさ、悲しさ苦しみを一つ残らず汲み取ってくれます。寄り添って下さっています。大丈夫だよと声をかけ続けて下さっています。そのような仏様のお心を「慈悲心」と言います。

岩波の仏教辞典では「慈悲」は次のように説明されています。

「仏がすべての衆生に対し、生死輪廻の苦から解脱させようとする憐愍の心。智慧と並んで仏教が基本とする徳目。慈（マイトリー）は友から派生した友愛の意味をもつ語で、他者に利益や安楽をあたえること（与楽）。悲（カルナー）は他者の苦に同情しこれを抜済しようとする（抜苦）。思いやりを表す」と、あります。

皆さまによく親しまれている観音様（アバーロキテーシュバラ）。同じ菩薩様でも、智慧を強調する時には観自在菩薩、慈悲を強調する時には観世音菩薩と表わされます。観音様は、世の音を観ると書きます。音は聞くものかと思いますが、そうではなく、音にならない、声にならないような思いをしっかりと観てくださる。観察の観です。こころの状態を見て下さっています。いくら表面上、上手く取り繕ってもだめです。観音様は、そのようなものを見抜き、取り払い、大慈悲心でこころを落ち着かせてくれます。

倫子さんのお戒名は、

「善光院殿慈照大倫禅尼」

慈しみの眼でこれからも善光寺、檀信徒の皆さまを照らし続けて下さることでしょう。　合掌

■やすらぎ寺子屋　一一九回

令和六年七月二十一日

盂蘭盆施食のこころ

先月末、善光寺では、盂蘭盆施食（うらぼんせじき）法要が執り行われました。

この法要は、二つの法要から成ります。

一つ目は「盂蘭盆」の法要、いわゆるお盆のご供養、ご縁の大切な方々への供養です。『仏説盂蘭盆経』（ぶっせつうらぼんきょう）で、目連尊者にまつわるお話が由来とされます。

このお経は次のような内容です。

目連尊者が神通力で亡き母親がどこにいるかを探したところ、なんと餓鬼道にいた。哀れに思い神通力で食べ物を送るも、母親が手に取り口に入れようとすると炎となって食べることが出来ずに苦しみ続けている。困った目連尊者がお釈迦様に相談をすると、「修行僧の雨安居が終わる七月十五日に大勢の僧侶たちに供養をすることで、その功徳が亡き母親を餓鬼道から救い出すであろう」と示され、目連がその通りに行うと母親が救われたというお話。

そのことが嬉しくて踊ったのが盆踊りの由来とも言われます。（諸説あり）

そして二つ目は「施食会」の法要、こちらは、供養をうけることのない諸々の御霊に対してのご供養です。『仏説救抜焔口餓鬼陀羅尼経』（ぶっせつくばつえんくがきだらにきょう）で、阿難尊者にまつわるお話が由来とされます。

このお経は次のような内容です。

阿難尊者に対し、悪業の報いとして餓鬼道に落ちた亡者、口から炎を吐く焔口餓鬼が「汝は三日後に死ぬであろう……」と告げます。そして、「それが嫌ならば、餓鬼道に落ちたすべての衆生と幾千もの僧侶たちに食事を施さなければならない」と難題を突き付けます。困った阿

難尊者がお釈迦様に相談すると、お釈迦様は、「彼らの腹を満たすには、ただ一器の食物を供えるだけで十分である。ただ一器の食物を供えて『加持飲食陀羅尼』（かじおんじきだらに）の経文を一心に唱えて仏の加護を受けることによって、その食べ物は尽きることのない無量の食物となり、それが餓鬼道に落ちたすべての衆生たちと、この世に生きるすべての僧侶たちへの無量の施しとなる」と示されます。

阿難はその教えの通りに、餓鬼道へと落ち、飢えと渇きに苦しんでいる餓鬼たちに対して、ただ一器の食事のみを供物として施し、心からの経文を唱えます。そして、彼らの魂を業苦から救い出し、その功徳によって、施主である阿難の寿命も延び天寿を全うすることになったと語り伝えられます。

お盆がご先祖様へと続く縦の縁のご供養とするならば、施食は今ここに至るまでに頂いた無数のご縁に対してのご供養とも言われます。普段、当たり前のように送っている生活は、数え切れない多くのご縁の上に成り立っています。

大雄山山主、増田友厚老師のお話を紹介致します。

あるお檀家の方が大病、脳動脈瘤を患って大きな手術を受けられたというのです。

その手術は、頭蓋骨を外す大手術でしたが、成功して一命をとりとめられたそうです。

手術後数日して、ベッドの上で何気なく新聞を開いていたら、担当された先生がやってきて「新聞はまだ、早いですよ」とおっしゃり、次のような言葉を掛けられたというのです。

「手術は無事成功、よかったですね。でも、あなたひとりの命ではないですから、大切にしましょうね」

それを聞いてその方は「あなたひとりの命ではない。そうだよなぁ、家族もいるし友人もいる。でも待てよ、あの立派な先生が、あなたひとりの命ではない、その一言をおっしゃられたのにはもっと深い意味があるのではないか」と考えるのです。

それからしばらくはその言葉が頭から離れなかったそうです。

「あなたひとりの命ではない」

そしてある時、はっと、気がついたというのです。

この病気の手術が可能になったのはいったい、いつの頃からなのだろう。そしてこの手術が成功するまでの道のりにはたくさんの、同じ病気の患者さん方がいたはずではないか、そして中には成功しないで亡くなられた方もいたはず。そのたびにお医者さんはじめ医療従事者の方々は涙を流しながらも原因を突き止め努力に努力を重ねて来られた事でしょう。その積み重ねの上に自分の手術の成功があったのだ。そうであるからこそ、

「あなたひとりの命ではない」

そう気づいたら、そう受け止めたら、残された命、人のためになることを何かしたいなぁと心底思いましたと言われたのです。

このお話を伺って私はとても感動しました。

医療の進歩と言うのは簡単ですが、進歩するために多くの命が関わっての歩みです。医療だけでなく、さまざまな事柄、その存在は長い歴史の中の積み重ねの上にあり、その積み重ねの中に自分の存在もある。

その私を、今ここに至らしめている全てのご縁に対して手を合わせる法要が施食会であり、身近な亡き方への供養を通して、そこに気づかせ、功徳を積ませて頂く法要が、盂蘭盆施食の

法要です。感謝の思いで自然に合わさる合掌は一つの世界観を表しています。対立の世界ではなく、一つの世界観。自分もその大いなるご縁の中で生かされている。そのご縁の中で自分は、何をお返しできるか。

あなたひとりの命ではないのですから……。

合掌

■やすらぎ寺子屋　一二〇回

令和六年八月十八日

パリ・オリンピックをみて

この夏、盛り上がりをみせたパリ・オリンピックが終わりました。毎回のことながら日本選手の活躍に一喜一憂。サッカーやバスケット、バレーなどの球技、柔道、水泳、陸上などのメジャーな競技から、フェンシング、スケートボードやＢＭＸなどオリンピック以外では普段あまり見ない競技まで、幅広く楽しみました。

私などは単純に楽しめたオリンピックですが、期間中からＳＮＳによる審判や選手への誹謗中傷が問題にもなっていました。熱くなる気持ちは分かりますが、それをわざわざ発信する気持ちはよく理解できません。ＳＮＳに慣れていないだけと言えばそうですが……。昔なら同じテレビをみている家族や仲間内でお喋りしていたような内容を、どんどん外へ発信しているような気がします。

コロナ禍で集まることが難しい時期があったからでしょうか？　ＳＮＳで人に聞いてもらうことで繋がりを感じるのでしょうか？　良い話なら目にしても楽しい気持ちになるのですが、悪口の方が興味を引いてしまうのはなぜなのでしょうか。また、輪をかけて、どんどんと話が止まらないような感じも怖いなぁと思いました。

悪口を言わない、乱暴な言葉を使わない、口を慎むことに関して、お釈迦様は次のように説かれています。

『人が生まれたときには、実に口の中に斧が生じている。
愚者は、悪口を言って、その斧によって自分を切り裂くのである。』
（ウダーナヴァルガ　第八章二）

仏教では、身口意の三つ（三業）を調えることが修行の基本となります。

それぞれ、身とは「身体、行い」、口は「言葉」、意とは「こころ、思考」のこと。身と心は「身心」とも表現されるので、わかりますが、口を別に挙げていることは注目です。

思考に気をつけなさい、
　それはやがて言葉になるから。
言葉に気をつけなさい、
　それはいつか行動になるから。
行動に気をつけなさい、
　それはいつか習慣になるから。
習慣に気をつけなさい、
　それはいつか性格になるから。
性格に気をつけなさい、
　それはいつか運命になるから。

マザー・テレサの詩ともいわれるこの詩にあるように言葉は思考と行動の間に存在しています。言葉によって思考が強まり、より具体的に行動に移されていきます。意図的に悪い言葉ではなく、よい言葉を書き出してそれをイメージしていくと良い結果が生じるといった報告もよく耳にします。メジャーリーグの大谷翔平選手の高校時代のマンダラチャートの話は有名ですね。

言葉に関する教えは幾つもありますが、『華厳経』には「十善戒」といわれる次の十の戒が示されています。戒とは禁止事項ではなく、もとの言語ではシーラといい、習慣を表す意味、よい習慣を身に付けるための教えです。

具体的には、

第一不殺生（ふせっしょう）　むやみに生き物を傷つけない
＝あらゆる命を尊重しよう

第二不偸盗（ふちゅうとう）　ものを盗まない＝他人のものを尊重しよう
第三不邪淫（じゃいん）　男女の道を乱さない＝お互いを尊敬しあおう
第四不妄語（もうご）　うそをつかない＝正直に話そう
第五不綺語（きご）　無意味なお喋りをしない＝よく考えて話をしよう
第六不悪口（あっく）　乱暴な言葉を使わない＝優しい言葉を使おう
第七不両舌（りょうぜつ）　筋の通らない事を言わない＝思いやりある言葉を話そう
第八不慳貪（けんどん）　欲深いことをしない＝惜しみなく施しをしよう
第九不瞋恚（しんに）　怒りの感情に支配されない＝にこやかに暮らそう
第十不邪見（じゃけん）　我に囚われた間違った見方をしない＝正しい判断をしよう

これらの十個の戒を三業（身口意）にそってみてみると最初の三つが身（行い）に関するもの、次の四つが口（言葉）に関するもの、最後の三つが意（こころ）に関することに分けられます。口に関する戒が多いことは、いかに口が『禍のもと』となるのかを表しているような気がします。

お釈迦様は、次のようにも示されています。

『自分を苦しめず、また他の人を害しないことばのみを語れ、これこそ、実に善く説かれたことばなのである』

（ウダーナヴァルガ第八章十二）

合掌

■やすらぎ寺子屋　一二一回

令和六年九月十五日

陽だまりのような人

先日のお葬式のお話です。亡くなられた方のお名前は、スギさん。百三歳の女性で、十数年前に夫を亡くし、お墓参りにもよく来られていました。お葬式の前に、娘さんやご家族の方にスギさんのご性格やお人柄、ご趣味などのお話を伺いました。

「温かく、優しい人でした。活発で人から好かれるタイプでした。家族でよく旅行にも行きました。ついこの春も一緒に元気に出かけたのよ……」など、いろいろな思い出をお話下さいます。その話の中で「陽だまりのような人でした」との言葉がありました。いい表現だなぁと、その言葉のチョイスに感心し、また、ご家族に「陽だまりのような人」と言われるなんて、とても素敵だなぁと思いました。

この「陽だまりのような人」という言葉を聞いて私は、相田みつをさんの詩が脳裏に浮かびました。

おてんとうさまの
ひかりをいっぱい吸った
あったかい座ぶとんのような人

ご家族、お孫さん、ひ孫さんたちに囲まれての家族葬でした。喪主を務められたお孫さんが、「みんなにとってのおばあちゃん。子どもの頃、共働きで忙しかった両親に代わって、学校から帰ると、いつも笑顔で『お帰り』って、待っていてくれたおばあちゃん。身体は小さいけれど大きな存在でした。当たり前のように思っていたけど有り難く、大人になってからもいつも優しく見守ってくれて本当に感謝しています。百

歳過ぎても、悲しいものは悲しいです。でもこれからもきっと見守ってくれていると思います」と、ご挨拶をされていました。

ご家族にこのように温かい気持ちで送られる、そんな人生を送りたいなぁと感じた、あたたかいお葬式でした。

おそらくは自然体で百三歳まで過ごされたのでしょう。いえ、自然体だからこそ百三歳の長寿を保たれたのかも知れませんね。

身体の健康、心の健康、どちらが滞っても自然体で過ごすことは難しいですよね。

の　に

相田みつを

あんなに世話を　してやったのに　ろくな
あいさつもしない
あんなに親切に　してあげたのに
あんなに一生懸命　つくしたのに
のに……　のに……　のに……
〈のに〉が出たときはぐち
こっちに〈のに〉がつくと
むこうは「恩に着せやがって」と思う
庭の水仙が咲き始めました
水仙は人にみせようと思って
咲くわけじゃないんだなぁ
ただ咲くだけ　ただひたすら……
人が見ようが見まいが
そんなことおかまいなし
ただ　いのちいっぱいに
自分の花を咲かすだけ　自分の花を—
花は　ただ咲くんです
それをとやかく言うのは人間
ただ　ただ　ただ——
それで全部　それでおしまい　それっきり
人間のように　〈のに〉なんてぐちは
ひとつも　言わない

だから　純粋で　美しいんです。

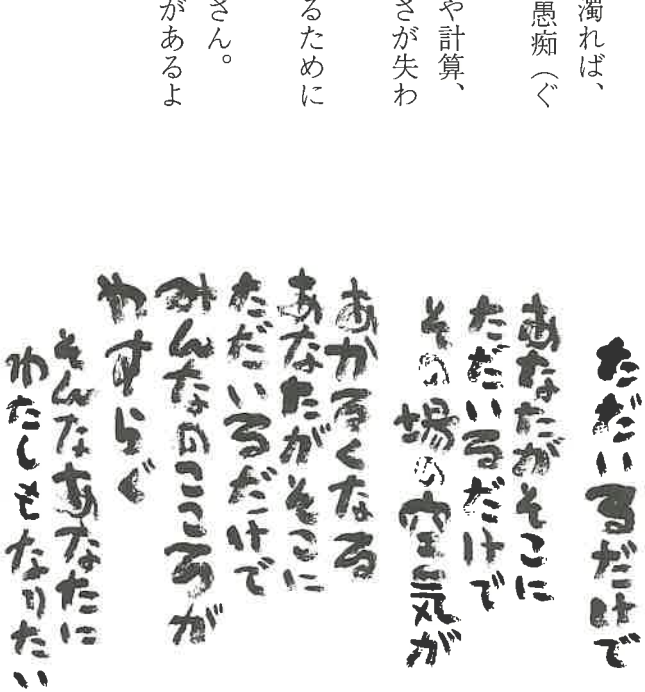
人の為に行う徳（とく）行、これが濁れば、毒（どく）となり、口（くち）も濁れば愚痴（ぐち）となる。

濁るとは純粋でないこと。損得勘定や計算、好き嫌いが働くと知らないうちに純粋さが失われ、心の健康も損なってしまいます。

花のように、自然のように純粋になるためにはどうしたらよいのでしょうか。

陽だまりのような大きな存在のスギさん。

そのご家族に接する生き方にヒントがあるような気もしました。



（相田みつを詩集『にんげんだもの』　文化出版局刊より）

■やすらぎ寺子屋　一二二回

令和六年十月二十日

永平寺の七堂伽藍

九月二十九日は道元禅師様のご命日です。永平寺では二十三日から一週間かけてさまざまな法要が執り行われます。これを御征忌（ごしょうき）と申します。この度、縁あって御征忌に随喜して参りました（二十五日から二十八日）。その間、門前に泊まり朝課へ参列される方向けに法話をするお役を務めて参りました。

朝四時二十分から五時迄です。法話をする場所は勧化（かんき）室といって、お参りにきた方が最初に入る部屋で、永平寺山内の全体図が掛けられている部屋です。その絵を見て、次のような話をしました。

永平寺は山の斜面にそっていくつもの伽藍が建てられています。伽藍とは、僧侶が集まり修行する清浄な場所の意味が込められています。永平寺の中心となる伽藍は七堂伽藍（しちどうがらん）と呼ばれ、中国禅宗の様式に由来するものです。

- **法堂（はっとう）**：説法や各種法要が行われます
- **仏殿（ぶつでん）**：ご本尊（釈迦牟尼仏）が祀られています
- **庫院（くいん）**：食事を司る台所
- **僧堂（そうどう）**：修行僧の根本道場で、禅・食事・就寝などが行われます
- **浴司（よくす）**：お風呂　入浴は大切な修行であり、静寂の中で行われます
- **東司（とうす）**：お手洗い　身心共に清浄となることを心がける道場です

・山門（さんもん）：永平寺最古の建物　二階には五百羅漢が祀られています

この伽藍の配置にも意味が込められています。よく見ると坐禅の姿が浮かんできます。

永平寺また曹洞宗の修行は『修証一如』と言われます。修行をしてお悟り（証）を得るのではなく、修行そのものが悟りを現わして（現成）していると説かれます。

『修行』の行は行うという字です。一般的にはこちらの『修業』を用いる場合が多いかと思います。こちらの修業の「業」は卒業という熟語もあるように、何か一つの目的を達成するために行う修業です。

対して私たちの修行は、行うことが大切で行いを止めてしまえば、仏道修行ではなくなるのです。ですから行持という言葉が示す通り、行いを持続していく、保持していかなければならないのです。それは、一日の内に決まった時間だけ修行するといったものではなく、起床後の洗面やお手洗い、食事などに細かい作法が定められていて、一日二十四時間すべてが修行なのです。

では、修行とは何か？　道元禅師様は、端的に「只管打坐」という言葉でお示し下さいました。ただひたすらに坐る。

しかし修行中でも一日中坐っているわけではありません。坐禅は朝起きてすぐの暁天坐禅と夕方からの夜坐が主な坐禅の時間で、日中、他の時間はそれぞれ割り当てられた公務を行うわけです。

台所、山内整備・清掃、受付や法要など永平寺の公務は多岐に渡ります。このそれぞれの公務をただひたすらに勤めていくのです。修行僧

の修行（日常生活）は七堂伽藍で行われます。

この七堂伽藍は坐禅の姿。つまり日常すべてを坐禅の中で生活（修行）していくわけです。坐禅の心で行じていく。

では、坐禅の心とはどのような心なのでしょう。例えばりんごを食べたことがない人にりんごの味を説明するのに、様々な言葉を尽くしたとしても、本当に解るのは実際に食べてみることでしょう。と、いうことでイス坐禅をしてみましょう。

坐禅の要点は調身・調息・調心　と言われます。

まず、身、姿勢を調えます。次に息、呼吸を調えます。身と息が調うことによって、心が調って参ります。心で心を調えようと思ってみてもうまくはいきません。

あれこれ頭で考えて、心に命令しても、思いは勝手にいろいろ湧いてきます。

坐禅をしても『無心になれません』と表現をする方もいます。そもそも無心を求めて坐禅をすることが間違いです。無心という目的に向かう手段としての坐禅ではなく、道元禅師様は「坐禅は習禅にあらず、安楽の法門なり」と示されています。

坐禅修行は修業のように、階段を昇るようにランクアップしていくものではありません。手を組み、足を組む姿勢では、どこに移動するわけにもいきません。

自分から外界からの刺激を求めて動くことができません。ただ、外界からの刺激を眼耳鼻舌身の五感で感受すること。そして坐っていると湧き上がってくるさまざまな考え事や思いをそのままにしておくこと。

「手放す」と言った表現をすることも多いのですが、湧き上がってくる思いを連想しないで、

考え事をしていることに気づき、また呼吸に意識を向け直すことです。そのように坐っていると、例えば、泥水をペットボトルに入れて振らず、ただ置いておくと、澄んだ水が上に泥が下に沈んでいくように、心が澄んでくる感覚が得られます。

私達の日常は、外界からの刺激を受けて、あたかも泥水のように濁っています。あれもこれもと、せわしなく反応をし、先のことに思いを巡らしてみたり、過去のことを悔やんでみたりしてしまいがちです。

『いま、ここ』に思いがむけられていない。

『いま、ここ』をしっかりと生きて行くことが坐禅のこころです。

永平寺の七堂伽藍は坐禅の姿を現しています。この七堂伽藍を歩くと空気が張り詰めていて、身が引き締まる感じがします。その中で修行をする者が、『いま、ここ』をしっかりと生きて行くことを求められているからでしょうか。

道元禅師様は、

霧の中を行けば、覚えざるに衣湿る

と示されました（正法眼蔵随聞記）。

皆さま、この七堂伽藍の空気をしっかりと、肌身に感じながらお参りして下さい。

そしてこの永平寺で感じた『いま、ここ』を生きる姿勢を、ご自宅に戻られても、思い起し、行じて下されば有り難いことです。

合掌

やすらぎ寺子屋

善光寺副住職　**前平　武男**

■やすらぎ寺子屋は「仏教に親しむ」というテーマのもと、東日本大震災の翌月に開始しました。大きな悲しみに包まれ、それでも前を向いて歩きだそうとする社会の中で、仏様の教えが、誰かの何かの拠り所になれば……と、住職と相談して始めました。

私自身、修行も学びも浅い身でありながらも、参加して下さる方々に助けられて続けて来られました。コロナ禍による休止をはさみ、気がつけば、百二十回を超えました。篤く感謝申し上げます。

■イス坐禅では、呼吸について学び、腰を立てる姿勢の補助として「back Joy」というサポート器具を使用してみたり、足をのせる踏み台を作ってみたりと試行錯誤をしながら行ってきました。

一緒にお唱えする『般若心経』。大きな声でお唱えをすることで力が湧いてきました。最後に、折々の話題や仏教にまつわるお話、お経の解説などをお話しています。これも自分自身の学びとして励みになっています。

十数年経って参加される方の顔ぶれも変わってきましたが、（初期の頃からの方も元気に参加してくれています）月に一度、変わらずにつとめていければと思っております。

日曜日の午後、お墓参りのついでにでも足を運んで下さると有り難いです。やすらぎの郷霊園にお墓のない方でももちろん大歓迎です。

お待ちしております！

●バンブーアート・フラワーアレンジメント・ペーパークラフト

やすらぎの郷霊園管理事務所内に飾ってあります。

【アートフラワー】　臼井　美奈子　様

四季折々に素敵なアートフラワーを入れ替えて下さいます。

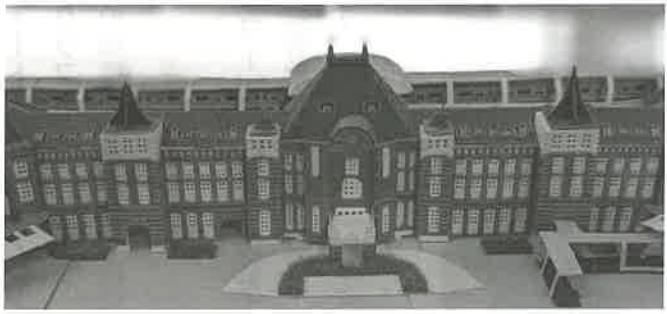
【バンブー・アート】　中島　啓次　様（霊園職員）

竹を細かく、くりぬいての作品です。

【ペーパークラフト】

松田　和泰　様
（霊園職員）

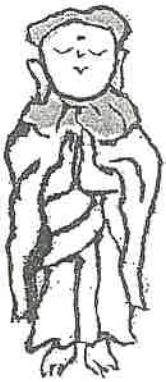
東京駅のミニチュアです。



●墓じまい

今年も、墓地継承に関するご相談が多く寄せられました。社会変化に伴いお墓に対する考え方も多様化していることを実感します。それでも大切な亡きご家族、ご先祖さまに手を合わせて祈る、供養の心は変わらなく継承されているものです。

横浜やすらぎの郷霊園では二十年前より、園内の一画に永代供養墓を設置し墓地継承にお悩みの方々に対応して参りました。お気軽にお問合せ下さい。



◇善光寺永代供養墓◇

～やすらぎの碑・やすらぎの塔～

1、合葬　※やすらぎの碑に埋葬。
単独型　永代供養料　五〇万円
夫婦型　永代供養料　八〇万円
三十二年間骨壷にて安置し、以降やすらぎの塔に合祀

2、合祀　※やすらぎの碑に埋葬。
一　霊　永代供養料　三〇万円
十年間骨壷にて安置し、以降やすらぎの塔に合祀

3、合祀2　※やすらぎの塔に直接合祀。
一　霊　永代供養料　二〇万円
合同合祀供養祭にて合祀

○ご希望の方には石版に一名づつ墓誌を彫刻致します。（有料・三万円）
○他霊園からの改葬など複数名の契約（三霊以上）については金額のご相談も承ります。
○生前申込も受け付けております。
○詳細はやすらぎの郷霊園管理事務所までお問い合わせください。

合同合祀慰霊祭

◇やすらぎの郷　合同合祀慰霊祭◇

横浜やすらぎの郷霊園では年に一度、合同合祀慰霊祭を執り行っております。骨壺での合祀期間を迎えた御霊を大自然にお戻しするご供養です。
桜の時期に行われるこの慰霊祭には毎回ご縁の方々が参集されご焼香されます。
この合同合祀慰霊祭の模様は次のＱＲコードからご覧いただけます。永代供養墓にご関心のございます方は是非ご覧ください。

〒241-0802
横浜市旭区上川井町1749-1
TEL　045(924)0210
FAX　045(924)0239
ホームページ
http://www.y-yasuraginosato.jp
eメール
info@y-yasuraginosato.jp

合同合祀慰霊祭

催事案内

当寺では、坐禅会や書道教室などさまざまな催事を行っています。

各種ご案内については、適時ホームページや掲示板等でお知らせ致します。

ご興味がある方は善光寺までお問い合わせ下さい。ご一緒に学びましょう！

お問合せ・お申込み

善光寺　〒二三四―〇〇五三
横浜市港南区日野中央一―一二―九
電　話：〇四五―八四五―一三七一
ＦＡＸ：〇四五―八四六―二〇〇〇
Ｅメール：info@zenkouji.net
ＵＲＬ：http://zenkouji.net

坐禅会

お寺で一緒に坐禅しませんか。善光寺の坐禅会では、日頃坐禅に親しんでいる方だけでなく、初めて坐禅する方も多くいらっしゃいます。独りで坐るのではなく、誰かと共に修行できることに坐禅会の大きな意味があります。

坐禅を始める前は、どなたも個性のあるお一人お一人です。ところが、一度坐禅が始まると、そこには、男女の性別も、年齢差も、出身地や学歴、何一つ関係無く、ただ尊い命が並んでいるだけ。差別や、思い上がりや卑屈さもありません。皆さまと一緒に坐り、この生きとし生けるものの本来の姿を修行するのが坐禅の醍醐味なのです。私達は、他と比較すると悩みや苦しみを背負い込んでしまいます。比較をしない坐禅は、すべての壁を越えています。この坐禅の心で日々を過ごすなら清々しく生きる事ができる、それを仏教では大安楽と言います。お時間さえあれば何も要りません。ご一緒に修行しましょう。

■早朝参禅会　毎月第1日曜日　朝6時から

早朝参禅会参加ご希望の方は、前日午後7時までにご連絡下さい。

■日曜坐禅会　毎月第4日曜日　午後2時から

参禅ご希望の方はご連絡下さい。当日でも結構です。

それぞれ日程は寺の行事によって変更があります。
服装はゆったりとしたもの。靴下は履きません。
時計やアクセサリーは、はずして下さい。
参加費はすべて無料です。

写経会

写経は仏教経典を書写することです。

自らの信仰を深めるだけでなく、ご先祖さまの供養、あるいは諸願成就の祈りを込めて行う一つの修行です。上手い下手は関係なく、お経を一文字一文字心をこめて書き写す中で、自己と見つめ合い本来の姿に気づいていくことが写経の最大の功徳です。心を調え、ともに写経してみませんか？

【日時】毎月第4金曜日
午後2時より1時間半

【場所】善光寺

【指導】中井翠楊先生

※お手本・筆・硯・墨・写経用紙なども一式準備します。ご自分の道具を持参されても結構です。

※参加ご希望の方は準備の都合上、ご連絡下さい。当日でも結構です。

書道教室

書は十人いたら十通りの書き方があります。とても丁寧に書く人や、走り書きでせっかちな字など、その人の個性が溢れ出るものです。しかし、その個性を受け入れられず、字に対して劣等感を抱いている方も少なくないでしょう。

善光寺では仏様に見守られている中で書道教室を開催しています。仏様の前では、誰もが互いを否定することなく、わけ隔てのない心となります。

初心者の方も経験者の方も、大人も子どももみんな一緒になり、仏様とともにお互いの垣根をこえて書に向き合えるのはお寺ならではの魅力です。一度、お寺の書道教室に来てみませんか？

【日時】毎月第1・第3土曜日
1部：午後1時より3時
2部：午後3時半より5時半

【指導】酒井翠都先生

【参加費無料】（お手本代 ¥800／月）

※参加ご希望の方は、ご連絡ください。

ご詠歌教室

梅花流御詠歌とは、お釈迦様や祖師方を讃え、ご先祖さまを敬うこころを旋律にのせてお唱えするものです。最初に発声した人の音程に合わせてお唱えいたします。一人がみんなに、みんなが一人に合わせることで成り立つのが御詠歌の持つ良さです。そこには上手いも下手もありません。ご指導して下さる渡邊清徳先生のお唱えは、それだけで心救われ、歌とともにみ教えが体に染み込んでゆくようです。

善光寺御詠歌教室では、いきなり法具を持つことはせず、お唱えを中心に、その中に込められたみ教えとともに、先生が優しく教えて下さいます。ただひたすらに仏様の教えを歌に乗せてお唱えする。支え合いながら一つになる。御詠歌の素晴らしさを一緒に味わいましょう。

【講師】栃木県高徳寺住職　渡邊清徳老師

※第2木曜日午後2時～
都合により変更の可能性もありますので事前にご確認下さい。

1月	お休み	7月	10日
2月	13日	8月	お休み
3月	13日	9月	11日
4月	10日	10月	9日
5月	8日	11月	13日
6月	12日	12月	18日※

※第3木曜日

ばいかくん

ばいかさん

華道教室

華道と禅の修行はとても似ています。心を調え、花の命と向かい合うことで、そのものの持つ本来の美しさが導き出されるのです。作品は自らの心の現れ。心がざわつけば花も乱れ、欲望に満ちていれば五月蝿いものとなります。逆に、心が調っていれば花の良さを活かした作品となっていく。花と向かい合うことで自分を知ることができるのです。

花材は、毎回、先生自ら市場に足を運び、選定し、その季節の良さを盛り込んだ新鮮なものを揃えて下さいます。生けた花材は、家に持ち帰ってご自宅で生けることも可能です。

指導していただく先生は、たちばな賞連続受賞歴を持つ、本多輝隆先生です。経験豊富で知識も多く、花にまつわる風習や、花言葉など、さまざまな角度から生花を捉え、楽しみながら華道を教えて下さいます。華道教室に参加して、自らの人生に華を添えてみませんか？

毎月第2日曜日　午後2時～3時

【参加費無料】

お花代として、毎回 千円（花材によっては一五〇〇円）ご準備ください。

指導：本多輝隆先生

華道教室「花塾」

（港南区丸山台）

※参加ご希望の方は、一週間前までにご連絡ください。

やすらぎ寺子屋

～ほとけの教えに親しむ～

やすらぎの郷霊園では、「やすらぎ寺子屋」を開催しています。お釈迦様や祖師方のお言葉に触れ、共に学びあい、仏の教えを日常に取り入れて心やすらかな日々を過ごす。そのきっかけになればと始めたものです。約一時間の内、前半は椅子坐禅、後半は法話。その後、茶話会となります。お気軽にお問い合わせ下さい。

担当：善光寺副住職　前平武男師

お申し込み・お問い合わせ

毎月第三日曜日　午後2時～3時

場　所：横浜やすらぎの郷霊園管理事務所二階
横浜市旭区上川井町一七四九―一

電　話：〇四五―九二四―〇二一〇
ＦＡＸ：〇四五―九二四―〇二三九
Ｅメール：info@y-yasuraginosato.jp
ＵＲＬ：y-yasuraginosato.jp

参加費は無料です。

やすらぎの郷の花まつり
お誕生仏

コキアの花壇

育英会寄付者

■令和五年十一月～令和六年八月

上田市　大圓寺　石黒玄章　殿
港南区　南　有里　殿
港北区　瀧澤道子　殿
戸塚区　福泉寺　岩波弘道　殿
港南区　せんざん　山泉佐織　殿
台東区　翠雲堂本店山口肇　殿
町田市　鈴木幸雄　殿
緑区　豊島節夫　殿
港南区　日野石材工業協同組合　殿
岡山県　観音寺　黒田法正　殿
新宿区　真清浄寺　吉田日光　殿
茨木市　乗雲寺　安井隆同　殿
戸塚区　冨士哲也　殿
新宿区　東亜建設工業㈱　殿
平塚市　山口義男　殿
柏市　伏見邦弘　殿
都築区　阿部匡宏　殿
港北区　伊藤雅章　殿
港南区　佐藤和彦　殿
港南区　鳥居悟　殿
佐倉市　遠藤敦　殿
磯子区　小澤正氣　殿
川崎市　宮田富夫　殿
旭区　河村久子　殿
東近江市　正瑞寺　田中智誠　殿
旭区　阿部毅正　殿
長野県　正眼院　内山款偉　殿
厚木市　興教寺　浅摩泰真　殿
富山県　浅香恵　殿
港南区　桂川正克　殿

ありがたいご寄付を賜り、
心より厚く御礼申し上げます。

★総持寺に参拝された方から喜びのお手紙が届きました

総代　山口義男様

善光寺さんの素晴らしい企画力、素早い対応に檀家として感謝しています。

合掌

横浜市緑区

相馬智慧子様

このたび、大本山總持寺参拝の折は大変お世話さまでした。又、記念写真ありがとうございました。

立派な大祖堂での祖師方のご法要、感動致しました。法要中の若いお坊さまの所作（歩き方）等を間近で拝見でき、とても印象的でした。

先代ご住職さまのご供養もさせて頂き、本当によかったです。法要前の諸堂の拝観、修行の厳しさがひしひし……と。そして待望の精進料理。鶴見で生まれ育った私でもなかなか得られない貴重な体験でした。ありがとうございました。

横浜市港南区
中井眞理子様

新緑の美しい季節となりました。写経会がご縁で大本山總持寺での本山開祖瑩山紹瑾禅師様七百回大遠忌にお誘い頂き、誠に有難うございました。大祖堂での荘厳なおつとめ、お経の響きに感動致しました。

貫首様のお言葉、おやさしいお人柄に触れ、心を打たれ、清々しい気持ちで帰宅致しました。

これからもこのご縁に感謝して精進致します。

善光寺様の益々のご発展と皆々様のご健康、お心の平安をお祈り申し上げます。

有難うございました。

合掌

横浜市旭区
石井光子様

写真ありがとうございます。七百回大遠忌の年に参拝できた事、有り難くもあり、感謝しております。

ありがとうございました。

お昼に頂いた精進料理と共に伺った講話を時折箸袋を眺めながら想い出しています。

東京都

高橋卓子様

前略　お写真、早々にお送り下さりありがとうございました。

何十年ぶりの總持寺。リニューアルされた本堂に入り、太鼓、木魚、鐘の音の素晴らしさに感動の一言でした。

このような会に参加させていただき、本当にありがとうございました。

横浜善光寺
南無阿彌陀佛
沙門
三喜庵

大遠忌で多忙の中恐縮

京都市
清水寺貫主　森清範様

冠省　『成寿』第五十三巻を受け取りました。ありがとうございます。

本年瑩山禅師様の大遠忌でご多忙のところ恐縮に存じます。

合掌

先代方丈の実践力に感銘

神奈川県
宮本延雄先生

謹啓　改歳之令辰

このたび『成寿』冬季号第五十三巻を御恵贈賜りまして有難うございました。

内容豊富な機関誌を拝読いたし教化伝道等と共にアーカイブに往時を思い出し先代方丈黒田武志老師の偉大さと実践行に感銘を受けております。

御山内御一統様の法身堅固を御祈念申し上げ御礼申し上げます。

合掌

仏教の真髄をお示しに

長野県
大圓寺　石黒玄章老師

拝復『成寿』第五十三号を拝受いたしました。

どの頁を読んでもすべて仏さまと繋がる内容に、善光寺さまの興隆が伝わります。成寿アーカイブで、先代さまの母校での記念講演抄録は仏教の真髄をお示しになり、学生さんにも心に響くお話だったと思います。

コロナも落ち着き、一斉法要も盛大に修行され、方丈さまはじめ山内一同皆々さま益々のご健勝を祈念しております。

追伸　野球チームの報告も楽しみにしております。

合掌

誌面より「脚下照顧」との忠告を聞きました

千葉県
山崎　康弘様

新年を迎えました。しかし、中東やウクライナの惨状を目にすると辛い気持ちです。そして、能登半島地震の騒ぎです。人為と自然の仕業に心の持っていき様がありません。

『成寿』を拝見しました。善光寺の日頃の御活動を知り、又、仏教の知識を教えて頂きました。改めてですが、〝脚下照顧〟根元の部分を良く考えろと忠告されたように思いました。

善光寺様のこの一年の御活躍をお祈り致します。

今年もよろしくお願い申し上げます。

学ぶことが多く　感謝

宮城県
早川　敦様

謹啓　この度は『成寿』冬季号を御恵贈賜りまして大変有難うございました。

老師の有り難い御法話、諸

先生方の御寄稿を拝読し、学ぶところが大変多うございました。御山内皆様の一層のご清栄をご祈念申し上げます。

九拝

益々のご発展を祈念

三鷹市　磯村　啓子様

前略『成寿』第五十三巻拝受致しました。ありがとうございます。

善光寺様の益々のご発展を心より祈念致しております。

どうぞよいお年をお迎えくださいませ。

「我が家も曹洞宗です」のご縁

富山県　浅香　恵様

前略　ごめん下さいませ

『成寿』第五十三巻を送って下さいましてありがとうございます。特に倫子様の御孫様方の成長がわかってとてもうれしく思います。

平成九年三月に先代武志方丈様に小矢部市で講演をしていただいた折り、「我が家も曹洞宗です」と申し上げたら、「御縁があったのですね」とニッコリされて後光がさしていました。

どうかこれからもよろしくお願いいたします。

かしこ

私はこうして今も生きている

千葉県　藤田　正子様

昨年「今年もあと二日かあ……」などと考えていると、ふと届いたこの『成寿』のプレゼントは、本当に私にとってはうれしく、又、有り難くて一人涙ぐんでしまう程の感激にひたります。

御本の表紙の亡き師、伊藤三喜庵先生の美しく、個性的な水墨画の御作品。中のペー

ジにも載っている沢山の作品が目にとまり「ああ、私は今もこうして生きて、感激して力をもらっているのだなあ」と、つくづく感謝の気持ちでいっぱいになります。

年を重ねるたびに、この御本はそういった人の心を「感謝すること」の大切さで一杯にして下さいます。黒田先生、ありがとうございました。

善光寺参詣がやっと叶い

ナリス化粧品 旧社員
村島　哲郎様

先日ご無礼にも突然訪問し誠に申し訳ございませんでした。それにもかかわらずお忙しい中、御住職はじめ皆様にご対応賜り誠にありがとうございました。

お陰様で長年の想いであった「善光寺参詣」がやっと叶い、安堵いたした次第でございます。お話では聞いておりましたが、その通りの立派な寺院に育て上げられた先代様。また、その御意志を継がれた御住職はじめ皆様の御努力に敬意を表します。

私自身は既にナリス化粧品を離れた身ではありますが、在職時の思い出は数多くあり、特に入社当時から満義社長からいつも教えられた「人様のために」や黒田先生から受けた坐禅の教義は今の自分を造ってくれたバックボーンになっていると言っても過言ではございません。あらためて感謝申し上げる次第です。また機会があれば是非伺わせて頂きたく存じますので、その節には厚かましながらよろしくお願いいたします。

善光寺様の益々のご発展を祈念し、御礼とさせていただきます。ありがとうございました。

合掌

追伸：今月二十三日に大阪で成寿会（ナリス社員のＯＢ会）がございます。数多くの先輩方とお逢い出来ますので、そ

の席で今回の訪問の話を皆様にして黒田先生の思い出に浸りたいと思います。

編集後記

○成寿五十四巻をお届け致します。
○今年は、大本山總持寺御開山、太祖常済大師瑩山禅師の七百回大遠忌の年でした。五月九日には檀信徒の皆さまと共に参拝をし、先代住職大圓武志大和尚のお位牌を納めることが出来ました。總持寺大祖堂に数多くのお位牌が並ぶ中、御開山楳庵白純大和尚のお位牌と並べてお参りできたことは感激でした。
○アーカイブは、京都清水寺に建立された、瑩山禅師顕彰碑のお話を掲載致しました。平成十三年(二〇〇一年)十一月の除幕式から、二十三年が経ちました。
大遠忌に因み顕彰碑も注目され、宗門でも清水寺とのご縁が更に深まりました。
○その顕彰碑に名前が刻まれている先代住職夫人黒田倫子さまが五月十七日ご逝去されました。五十五年にわたる善光寺の歴史と共に過ごされた方でした。開創以来、檀信徒の皆さまと共に歩んで下さいました。その遺徳を偲び多くの御寺院さまやご縁の方々がご焼香にお越し下さいました。衷心より御礼を申し上げます。また、葬儀に際し、本堂やテントの設営、受付やご案内、駐車場などのお手伝いに至るまで、株式会社板橋さまにご尽力頂きました。細かい点までお心配り頂き、無事に式を勤めることが出来ました。有難う御座いました。
○今年も大谷翔平選手の話題が持ちきりでしたね。みんなを笑顔にするその活躍と人柄。メジャーリーグに興味はなかったけれど、大谷選手の活躍で『にわか』メジャーリーグファンになった方も多くいらっしゃいました。ワールドシリーズ優勝までのストーリーは、すごいとしか言いようがないですね。対して、昨年発足した善光寺の野球チームの今シーズン成績は1勝7敗(一勝は不戦勝)でした。勝つことの難しさを感じたシーズンでした。それでもめげずに、楽しんで来シーズンに挑みます。
○来年の新年祈祷会(一月九日)は回数を四座行います。ご希望の時間帯をお選びの上お申し込み下さい。
来る年が皆さまにとりまして素晴らしい年となりますようご祈念申し上げます。

成寿　第五十四巻
令和六年十二月二十日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野中央一丁目十二番九号
電　話〇四五(八四五)一三七一
ＦＡＸ〇四五(八四六)二〇〇〇
印刷所　㈱中外日報社

横浜善光寺